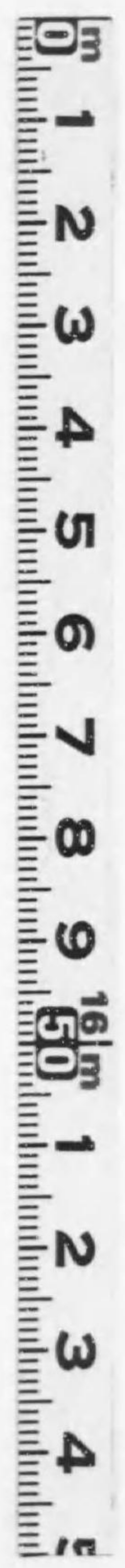


古屋鐵石著

驚神的大魔術

東京精神研究會

大正
5. 5. 20
內交



始



字116
52

通志卷之十一



大勳伊藤博文公

序文

友人某氏古屋鐵石所著驚神的大魔術と題する一書を携へ來り評語を需めらる余未だ其内容を見ざるも表題を讀みて已に驚天動地せり而して其目次を検するに及び始めて本書の梗概を知るを得たり抑々自然の現象には物質の作用に出づるものと精神の作用より起るものと二種ありて精神作用中には自然の規則を以て律し難きこと多し之を超自然といふ超自然たるものは果して超自然なるか否やは研究上の一問題なり今本書中に編輯せるものは此所謂超自然的現象を蒐集せるものなり近來學術の進歩漸く進みて物理より心理に入り更に進みて超自然に入りて討究せんとす本書の如きは只世俗の好奇心を釣



歐米在住の精神學者より著る者許に寄るたせる簡の中の一者

るにあらざして斯る研究の参考に資すること多かるべし請ふ
世人其表題を見て驚神せずして其内容を讀みて覺神する所あ
れ一言を記して本書に題す

和田山天狗松下一仙史 井上甫水

自序

此世に於ける奇妙不思議の現象中、手品及び理化學の應用に非
ずして、心理學哲學の應用にて成る所の者を集めて其理を探り
たるに、主として精神作用なり。之が立證は催眠術を以てすれば
明白なり。換言すれば此世にある奇妙不思議の現象は、多くは催
眠術上の現象に外ならずと信ず、既に其原理明かとなれば、從て
其現象を惹起する敢て難からず、況んや簡易に學ひ得る、催眠術
が其基礎なるに於てをや。
著者は本書に記載せる諸術を此理に基きて悉く實驗し成功し
たり。本書は之れが諸術の學理上の根據、實驗の方法を通俗に記
述し、何人にも一讀すれば之等の諸術を實驗し得る様にせん
ことを期せり。唯々僅かの紙面の中に、數多の不思議の現象を網
羅せんとしたる故、所説梗概に過ぎずして遺憾の點少なからず。

他日更に改訂増補すべければ大方の學者幸に教を垂れよと云
爾。

自序漢譯

二十世紀中奇妙不可思議之現象。詎手品及理化學之應用乎哉。莫非由於
心理學哲學之應用所腋集而成。探其理之主腦精神作用也。證斯理於明晰
即催眠術也。今世之奇妙不可思議之現象。多不外乎催眠術上之現象。苟能
明其原理。則諸現象於宇宙間不難隨處惹起。况催眠術學其基礎得簡易學
成耶。著者於本書所記載之諸術。咸基此理。又悉從實驗而有成效者。以諸術
之學理上之根據。及實驗之方法。公諸於世。務期通俗易解。無論何人讀此。於
斯諸術容易自能實驗。奇妙可驚。雖僅此少數之篇頁。而諸多不可思議之現
象。咸網羅於其中。茲不過謹陳梗概。至遺憾之點。自當不少。俟諸他日更期改
訂増補。并冀大方學者不吝垂教。是幸云爾。

明治四十一年一月

古屋鐵石謹識

驚神的大魔術 (一名精神大不思議)

目次

目次

第一章 緒言……………一

 魔術とは何ぞや ● 不可思議と不可知 ● 魔術の定義 ●
 物質的魔術 ● 精神的魔術 ● 不可思議の現象と催眠術
 との關係 ● 木葉を紙幣に見せる術

第二章 米國狐狗狸術 (フランセット)……………九

 過去現在未來のことを知らす具 ● 其構造法と使用法
 ● 實驗例と學說 ● 精神の顯在潛在とは何ぞ ● 人格變
 換とは何ぞ ● ビネー氏と福來博士との説

第三章 日本狐狗狸術……………二三

第四章

降神術(スピリチズム)……………二八

構造法と實例 ● 井上博士の實驗と説明

口寄魔 ● 乘氣術 ● 中座術 ● 豫言術 ● 交靈術 ● 交神術

● 神人交感術 ● 交天術 ● 易筮術 ● 天源術 ● 九星術 ●

淘宮術 ● 占夢術 ● 似非降神術の内幕 ● 井上博士とピ

ネー氏との説

第五章

禁厭術(まじない)……………三八

今日醫士が行ひつゝある禁厭 ● 鎮魂術 ● 神佛の靈顯

ある理由 ● 不思議なマジナヒ法 ● 加持と祈禱との區

別 ● 信仰療法 ● 魔術應用心理療法 ● 魔術應用精神療

法 ● 切支丹バテレン術

第六章

見神術……………五〇

見佛術 ● 神とは何ぞや ● 佛とは何ぞや ● 見神自在法

第七章

幽靈對話術……………五五

● 井上福來兩博士の説

靈魂の滅不滅 ● 靈魂と幽靈との異同 ● 生靈術 ● 死靈

術 ● 人魂變現術 ● 狐火術 ● 人三化七出沒術 ● 神佛の

祟 ● 鬼門 ● 方位 ● 相性 ● 縁起 ● 日柄 ● 迷信の原理

第八章

眞言秘密術……………六二

眞言秘密とは何ぞや ● 護身法と九字 ● 眞言秘密と催

眠術

第九章

不動金縛術……………六九

無形の鐵鎖に身は繼がる ● 駭絶の實驗例と學説

第十章

精神感傳術(テレパシー)……………七二

無線電信的精神の感應 ● 遠感術 ● 思想交通術 ● 著者

が伯爵邸にてなせし實驗

第十一章 天眼通術 (クレボヤンス)……………七六

座ながら遠方の情況を知る法 ● 縮地術 ● 天耳通術
● 神通術 ● 遠觀術 ● 未來豫知術 ● 震天動地の實驗
● 學理上の根據

第十二章 火渡術……………八一

鎮火術 ● 石油火中通過術 ● 火渡の方法原理 ● 歐米
人を驚かしたる火渡の實驗

第十三章 狐遣術……………八八

狐化術 ● 狐憑術 ● 飯綱遣術 ● 管狐術 ● 人狐術 ● 犬
神術 ● 狸遣術 ● 貉遣術 ● 津輕伯爵を惱ませし老狐

第十四章 讀心術……………九五

讀心術必要の理由 ● 察心術 ● 讀想術 ● 觀心術 ● 實
驗法と理論 ● 井上博士とピネー氏との説

第十五章 骨相術 (フレノロジー)……………一〇三

人相術 ● 手相術 ● 面相術 ● 爪相術 ● 秘密看破術
● 骨相的心理矯正 ● 心性學の真髓 ● 市川高橋兩
學士の説

第十六章 忍術……………一一八

身軀隱現術 ● 隱身術 ● 隱形術 ● 忍術療法

第十七章 仙術……………一二〇

奇怪の現象 ● 延命術 ● 長命術 ● 尺地術 ● 吸氣術
● 天人術 ● 天源養氣術 ● 威通醫術 ● 仙術療法 ●
斷食療法 ● 待饑療法

第十八章 幻術……………一二八

劍を飲み火を掴む術 ● 幻術療法 ● 實例と理論

第十九章 氣合術……………一三〇

第二十章

棒寄術

武士道の骨子 ● 膽力鍛練術 ● 人心操縦術
● 靈棒術 ● 寄棒術 ● 開棒術 ● 實驗例と學理 ● 井上博士の説

六

第二十一章

火箸曲術

小指にて鐵棒を曲げる術 ● 心念術 ● 實驗法と學理

第二十二章

武道竹折術

空竹割の光景 ● 武道の極意 ● 物理心理の説明

第二十三章

男女交際の魔術

交際と成功との關係 ● 魔術的男女交際の極意 ● 色魔術

第二十四章

地獄極樂漫遊術

何をか地獄極樂と云ふ ● 天國 ● 地國 ● 阿彌陀如來 ● 眞如 ● 無名 ● 天 ● 大極 ● 法 ● 性 ● 天帝 ● 心 ● 精神とは何ぞ ● 結論

驚神的大魔術目次終

驚神的大魔術(一名精神作用)大不思議

文學士 堀内複人校閱

古屋鐵石編著

第一章 緒言

此世に於て何にが不思議なり不可知なりと云ふも、魔術程不可思議不可知の者は他になからん、世人も又不思議不可知のことをば魔術的なりと云ふ、然れども不思議の現象は悉く魔術なるかと云ふに決して然らず、之を通俗の意に求むるも、不可思議なることにして魔術と云はざる者多し、又人智を以て知ること能はざる所謂不可知のものにして魔術と云はざるものあり、殊に不可思議と云ひ不可知と言ふも、各自の智識學問の高下によりて甲の不可思議は乙の不可思議にあらず、丙の

不可知は丁の不可知にあらず、之れにつき面白き事あり、先年内地人が北海道へ渡りたる時、アイヌは内地人の携へ居るマツチを初めて見、大に不思議不可知のものと嘆賞して措かず、マツチ一個と大熊の皮拾枚と交換して之を得、大に喜びたりと云ふ、當時アイヌの目に映じたるマツチは俗に所謂魔術的の現象に見へたるならん、吾人は其アイヌの無智不學を笑ふと雖も、吾人が今日不可思議なりと絶叫し、不可知なりと驚嘆する所のことも数年の後に之を見ればアイヌのマツチに對すると同様の笑の種を蒔き居るやも知れず、
若し眞に不思議不可知の者を魔術なりとすれば、學者や智者の稱する魔術と、愚民の唱ふる魔術とは、異なることとなる、益々智識學術が進歩すれば、するに従て魔術の範圍は狹まることとなる、畢竟魔術とは學理上智識上研究の届かざる者を云ふこととなる、之れ余が首肯すること能はざる所なり、古來魔術に就て定義を下したるものあり、其中稍々見るべき者を左に紹介せん、
魔術とは鬼神を降參させ、靈魂の實在を現はすが如き神妙不可思議のことをなす術を云ふ、

魔術とは精神作用即ち心性の感通力に因つて人及び諸動物の心身を支配し、或は物質の變換を試むるの方術を云ふ、
と之れでは單に魔術の現象の一部を擧げたるに過ぎずして、魔術其物の解釋とならざるの嫌あり、又諸書に魔術の現象を記したる所を見るに、多くは下らぬ手品なるも、稀には活動寫真にて示す魔術の現象の如く、實に幻妙、靈妙、神妙、微妙、珍々、妙々を極めたるものあり、斯る奇怪千百萬の現象が何の理によりて起るや、想像だも及ばず、然しながら退て之を考うれば、多くは奇を街はんが爲めの捏造説もあらん、或は幻覺錯覺もあらん、
東京の各劇場に於て大魔術(マジック)てふ大看板を出して開演したるものあり、行て見たるに手品にして、種仕掛によりて巧に人目を晦ますものなりき、例へば女子を箱中に入れ開き見れば空虚となり居り、其女子は他より現はると云ふ類なり、其種仕掛を知れば實に馬鹿毛たことなり、即ち箱底は自在に開く仕掛けとなし置き、箱底より床下に抜けて樂屋に行くもあり、或は箱の奥行深くして、奥に潜み其前に戸を閉ぢて空虚と見せる如き類なり、只其れを巧になす爲め、容易に種を發見し

得ざる故、之を見る者は不思議に思ふて興味あるなり、此光景を魔術と云ふ、意味によれば、掏盜が人目に觸れぬやう手早く人の懐中物を取り取る如きも魔術と云はざるを得ざることとなる、淫奔娘が父兄の目を忍びて、情夫を寢室に誘ひ入るゝ如きは大魔術と云はざるを得ざることとなる、余は人目を晦ますとをば魔術と思はざるも高貴の家に生れし絶世の美人が、卑賤なる人三化七の如き醜男に戀愛して何者をも犠牲に供して顧みざる關係は不可思議なる魔術關係と思ふ、其ことは後に述べん、況んや學校に於ける理化學の實驗は、慥に魔術と云はざるを得ざることとなる、斯の如き物質作用による奇妙の現象も魔術と言ふて可なるや否やを知らず、殊に余は本書に於ては物質作用による、不思議の現象は除きて論ぜず、専ら精神作用によつて現はるゝ不思議の現象を論ぜんとするものなり。

論じて爰に至らば魔術てふ者なしとするを可とするか、學者は魔術其者を認めざるか、余は或人の云ふ魔術を魔術とせずして、精神作用によりて起る處の奇妙の現象を集めて、之を大魔術と稱することとせり、此説の當否は學者の批評に委せんと欲する者なり、或人曰く此書の目次に列擧したる所の者は魔術にあらず、羊頭を掲

げて狗肉を賣る者なりと、余は默聽し此類の批評益々起らんとを望み居りたるに、傍にありし友人は或人に反問して曰く、君の云ふ所の魔術とは何ぞや、と或人曰く我輩は魔術師にあらず、よつて魔術の何者たるを知らずと、傍にありし別の友人或人に問を起して曰く、然らば魔術にあらざるかと思はるゝ如き奇妙の現象につき研究したることありや、或人曰く我輩は職務多忙にして未だ其點に注意する遑なし、と一座の友人異口同音に叫んで曰く、魔術とは何なるかの定見なくして、漫然魔術非魔術を論ぜんとするは、輕舉に失せざるか、と或人終に默せり、元より此書に蒐集したる所の者は、科學上より分類し掲載したる者にあらざる故、著者自身さへ背汗に堪へず、よつて學者の嗤笑は甘んずる所なり、却て本書の別名なる、精神作用大不思議の方、内容に合せるとの説を採らるゝ學者多きやも知れず。

此世に於ける奇妙不思議の現象は、よく其原因を探究して見れば、主として精神作用に依る、勿論或場合に於ては錯誤に出づる場合あり、物理的原因による場合もあるべしと雖も、主として精神作用によるものなり、只世人が口にし筆にしたる處は、針小棒大にして如何にも奇妙不思議に堪へざる者の如くなるもよく其真相を

調べて見れば、決して面かく不思議のものにあらざるなり、殊に或る人々が爲めに
 する所ありて、根も葉もなき無根の不可思議を唱へ出すや、萬犬實を傳へ、又其嚙に
 尾が附き緒が附きて、全く不可思議のものとなることあり、世間によくある不思議
 は概ね此類なり、然れども獨り精神作用の顯はす不思議に至りては、何等の種仕掛
 あるにあらざりして、實に奇中の奇、怪中の怪たる現象を呈することは事實なり、余は
 今日の處之れ以上の不思議の者を發見せず、余の愚考によれば、巧に精神作用を惹
 起する方法こそ、眞に魔術と云ふも可ならんと信ず、從て魔術は決して卑しむべき
 ものに非ず、學理の應用なり、故に學者の研究すべきものなり、決して好事家や香具
 師の專有物にあらざりと信ず、本書に集めし所の奇妙なる諸現象は悉く精神作用を
 以て余は其尤なるものと信ず、尤も或る場合に於ては其他の關係の附隨せる場合
 もあるべけれども、主として精神作用なりと信ず。
 精神作用とは何ぞや、之を解し易く約言すれば、精神に確信せる如く五官の感覺及
 び肉體に變化を生ずるを云ふ、試に見よ、閉目して我は今金殿玉樓に座して、珍石奇
 木を以て成れる庭園を眺め居るものなり、と心中に確く思ふて居れば、身は實地其

境にあるが如く爽快禁ずる能はず、之に反して汚物累々たる其中に吾は今居る者
 なりと觀念せんか、身は實際汚物中にあるが如く不快に堪へざるものなり、催眠術
 を應用し此作用を擴張すれば、寒を以て暑とし、暑を以て寒とし、苦を樂とし、樂を苦
 とする意の儘なり、即ち治病矯癖更に其作用を高むれば、木葉が紙幣に見へ、動物が
 人間に見ゆ、即ち錯覺或は全く外界に何物もなきに幽靈或は神佛見ゆるに至る、即
 ち幻覺ものなり、此は唯視覺に於ける例を示したるに過ぎずして、其他聽覺、嗅覺、味
 覺及び觸覺も悉く視覺同様に變化するものなり、斯の如き精神作用による變化は
 自然に生ずることあり、精神病者の如き之れなり、或は人爲によりて之を自在に起
 すことを得、催眠術の如き之れなり、如何なる理由によりて催眠術によれば之を自
 在に起すことを得るか。

催眠術とは何ぞや、催眠術を以て人を催眠せしむれば、催眠者は術者の暗示即ち云
 ふ通りに、五官の感覺及び肉體に變化を生ず、例へば術者が催眠者に向つて、汝の目
 前に幽靈顯はれたりと云へば、實際何者もなきに幽靈見へ、幻覺唐辛を與へて之れ
 は甘ひ菓子なりと云へば、之を喰ふて甘き菓子の味あり、錯覺之れは抑も何故ぞや、

催眠状態は全く無念無想の境にありて、自動的に何等の觀念をも生ぜざることを殆ど明鏡の如き清らかな精神なり、よりて術者の云ふ通りに觀念して毫も之を疑はざるを以て身心相關の原理、即ち心に想ふ通りに肉體は變化すると云ふ精神作用の原理によりて、術者の云ふ通りに五官の感覺及び肉體に變化を及ぼすなり。之れによりて催眠法は精神を無念無想に導く手段なり、小兒の精神の如き無念無想の精神となし置き、其れに暗示してよく受け入れしむるなり、代言すれば注意の凝集とか五官を單調に刺激するとかして、精神を無念無想に導き、暗示したる事柄にのみ注意を専らならしめて、精神作用を盛ならしむるなり。催眠術の中に自己催眠と稱する者あり、自分で我身を催眠せしめて催眠術本來の現象を起すことを得、其方法は依他催眠法を準用するなり、後に述ぶる見神術、降神術の如きは其現象の一なり、催眠術のことは専門に記したる書物多きを以て、爰には只順序上一言せしに過ぎず、詳細は「催眠術獨稽古」を参照あれ。之を要するに魔術的不可思議の現象中、物質作用により種仕掛を用ひて爲す所の者を除き、純然たる心理的哲學的により行はるゝ不思議の現象は精神作用即ち催

眠術上の現象に外ならずと信ず、實に催眠術は宇宙の秘密を發く所の鍵なり、心理哲學上の骨髓なりと云ふも強ち誣言にあらざるべし。

第二章 米國狐狗狸術 (フランセット)

米國にはフランセットと云ふ面白き玩具あり、今を去ること四十七年前に初り日を追ふて益々盛に行はれつゝあり、今は我國に於て時計の流行する如く、大概の家には之を備へ、獨り好事家が之を弄するのみならず、諸學者競ふて之を實驗し、學理に照して研究しつゝあり、フランセットが過去や現在や或は未來の出來事を示して人をして驚嘆せしめたる現象は、信用ある諸學者の等しく口を揃へて主張する所なり、之れによりて余は去る明治三十七年に書籍に基きて之を作り、之を實驗し、其結果を當時の「催眠術新報」に掲載したることありし、之れ實に我國に於て之を實驗したる元祖なり、其後米國より原物を態々取り寄せ見たるに、其構造至て簡易にして、よく活動するやう造出しあり、之を實驗したるに實に豫想外に面白き好結果を得たり。

圖 一 第



プの構造法を略記せんに、先づハート形小板の下面に縦横自在に進退する脚車を、木と金とにて造り二個釘着し、一方に鉛筆を嵌入する穴あり、其穴にはパネ附き居りて、適度の處に鉛筆を止め得る装置あり、極めて平かなる机上に滑かなる紙を敷き、其上にプを載せ第一圖に示せる如く手を當て居れば、プは自然に動きて紙上に線或は書畫を現す、其線又は書畫によりてプの答を判斷するなり（其使用法の詳細は拙著「ブランセット術」に掲載あり）

今シデイス氏の著「暗示の心理學」中より「ブランセット」の實驗例を轉載すれば下の如し、氏の報告に

曰く、一千八百八十三年耶蘇降誕日第一回の實驗をなし、其後一週間を経て三日間連続的に實驗したり、其一回目には甚しく興味を感じ、第二回目には要領を得ざる感を起し、第三回目には奇怪慘憺たる新經驗に入りつゝあるが如く感じ、第四回目には悲しくも嚴肅は變して滑稽となり終れり、今實驗中興味ある答をせしもの、み左に録せん、問は「試験者の問にして答はプの答へなり、問は如何なる條件の下に目に見えざるものより通知を得べきか、甚だ満足すべき程の結果なかりしも、プは動き始めたり、問は「今ブランセットを動かしたるものは何ぞや、答は「宗教、問は「ブランセットを動かして此答を書かしたるものは何ぞや、答は「良心、問は「宗教とは何ぞや、答は「崇拜、問は「汝は誰ぞや、答は「クレリヤなり、問は「女なりや、答は「然り、問は「汝は曾て此世に生れし事ありや、答は「否、問は「住みたしと思ふや、答は「然り、問は「何時、答は「六年」と。

中央新聞に「フランテンさん」と題して面白き「ブランセット」の記事掲げありたり、即ち「ブランセット」を「フランテンさん」と呼ぶものあると見へたり、其要は左の如し、それに又「慈の皮千枚張の連中は、競馬の勝馬占ひに此「ブランセット」を應用して居

るが、今度の川崎競馬の前日にも、花月に陣とつた競馬好の紳士連と、其席に侍んべつて居た、之れも同じ競馬好きの藝妓とが勝馬占を行つて見ると、三日目第一競馬にはペンケイと出たが、此レースには章駄天と外山の兩名馬が出るので、辨慶の勝は思も寄らぬから、之には外れたと笑つて仕舞つたが、借翌日になると章駄天の必勝と豫期された、レースは章駄公コタカと衝突して出後れ、外山遂に辨慶を抜き切れず、失敗して辨慶の大穴は百一圓五十銭の大配當に、右の藝者連はブランセットの靈顯に肝を潰し、今まで輕蔑したのが勿體ないとして俄に其夜からブを神棚に祭り込んで大騒ぎであるが、可笑しい話は下谷の小千代拍子に、大熱々の番町邊の某紳士、新橋のある待合で奇麗首を集めてブを占つてると、藝者紳士の好きな人は誰れとやるとコツリ／＼動き出して、こちよと出たから、一同トツと吹出したので、紳士は飛んだ所で油を絞られたと云ふ大滑稽が有たそうだ……と。

東京日本橋區伊勢町二十五番地小泉勉三君は大日本催眠術協會の地方委員にして催眠術は大に熟達し、天眼通的實驗も數多せられ、益々大に研究しつゝある人、君一日來車の上ブランセットの實驗談をせられたる中に左の如き言葉あり。

小泉君曰くブはよく答へて百發百中誤らず、僕は歐文も漢文も知らず僅かに日本文を解するに外ならざるに、ブは自動的に歐文を書きしことあり、漢文を書きしことあり、或は立派な書を書きしことあり、富士山の書の如き朝顔の書の如きは見事に出來たり、一日來客あり客二錢銅貨を手に握り其銅貨は何年製なるかを當て見よと問ふ、ブは「十五年」と答へり、檢するに果して然りし、又同伴せる客中の一名は未だ小泉君の家にて其名を知りしものなし、ブに其名を問ひたれば「カンキチ」と答へ、當てられたる者は大に驚きたり、又一人の來客は、客室に於て「鳥居」の二字を何人にも見せぬ様紙に認め、其を嚴封し何んと云ふ文字を書きあるかを問ふ、ブは「鳥居」と答へり、又御客さんの嗜きな物を示し呉れ、嗜きな物を取りて馳走する積りだからと問ひたれば「サツマイモ」と答へり、餘り下品の如きも「サツマイモ」を買ふて出したるに客は西洋料理より、何よりも我輩は之れが好物だとして大なる芋山を忽ちにして平げたり、其後淺草區西仲町衣服商松坂屋の店員平野豊次郎氏來れり、氏は藝妓屋を華客として巡るを業とせり、平野氏面白半分、僕が巡る華客先の藝妓中、第一の美人の名をブに尋ね呉れ、とよりてブに問ひたれば「力彌」と答へり、平野氏は膝を

叩いて適中せるに感嘆し、力彌が上手な踊の名を又問ひたるに、「ステコメナ」と答へり、ステコメナは力彌の十八番の踊ともやつこの歌の初句なりき云々。
 千葉縣君津郡吉野村三澤國藏君はブランセットによりて自動的に櫻花菊花及び肖像畫を書けり、其畫は中々立派に出來たり、君は元來日本の書を能くするも英語はA Bさへ知らず、然るにブは氏の問ひに對して見事なる英文を認めたり、其の英文の意は奇警にして眞に博言博士をして驚倒せしむるばかりなり。
 余は前記の小泉三澤兩君のブの實驗によりて得たる書と、書とを見て其筆力の雅致ある、雄健なるに驚けり、其他各地の有志より面白き報告山の如くあり、其報告は十人十色にして或は外面貞節を飾ふたる女の其實不貞の色情狂なることを明示したることあり、或は盜賊の今夜入ることを豫め知りて、之を捕縛したる如き奇々妙々の報告澤山あり、之等の事は後日に譲り、次にブは如何なる原理によりて活動するかを論じて見ん。
 ブランセットの活動する原理に就て現今有力なる學說二あり、曰く**潜在的**の活動による、曰く**人格**變換による、と、余は後説を是と信ず、以下其所以を論ぜん。

凡そ人の精神の活動と自覺とを同一に視るものあり、即ち當人の自覺する意識状態が、當人の精神の活動なることは申迄もなし、然れども精神の活動悉く當人の自覺に現はるゝものにあらず、當人の自覺せざる所の心的活動あり、よりて精神の活動を二種に分つを得、一は意識として當人の自覺に現はれたる活動、一は意識として當人の自覺に現はれざる活動なり、前者を**主意識**、或は**現在の精神の活動**と云ひ、後者を**副意識**、或は**潜在的**の活動と云ふ、而して主意識の活動として現はれたる精神の範圍を**主意識域**、或は**現在域**と稱し、副意識に活動する精神の範圍を**副意識域**、或は**潜在域**と稱す、故に**精神の主意識的活動**は、之を**自覺的活動**、或は**自意識域活動**と稱し、又之を**自覺域**、或は**現在域**と稱す。
 例へば吾人が久しく逢はざる友人の名を知りては居るも、今直に口に之を云ふ、此能はざる場合あり、之れは即ち友人の名は**副意識**たる**潜在域**に潜み居りて、**現在域**に現はれ出でざる故なり。
 ブランセットに手を當て居れば、ブが活動して繪を書き、或は字を書き、或は過去を語り未來を示す等の事は、其ブに手を當て居る者の**潜在的**精神がブを動かして、種

々の物を紙上に畫くなり、故に顯在的精神にては何人が動かしたるかを知らず、動きたる結果を見て大に喫驚するなり、と如斯説明する學者あり。

元來は心理學上より云へば自動書記の試験具の一なり、自動書記に就ては英國の心理學者の「カーネー」と云ふ人が面白い試験をした事あり、夫は催眠術によりて夢中遊行の状態に在り人に、人の名とか數とか、又はある事柄を話すとか、或は又詩歌を讀み聞かせ、夫れに就きて特別の暗示はせず、突然是を醒ますと、被術者は勿論何事も記憶せぬ、それは偽るのではない、眞に記憶してゐるのである、そこで被術者の手を取りて其の指の間に鉛筆を持たせ、小さき板の上に手を載せて置くと、手と被術者との間には幕を張りて見えぬ様にして、一分も立たぬ間に彼の手は動ひて丁度夢中遊行の状態の時間いた通りのことを書く、それで本人は何も知らぬのである、動く爲めに生ずる厭迫の感覺は多少あるけれども、何を書いて居るかそんなことは知らずして、平氣で傍の人と全く別な話をして居る、或る場合には其方に注意が向くと、略ぼ何を書いて居るかを想像することがある、何にしる一種妙な感覺が其の際生ずることは儘である、即ち自分の手が動くよりは、板の方が自然に動

いて、自分の手を引きつける様に感ずると言つてゐる。

此等自動書記の原理を潜在的精神の活動なりと論ずる學者あり、然し此説を採る學者は近世少なし、催眠術を實驗するに當り、被術者の精神の活動中如何なる點が現在の精神の活動なるが、潜在的精神の活動なるかを考察研究せば大に興味あることなり。

凡そ人は人格を有す、若し人格が全くなければ人と云ふ事を得ず、此の人格の内容は人によりて異り、各一様ならずと雖も、普通の人は精神上の統一ありて、一個の人格のみを有す、昨日の我も去年の我も、今年の我も記憶によりて連絡して同一なるものなりと信ず、然れどもヒステリー患者の如き病人になると、統一が缺けて意識が分裂して、同時に二個若くは二個以上の意識又は人格が存在す、例へば二人の人が同一の身軀に共棲するが如き状態になる、或は又昨日の我と今日の我と、否一分間前の我と一分間後の我とは、全く異なる人となりて過去の人格に屬することは全く忘れて仕舞ふ、加之其の性格も全然一變して、人格がそつくり變化することあり、斯る精神上の現象の研究によりて、通常人の意識の性質を明にすることを得、故

に心理學上では此の種の研究は甚だ必要なり、殊に催眠術上最も説明の困難なる天眼通の原理の如き、俗に云ふ天狗に拉し去られたと云ふ現象の如き、狐憑の如き、夢中遊行の如き、降神術の如き、も人格變換の理論によりて説明するとを得、不思議の現象を研究するには最も必要なる最も興味ある問題なり。

人格變換は偶然に出ることあり、精神病者の如き之れなり、例へば實際は卑賤の身でありながら高位高官の身と思ふて威馬理ちらす如き之れなり、又催眠術によりて故意に試験的に人格を變換せしむることを得、今其一例を次に述べん。

埼玉縣北足立郡上尾町二十九番地愛國婦人會々員橋本〇〇子嬢、其他數十名の美人を椅子に凭らしめ、余は其面前に立ちて閉目せしめ、一言眠ると云ひたれば、深き催眠に陥りて人格變換せり、即ち君は陸軍少尉なり、今兵卒に向ふて練兵する所なりと云ひたれば、劍を握りて號令を下すものゝ如き活潑なる姿勢となれり、次に余は君は四歳の少女なり、今飴をやるとて角箸一本を與へたれば、喜色満面に溢れり、次に大なる犬が來て飴を取り去れりと云ひつゝ、其角箸を取りたれば、ワット泣き出せり、斯くの如く人格は變換するものなり、獨り男が女に、女が男に、幼が老に、老が

幼に、農夫が將校に、將校が茶屋女に變換するのみならず、人が動物に變換することあり、彼の狐憑、蛇憑、犬憑、猿憑の如きは即ち之れなり、以て人格變換の現象の如何に奇なるかを知るべきなり。

人格轉換を論ずるものゝ中、第一人格と第二人格との差別を立つるに、智識感情慾望の差異を以てするものあり、然れども之れ誤なり、人格轉換に於ける根本的事實は人格的統一の分離なり、人格的統一とは過去經驗の感を以て纏束されたる觀念の團躰なり、人格的統一の分離とは、斯く纏束されたる觀念團躰の一個にあらざして、二個或は三個ありて、交替的に活動することとなり、單に昨日は記憶強盛なりしも、今日は記憶減退せりと、か、昨年、は賢にして、今年、は愚なりとかの變化にあらざるなり。

因之、苟も我自ら之を經驗せることある様の感を以て再び現はる以上は、皆以て同一人格の經驗と見るべきなり、而して其智識感情慾望の懸隔すると否とに關せざるなり、人として幼年より老年に至る迄、同一の智識感情慾望を有する者は絶対になからん、而して我の幼年の時云々、壯年の時云々と云ふに過ぎず、今も尚昔日と同一

の我なるもの、經驗にして、其間に我の經驗なりとの終始一貫せるものあり精神一貫し居れば其内容の種類如何は人格には何等の關係なし。

近時流行の人格の養成とか人格の修養とか云ふ意味の人格とは其意味を異にす、其人格は怠慢性のものが勉強性となるが如き、親不孝者が親孝行となるが如きを人格の變化と云ふ、然れども心理學上よりすれば此の如き場合に云ふ人格は寧ろ性^格と云ふべきものなり、人^格轉^換は經^験の主^觀の變^換なり、人^格統^一の變^化なり、人格とは如斯者なるを以て、各個人は相互に他のものと絶對的に獨立したる人格的意識を具へ、而して此人格的意識は一個人に就きて唯一個なるを常とす、然れども時としては一個人にして二個或は三個、四個の人格的意識を具ふることあり、何によりて斯く人格が數個に分裂するか、或は自然的に起る處の夢中遊行の如きも之れなり、或は偶然的に或疾病の爲めに人格が變換するものあり、或は催眠術によりて故意に人格を變換せしむることを得、今其の現象を三大別す。

(一) 兩人格の交番的に活動する場合にして、第一人格の活動する時には第二人格全く休息し、第二人格現はるゝ時は、第一人格全く休息す、換言すれば同一個の肉體が

或時は第一自我精神の活動機關として働き、或時は此と全然別異なる他の自我即ち精神の活動機關として働くものなり、故に此現象を人格轉換と云ふ。

(二) 兩人格の同時に活動する場合にして、此現象に於て兩人格の活動が全く獨立不關的に平行して進行することあり、或は一方の人格が活動するとき、之に干渉することなくして唯之れを傍觀するの位置にあることあり、或は兩人格の活動が相衝突して、争闘するが如き状態をなすことあり。

(三) 兩人格の官能的交通の場合にして、一の人格の經驗の内容が他方の人格の其れと相互影響する場合にして、其影響する方位に種々あり、或は幻覺に於て影響し、或は其把住作用に於て影響し、或は事物の選擇に於て影響することあり、乍去各人格は各經驗の人格内統を異にし居るは勿論なり。

プランセットの活動する場合は、前記の現象中第二の中の一、一人格が他の人格の活動を傍觀する場合に該當し、試験者即ち第一人格の意思より獨立して思ひもよらざる所の文章又は繪畫或は方向を自動的に書き出すなり。

此説は現時の心理學者中最も信用ある學者の主張する所にして、余も又此説を可

と信ずるものなり、何者前記の潜在的精神の活動丈にては、試験者の嘗て知りしことをブに尋ね、明示せられし場合は説明し得るも、試験者の知らざることにて想像だも及ばざる遠方のことを尋ね、實際ブの答への如くなり、と云ふ場合の如き、英語を知らざる者の實驗にて英文を得たるが如き場合の説明として不十分なるのみならず、學理上首肯し難き點多きを以てなり。

第三章 日本狐狗狸術

先年の事一時我國の各地に流行したることありし、狐狗狸は其後絶へて之を行ふものなし、之れ先年の流行は多くは愚夫愚婦の輩が、迷信的に之を弄びしものにして、毫も科學的より研究の資となしたるものにあらず、斯る流行は絶滅を喜ぶと共に、今後は之を學理上より研究し、實際問題を解決するの資となさんことを希望するものなり、余は此意にて爰に此法を紹介せん。

先づ小竹俗に云ふ女竹をよしとす、直徑三四分前後の者を長サ一尺五寸、此長サは一定せず、節を中央に揃へよと云ふものあり、上部に節を揃へよと云ふものあるも

之等は別に必要なしに切りたる者三本を造り、三本の中央を麻繩にて七卷半巻きて縛り、鼎足形となし、其三又より大なる飯鉢の蓋を其上に、(金輪にあらざる飯鉢の蓋を可と云ふものあるも、敢て然らず鍋蓋にても茶盆にてもよし)之を載せ、(其蓋に狐狗狸の書を記し置くべしと云ふものあるも必ず然かするを要せず)其上に布呂敷をかけ、其周圍に三人位坐し、各々片手(人少きときは両手を載す)を其蓋の上に載すること第二圖の如くし、而して鄭重なる熱心なる言語を以て、狐狗狸様御寄りになりましたら、早く左へ御廻り下さいと云へば、其時軽く載せたる手と共に其蓋は左へ回轉すれば、御寄りになりたる知らせにして、狐狗狸は口もなく手もなき故に、意思を發表するには、其蓋を右或は左に回して知らせとするなり、又は蓋の一隅上昇し傾けて知らせとすることあり、人の年齢を尋ねんとするには、何さんの年齢は何歳なるや、御分りに成り升たら、右に御回り下さいと云へば、蓋及び手は共に右に回る、然らば二十代ならば右へ、三十代ならば左へ回して下さいと云へば、果して二十代ならば右へ回る、然らば二十何歳なるか、一歳毎に御傾き被下と云へば、其時眞に二十三歳なるときは三回蓋の一方上りて傾くなり、此法を準用して吉凶禍福又は

過去現在未來の事等を尋ねるなり、時には甚句踊或はカッポレ踊を踊り呉れと云へば眞に三本足にて踊り出すことあり、御示し被下狐狗狸様と一言云ふと、直に御示しあることあるも、之れは稀にて、何十回となく繰り返して願ひ初りて明示する場合は常とす、殊に信仰淺きもの、疑心深きもの、云ふことは狐狗狸も腹を立て、知らぬ風をすると云ふ、狐狗狸の方法は期する處、一定不動の方法あるにあらず、便宜の手段にて可なり、次に文學博士井上圓了先生の實驗談を引用して前記の説を確めん。

コツクワはよく未然の事を豫言するの力あるか如し、余井上博士之を試みんと欲し、先年自宅に於て前後數回試驗を施したることあり、初めに或る學生四五名と之を試みしに、更に要する所の成績を示さず、次に未だ學識に富まざる年少輩數名を其中に加へて試みしも、猶ほはかしくしき功驗を見ず、次に其年少輩と四十前後の婦人として之を驗せしむるに、果して要する所の成績を得たり、其後十餘日を経て再び其年少輩と婦人と、余と數名相會して大小長短一定せざる色々の竹を取り、色々の蓋を用ひて之を試みしに、皆其成績を得たり、其又竹に代ふるに他の器具を

圖二第



以てし、或は煙管三本を用ゐ、或は茶盆の如きものを用ゐ、蓋に代ふるに平面の板を用ふるも多少功驗あるを見たり、是に由て之を觀るに、其裝置に一定の方式を要せざることを明かなり、然るに世間にては一定の方式を用ゐ、婦人を其中に加へ甚だしきに至ては其人を選び、其の家を選び、其の日を選びて之を行ふが如きは他に考ふべき原因事情の別に存することなれども、愚民は其原因事情を知らざるを以て、之を行ふて其要する所の成績を見ざる時は、是れ不吉の日に行うたるによるなり、是れ悪人の其中に加はりたるによるなりと云ふて、毫も其道理を怪しまざるは實に愚の至りと謂ふべし、(妖怪學講義)

余即ち著者も之を數回實驗して前記の説は一々事實に吻合せることを確めたり、余の宅にて宮城縣亘理郡坑元村坑元十八番地鈴木有教君及び東京商船學校内清國人劉飛雲君と余との三人にて翌日の天候の如何、其夜東京市内に火事の有無を尋ねたるに、一々適中したることあり、其他數多の人々と多くの實驗をなしたるに、大概奇なる實驗を得たり、

文學博士井上圓了先生は、妖怪學講義中に日本狐狗狸の活動する原理を大に論ぜ

られたり、其の全文は頗る長文なるを以て爰に其の要旨を摘出せんに、狐狗狸の動くは故意に偽りて術者が動かす者にあらず、鬼神の所爲にあらず、電氣の所爲にあらずと喝破し、其原因を三に分てり、(一)は物理的の説明にて、外界のみによりて起る原因即ちコックラの裝置が元來活動し易きこと、(二)はコックラに觸れ居る手が少しにても動けばコックラは大に動くなり、(三)は心理的の説明にして内界のみによりて起る原因、即ち人の精神作用より生ずる原因にして、不覺筋動と豫期作用より生ず、不覺筋動とは何んの覺えなくして筋肉動きて外界に影響するを云ふ、豫期作用とはコックラは動くものなりと豫期し、着手する故遂に其豫期通りの結果を得るなりと、

井上博士は物理的方面よりよくコックラの動く原理を説明せられて水も漏れず、余の考によればコックラの動く原理とプランセットの動く原理とは、心理學上同一なりと信ず、よりて余は人格變換による現象なりと信ず、詳細は米國狐狗狸の學理上の説明と同一なるを以て爰には之を省略す、

日本狐狗狸及びプランセットと同一理由に基き、同一の働を爲す所の机話術或は

机轉術てふ者、西洋には行はる其ことは東京新報へ掲げしことあるを以て爰には又之を略す。

第四章 降神術（スピリチズム）

降神術とは其名の如く神を降す術にして、他人の身上に神を降す術と、己の身上に神を降す術との二あり、他人の身上に神を降す術は、催眠術の如き、禁厭術の如き、種々の他動的心術は皆之に屬す、己が身上に神を降し、或は己の心もて神と通じて、能く幽冥界の事を告知豫言すると稱する所の、俗に云ふノリキ、クテヨセ、及び豫言術の如き、自働的の心術は皆之に屬す。

自分の身上に神を降す術の中に、御伺ひと稱して術者自身に神を乗り移らしめて、何神の崇なりとかを告げる者あり、之れ即ちノリキなり、巫覡即ち俗間に云ふ市子或は口寄或は梓神子或は縣神子なるものあり、田舎を巡りて活業をなすものあり、余曾て之を見たることあり、其次第を次に記さん。

巫覡と稱する人は女子にして三十歳前後なりし、一尺四方位の小箱を背負て來た

降神術

れり其家の老婆が依頼するを見たるに老婆は巫覡の言に従ひ茶碗に冷水を盛り、青葉を添へて巫覡の前に差出す、と巫覡は小箱の前に座し、其青葉を手に持ち何やら唱へて其處へ置き、次に巫覡は小箱の上に兩臂を載せて頰杖を突き、諸國の神名を數多唱ふること暫時にして、止むと外觀は一寸眠りし如くなる、此時巫覡には既に神が乗り移りたるなり、其云ふ處は依頼主たる老婆より先に死されし其夫が、恰も極樂に居りて、老婆の來たるを待ちつゝある者の如し、老婆は涙を流し鼻をすすりて聞き居たり、暫くして終るや老婆はよく私の思ふ通りに寄りました、實に感心々々、有難しとて幾度か禮を述べたり、傍に其有様を見て居りし者は、皆感嘆して巫覡は死靈生靈の崇を明知して告ぐることに百發百中誤たず、と時に其家の書生巫覡に願ふて曰ふに、僕には生れた本籍地に許婚の女あり、其女甚だしく僕を慕ふも、僕は容貌醜なる故、痛く之を嫌ふて國を出て今當家に厄介となり居る、願くは其女的心を寄せ呉れ、と巫覡は例の形式をなし終りて、其女が痛く書生の無情を怨んで居ること、一通りや二通りにあらずして、寝ても起きても、寸時も忘れぬ云々……數千言を續々述べたり、後巫覡去りし後に書生の云ふに、僕に許婚の女本籍地にあると

は虚言なり、然るに巫覡は其女が怨むやふ云ひしは、人の依頼により己れの想像を出鱈目に云ふものなること明かなり、と信に然りなり世間に今尙此種の似非降神術の行はるゝは、一般に學理を知らざる所以にして嘆ずべきなり、然れ共巫覡なる者も眞に無意識の状態なる自己催眠の狀となりて之を豫言するものなれば學理上大に研究すべき價值あり決して出鱈目的詐偽的のものにあらざるなり。

余の本籍地に名高き一老婆あり、家貧にして眼に一丁字なく利發ならざるも性質は善良にして平常大嶽山を大に信仰せり、日々數時間宛祈願するを常とす、祈願し居る中に、偶然無我無心となりて種々のことを豫言するに、百發百中なりとのこと近村に聞へ、日日御伺と稱して私の病氣は如何せば治するや、等の宣託を乞ふ者陸續として隆盛を極め、終には一大社を建設するに至れり、其宣託の方法は神前に向ひ祝詞を上げ居ること暫時にして、失神状態となりて曰く、汝は西方に當りて金神を汚がせり、よりにて御除けをなせば、即座に病氣治す、御除けは新しき小祠を造り、鏡餅十二個を具へ奉るべし云々の類を云ひ終りて後目を開き、今何事を云ひしやと術者自ら尋ね、傍に居りし患者又は其代人は前記宣託の旨を語り、何卒御除けを頼

むとよりにて宣託通りに新祠を造りて金神を奉り、鏡餅を具へ術者に祈願し貰ふ、不思議にも病氣は治す、故に御除けと云ふとは無駄事の如くなるも、眞に病氣か治するに驚き、託宣の効力を確認し、甲嘶し乙傳へ、終に老婆の降神術は大繁昌をなし、立派なる社を建設するに至りたるなり、之を余の目より見れば、患者の病氣の治したるは豫期作用によりたるなり、自己暗示によりたるなり、御除けをなして貰ふた故、自分の病氣は治するならんと豫期し確信したる結果、心身相關の理によりて豫期通り、確信通りの結果を得たるなり、而して降神の現象に就ては學者種々に説明せり、中には自分て何も蠅も承知し居り、偽りて降神の眞似をするものあり、其れは詐偽にして學理上研究の價值なし。

巫覡が能く未來のことを豫知し冥界のことを察知するは何故なるか、につき井上圓了博士は次の如く説明せり、其理たるや決して鬼神惡魔の之に憑附して然るにあらず、又電氣エーテル等の媒介によりて起るにもあらず、全く其人の精神上の作用によるものたるや疑ふべからず、其精神上の状態は、之を詳にし難しと雖も、想ふに其精神の一小部分に頗る鋭敏なる處ありて、能く他人の感知すべからざること

を感じ、他人の思考すべからざることを考へ、常人の及ばざることを行ふものなるは、蓋し疑ふべからず。且つ彼等は精神一點に聚合して、他の部分に精神力を減ずるにより外面より之を見れば、凡人にも劣れる愚鈍者の如くなるものならん。是れ獨り巫女に於て然るにあらず。總て深く一事に熱心し、一技に練達したるものは、一見凡人に劣るが如きを常とす。例へば圍碁の妙手、音樂の妙手の如き、皆一點に精神を凝聚するより、外貌はやゝ愚鈍に似たるものあり。今巫女に於ても之と同一理由にして、外貌の愚鈍なるにも拘らず、感覺及び思想上に一部の特絶なる點あり。是によりて斯かる不思議の作用を現はすなるべし。是れ心理學の講究によりて疑ふべからざる事實なり」と。

神の降りたると稱する精神状態は、吾人の所謂自己催眠の状態にして、或學者の云ふ所の己人の精神と、宇宙の精神と合體したる状態なり。代言すれば無念無想の精神なり。故に其云ふ所よく眞實に合するなり。又人の身上に神を降す法中、廣く行はるゝは御嶽講の中座なり。先祈禱者中座と稱して一人を中央に置き、其周圍に祈禱者居りて禱ること切なり。其中に其中座は無念無想の境に陥る。之れ即ち祈禱者が

中座を催眠せしむるなり。然るに祈禱者は催眠術とは知らずして、神の靈顯愈々現はれたるなりと信ず。其無想の境にあるものに尋ねれば、時に遠方のことを實際其場に行き目に見たる如く語りて誤らざることあり。之れは催眠術上の天眼通なり。決して怪しむべきにあらず。天眼通的現象は依他催眠即ち術者が被術者を催眠せしめしときのみ起る。にあらず。自己催眠即ち自分で自分を催眠せしめしときも又行はるゝものなり。余は自己催眠術によりて、自己の身上に神を降す所の現象をば、悉く實驗し、余は又人を催眠せしめて人の身上に神を降す現象の悉くを現はしたることあり。以て催眠の現象に外ならざるを知るべきなり。

ピチー氏著「人格變換論」に「人格分裂と降神説」と題する項中に曰く、

此所に降神説と云ふのは、原語でスピリチズムと稱するもので、死者の靈を喚起して是れと交通することを云ふのである。此説は一時佛蘭西に流行して、是れを職業とするものがあつて、處々に世人に見せた。日本でも神下しとか、梓神子とか、云ふものがあつたが、此所で云ふ降神説も矢張其れと同じ様なものである。

通常此スピリチズムには死人の靈と、現に生きて居る人間との交通を媒介する者

があつて、夫れが意識的の運動をする、多くは筆にて文字を書く、そゝして、死者の思想を通ずると云はれて居る……

著者はスピリチズムと云ふも決して世人の唱ふるが如く、靈妙不可思議のもてはなくして、矢張意識の分裂によりて説明する事が出来ると云つて居る。……(意識の分裂とは人格變換のこと)

著者が言ふには此スピリチズムの現象を其儘考察すれば、單に所謂る媒介者と稱するものが、自分の思想にあらざる思想を無意識に發表すると云ふことに止まる事實は其れより以外には行かぬ、よし媒介者が死者の靈と交通して、居ると言つた所が、其が直に死者の靈魂が呼起されたと云ふ證據にはならない……

即ち普通の人に神が乗り移りて肉體は人なるも精神は神となりて種々のことを宣託すと云ふは、神は第二人格にして、普通の人は第一人格に當る、よりて普通状態にある時は、小心躍々たるものも一朝神の乗り移りたると云ふ状態となるや大膽不敵となり、大言壯語することあり、降神術者中にも全くの第二人格と變るものは稀にして、單に止動状態を呈する位のもの多からん、而して往々普通状態と少しも

異ならざる精神状態にあり乍ら、神が乗り移りし如く見せて人を欺くものあり、大に注意すべきなり。

斯の如き神靈の宣託なるものは、副意識即ち潜在的精神の活動なりと辯ずる學者あるも余は其説を採らざるものなり、何んとなれば其れでは曾て経験せしことは言明するを得るも、未だ経験せざることは虚言の外は言ふことを得ざる道理なり、然るに何等の経験なきは勿論、想像だも及ばぬことを言明して、適中すること實際あり、單に偶然の暗合を以てのみ説明し難き場合あるを如何せん。

近來豫言術者と云ふ者各地に現はれたり、余或自稱豫言術者の門を叩きたるに、宗教をば随分研究し居りて何んの蚊のと六ヶ敷説教をなされたり、而して婚姻の成否、相場の高低、何んでも望の事項を豫言するとの談につき、一つ余も豫言を願ひしに、其方法は勉めて精神を無念無想にして一點の邪心をも止めず、明鏡の如き胸裡となし、其れに浮び出てたる處を語るなり、其胸中に浮ぶは其豫言者自身の精神の發動にあらずして、神が示すなりと云ふ、故に百發百中誤らざるなり、と而て當ること随分ありて歸依する者少なからず、豫言者の中には種々な類あるも、先づ主

として之れに類似したるものなり、此現象中全く偽瞞にて出鱈目を云ふ者多々あるべきも、眞に無想の境となり、眞に現在の個人の精神にて出鱈目を云ふにあらずして、全く神の告げと信ずる所の第二人格の状態となりて云ふものならば科學上研究の價值あり、之れは畢竟降神術、天眼通術、見神術、米國狐狗狸術と殆んど原理を同ふし、又其現象を同ふす、此現象は修養により己人にて自發的に起すことを得、又殊に催眠術によりて他發的にも起すことを得、催眠術によりて他發的に起したる者は、獨り催眠術の研究資料たるのみならず、自發的現象即ち豫言の性質如何を立證する唯一の好材料なり。

自己催眠又は依他催眠によりて、未來の豫言が適中するや否やは、目下催眠術研究上に於けの好問題なり、大日本催眠術協會卒業生にして、前の麻布三聯隊特務曹長藤倉清右衛門君外數名より之に關する有益の實驗報告を送られたり、而し紙面の都合により爰には之を省略す。

彼の易筮術は陰陽二元の道理に基づき易經の所説によるものなれば、其原理は隨分高尚のものなるも、之をすべて吉凶禍福に當て斂め、過去現在未來を示して百

發百中なり、よつて易を見て貰ひ、其れに基きて萬事をなさば必ず幸福の人となるべし、と思ふは不道理の甚だしきものなり、論より證據易者の多くは不幸の貧者なるを以て知るべきなり、然れども又稀によく適中することあり、其は偶然の暗合なるか、多くは然らん、然れども降神術に於て豫言する如く、無念無想の心境に於て現はれたる所の卦によつて判斷したるときは必ず適中し、雜念が浮びたるときは適中せずとの説明は吾人の説と合致す、筮法にも種々あり、彼の十干十二支にて人の性質を判斷する五行の占法は、廣く我國に行はる、天源術、九星術、淘宮術等は此占法に屬し、皆其原理を同ふし、唯其方法を異にするに過ぎずと信ず。

俗に云ふ交神術、交靈術、交天術、神人交感術等唱ふる所の者は即ち降神術の別名と見るべきなり、降神術に就て、外國にては實に奇々妙々の實驗をなしたりとのこと諸書に見へり、即ち伊太利評論と云ふ雜誌に、降神女は遠く離れたる樂器に手を觸れずして奏したりとか、丁酉倫理會倫理講演集第六拾三號に譯文掲載あり、又催眠術新報第四拾五號に掲げある、元良博士の嘶されたる歐洲の降神術にて箱の中に錢を入れ嚴封し置きたるに、其錢は封に異常なくして抜き取られたり、と云ふ如き

奇々怪々の術は往々耳にする所なるも、其現象は一寸説明し難きを以て、爰には之を省略す。

三八

序に占夢術のと一言せんは、凶夢は吉事を得る前兆なりと一般に云ふ、之れ精神作用を利用し、凶事を吉事に變ぜしむる最もよき手段なり、恐しき夢を見て精神を苦しめんか、翌日も心持ち恐しきものなり、よりて凶夢を見しにより吉事来るならんと考ひ勇んで、業務に従事し、心身相關の理によりて、吉事に變せしむるなり、之れに反して吉夢を見たる時は、假ひ夢でありとも喜ばしかりしとて勇み進んで業務を勵むこととなる、何れにしてもよきやうに解釋するなり、誠に重寶のことなり、見たしと思ふ夢は、如何にして見らるるか、夢と生理的關係如何等のことは、曾て、東京新報に余は詳しく論じたることあり、故に爰には之を略す。

第五章 禁厭術(まじなひ)

禁厭即ちマジナヒは我邦にては遠く神代より起りしものなり、今神代記を按ずるに、大己貴命少彦名命と與に力を戮し心を一にし天下を經營し、復た顯見蒼生及び

畜産の爲めに、則ち其療病の方を定め、又鳥獸昆虫の災異を攘はんが爲めに、則ち其禁厭の法を定む、是を以て百姓今に至るも成な恩頼を蒙るとあり、又牛馬問答に曰く、呪は眞言山伏醫家にも上代には之れあり……云々、之れによりて見れば禁厭は太古より傳りしものにて、大昔は醫家も禁厭をなしたること明なり、而し今日は醫士にして禁厭をなすものは絶對になしと思はるゝものあらんも、其は皮相の見にして、今日も繁昌する醫士は禁厭を行ひつゝ、あり其事は後に至て一言せん。

禁厭の場合は種々あり、鳥獸虫魚が人に害を加へざる様にする場合あり、天災即ち風雨火水等の災害を免れんが爲めにする場合あり、疾病の人身を襲はんとするを防止する禁厭あり、既に病人となりたる者を健全體となす禁厭等あり、其場合々々によりて其形式を異にす、又同じ疾病驅除の禁厭にても種々あり、又其流派の異なるによりても異なる、故に爰に之を客觀的に、悉く羅列することは不能の業なり、故に左に一二参考の爲めに之を擧げん。

蜂にさゝれぬ呪は下の呪語を三遍唱ふべし、應無所住而生其心」

狗の肝を取つて土にまぜて、菴を塗る時は如何なる不孝不順なる女にても至孝

至順の人となる。

病人を全快せしむる禁厭には、病人の身体を撫擦し乍らのりを上くるあり、神水又は御符を與ふるあり、余の知人某は御釜鳴りと稱して赤飯を炊く湯釜が鳴れば病人治することを神が知らすなりとて、豫め此意を家族の者に言ひ含めて、炊き初め果して釜鳴りたれば、家族の者一同大に喜び、全く其通りに全治したりと而し、或る時は如何にしても御釜鳴らざることあり、之れ人力には如何ともなし難き證にして、神の力によるものなり云々と語られたり。

驚神的大魔術

尙此禁厭呪法については、詳しく幾多の方法を詳記したる書數多あり、即ち大雜書、三世相秘事百選、廣益秘事大全、奇術秘法、マジナイ百個條等之れなり、詳細研究せんとせらるゝ御方は宜しく參照ありたし。

禁厭は如何なる理によりて効力あるや、又全く何等の効力なきものなるか、否禁厭中効力の見へざるものもあらん、而し治病の禁厭中大に効力ありて、大醫の藥に増る場合決して珍しからず、之れ其理由は如何、余の考によれば中には物理的作用によるものもあらん、例へば病人の身体を撫て下ぐる方の如きは、其れによりて一

厭 術

種の快感を與へ、血液の順環をよくし、以て全快を早むる場合もあらん、而し禁厭の効なるもの、多くは精神作用によらん、試に見よ掌の形を赤紙に寫し、門口に帖り置けば天然痘の除けとなると云ふ如きは、俗に云ふ氣休めにして、即ち安心を與ふる理に外ならず、此類の禁厭尤も多し、或は病者が靈顯高きと云ふ、其行者の禁厭を受ければ、必ず己の病氣は根治するならんと豫期し、確信したる結果、其豫期確信通りの結果を身心相關の理によつて得たるなり、神佛の靈顯なる者は、畢竟は皆之れなり、故に若し禁厭の效を疑ひ、斯る事にて病氣が治するなら、醫士は此世に不用だ禁厭は愚夫愚婦を欺瞞する詐僞に相異なし、我試みに其禁厭を受け、效無き事の確證を得んと思ふて禁厭を受けんか、果して寸效だになし、爰に於て愈々禁厭の詐僞を確めたりと云はんか、之れ一を知りて二を知らざる患者の暴言なり、無効を豫測して無効の結果を得るは精神作用によりて當然なればなり。

凡そ禁厭の方法は大抵奇々怪々の方式を行ふ、其奇々怪々の方式を見聞すれば、其れによりて以て信仰心を起し、豫期心を高め、以て效あるなり、若し其事餘り平易尋常なるときは、不思議と思ふことなく、隨ひて效顯を收むること難し、故に其方式は

奇怪莊嚴にして秘密ならんを要す。彼の行者が異様の服を着し、或は燈明を點じ、或は火を吹き、或は水に浴し、或は奇怪の印を結ぶ如きは、畢竟此の理に外ならざるなり。

醫士の中にて最も繁昌する世才に長けた者は患者を診察したるに、別に病氣とする程の甚しき處も認めず、然るに醫士先生容態よりて、或は聽診器を用ひ、或は打診を行ひ、或は脈を檢し、舌を眺め等して曰く、之れは今日後れば汝は終生の不具者となる處でした。今日御出になりしは大幸福のことなり、先づ此藥を三日分用よ、とて渡す處の藥は、全く何等の藥にもならず毒にもならず、蒸溜水に、若味丁酸や蜂蜜を混じて渡す、病人は且驚き且喜びて歸宅し、其藥を飲み居る中に、全く平常に復す、其の病人自身にては藥の御座なりと思ふ、然し實際よく調べて見れば笑止千萬、天理教の神水や行者の禁厭と其理同一なればなり。

禁厭を行ふ神官や僧侶が異様の服を着し、神前や佛前に普通の家になき者を種々并べ置くことは、恰も醫士が懐中不相應に美服を着し、診察室に種々の器械等を并べ置く、と其原理は同一なり、これによりて醫士も一種の禁厭を行ひつゝありと云

ふも穿ち誑言にあらざるべし、只其實質同一にして其名を異にするのみなり。

井上文學博士の迷信解に次の如き面白い文あり、或寺の住職にて、呪文を唱へて小兒の蟲齒を治する者あり、或日その寺に大法會ありて、隣村の老婆も參詣せしに、住職は齒痛を患ふる小兒を呼ひて、其類に手を當て一心にアピラウンケンソツカといへる呪文を三返繰り返して唱ふれば、其小兒忽ち齒痛を忘れ、其妙殆んど神の如くに見えたり、老婆その側にありて大に感腹し、家に歸らば自ら其法を試みると思ひ居りしか、偶々隣家の小兒か齒痛に悩めるを聞き、早速其兒を呼びて呪文を唱へんとせしに、アピラウンケンソツカを誤り傳へて、アブラオケソツカ(油桶ソツカ)と記憶せるにも拘らず、三度くり返せしに忽ち痛を感ぜざるに至れり、此事相傳へて一村中老となく、幼となく、齒痛を患ふるものあればみな争ひて來り、老婆の治療を求むるに、老婆は其都度必ず油桶ソツカを唱へて、よく之を醫治したり、と若し蟲齒の癒るは全く呪文の力ならば、油桶ソツカを唱へて治すべき道理はなし、若し油桶にてよく治するならば、味噌桶ソツカにても、酒桶ソツカにても、醬油樽ソツカにても、差支なき筈である、果して然りとせば、呪文其者の力にあらざして、其マジナヒを

受くる方にて、必ず癒るに相違ないと信ずるによることは明なり、されば其療法は精神療法若くは信仰療法と名づくる方が適當なり」と此記事を意味せば無限の教訓を得、精神作用の偉大なることを知らずして物質萬能主義の者に對する最良の清涼劑なることを首肯せらるゝならん。

神佛を祈りて大病治したりとの嘯は、人の能くする所なり、試に名高き神社佛堂の前に至り奉納物を拜觀するに夥しきものあり、故に其神或は佛が大病を治したる數は堂々たる大病院を凌駕するならん、然るに半知半解の生學者は嘲笑して曰く神佛を祈るは愚夫愚婦のなすことなり、祈りたりとて何等の效あるべき筈なし、と去り乍ら實地效あるを以て益々神佛の歸依者多くなるを如何せん、是れ抑も何故なるか、前説に徴して之を知るべきなり、某書に鎮魂術と題して次の文あり。

「これは神道家の秘傳で、俗間所謂神下りの一種である。此法は、先づ神殿を嚴肅に飾り神前には一本燈心の燈火、唯一點を燈して置くのである、而して神主は、頗る異様の白衣を着して、祝詞を上げる前に、病人に命じて十分許り神燈を注視せしむ、それより祝詞を上げること凡そ十五分間許り、此病人には自身の病氣平癒を、一心に黙

禱せしむるのである、これは、神を呼び下すのだと云ふ、斯くして十分間許りて、病人は、或は踊るもあり、寝るもあり宛然睡遊状態になるのである、斯くて一定時を経て後拍手の音と、共にこの状態より、通常状態に復するのである、而して、之によりて、病人は其病氣を癒し得るのである。

此鎮魂術は、古來より我國にて行ひ來りし者にて、神の靈顯によると思ひ居りたるも、科學大に進歩し、諸種の現象をして科學的に説明し得る今日之を見れば、催眠術の一種に外ならざるなり、即ち其法たる神殿を嚴肅に飾り、神主白衣を着して異様のことを行ふ如きは、信念を高め、精神を無想にする手段にして、催眠術にて安靜なる室を選び、術者嚴正の態度を以て患者に接すると同一理なり、神燈を注視せしむるは、凝視催眠術を行ひたるなり、祝詞を上げるは、聽覺の催眠を行ひたるなり、病人踊りたり或は寐ねたりするは、催眠術上の睡遊状態或は止動状態に該當す、拍手により通常状態に歸るは、解眠法を行ひたるなり、斯くの如く鎮魂術は催眠術の別名とも云ふべきものなり。

彼の寒中冷水に浴して神佛を祈り、健康轉となりし如きは斯くすれば神或は佛の

靈顯によりて必ず病氣は治すると確信して實行し、其結果を得たる處の豫期作用によると共に、冷水浴其者も健康法の一となりしなり、又神佛に願をかけて斷食し、或は火の物斷ちと稱して火を用ひし食物(煮るとか焼くとかしたる食物)を斷ちて、健康となりしも同一理なり、即ち豫期作用と共に斷食療法或は待饑療法を行ひたるなり、健康となるも決して怪しむに足らざるなり。

井上博士著「妖怪學講義」に曰く、祈禱にも正當なるものと正當ならざるものとあり、正當の祈禱は排斥するを要せずと雖も、不正當の祈禱に至ては淫詞と均しく之を排斥せざるを得ざるなり、抑々祈禱は我邦にては加持祈禱と稱へ、二者同一の如くに考ふれども決して然らざるなり、加持とは三密加持と稱して眞言宗の法なり、所謂三密とは身密、語密、意密なり、身密とは手に印契を結び、大日の舉日舉足を移し行することなり、語密とは眞言陀羅尼の呪文を誦して、文句を了々分明ならしめ、大日の金口の說法等に移し行くことなり、意密とは觀行者の心が瑜伽と相應し、果徳の法樂を念することなり、又加持とは加持涉入と稱して佛の三密と衆生の三密を相加持涉入して即身成佛することを説く、皆是眞言の教なり、然るに古來眞言の僧侶

が主に祈禱を行ひしを以て、世間は加持祈禱と熟して神道に用ふる祈禱も、眞言に用ふる加持も同様に看做すに至れり、而して予は今眞言の加持祈禱説を述べんとするにあらず、唯々一般の祈禱説について其可否を判定せんと欲するなり、祈禱なるものは人もし誠心誠意を以て之を行はんか、其心内に良心の光明を啓發する功あること疑を容れざる所なりと雖も、世間愚民の多き其理を解すること能はずして、道徳に背き道理に反せる祈禱を行ふに至る、と穩健なる説と云ふべきなり。

魔術應用心理療法或は魔術應用精神療法を行ふものあり、ベルンハイム氏曰く、疾病と精神作用との密接なる關係、並に精神作用の病的及び治療的感化の偉大なる關係に就きて、何等の智識なき者は眞に人間の醫師として尊敬する價なき者にして、此の如き人は單に牛馬犬猫等の醫と謂ふべきのみと心理療法の基礎は催眠術療法の範圍を擴めたるに外ならずして、患者をして心理療法を受ければ、必ず己の病氣は治すと確信せしめ、而して勉めて無念無想とならしめ、其虛に乗じて治せりとの暗示を與へて心理的生理的作用を惹起し以て病氣を治するなり、其秘訣は患者の精神を觀破し、其病的觀念及び病的自己暗示を除去する暗示をなすと共に

健全なる自己暗示を高むる様暗示をなすなり、患者の精神を觀破せんが爲めには患者の嗜好習慣境遇及び催眠術に對する智識の有無曾て施術を受けしことの有無等を尋ね、且被術者の云ふ所をよく聽くなり、而して暗示の方針を定むるなり、精神療法も心理療法と區別して論ずる要を認めず、其學理に於ても、方法に於ても範圍に於ても、差を立つべきものにあらずと考ふ、或書には此二者の異同を喋々論じあるも、余は其説を執らざる者なり、而し催眠術療法とは範圍を大に異にす、催眠術療法と云へば、被術者をして、催眠状態に必ず導く必要あるも、心理及び精神療法に於ては、單に説法をなし、患者の精神を慰安し、或は病苦を忘れしむるも已に其療法なり、然れ共催眠術療法に於ては催眠せしめし上に、暗示をせざればならず、詳細は、催眠術治療法を參照ありたし。

只余が爰に事更に、人の忌む所の魔術應用の四字を附加したるは、普通の患者は單に術者が口先きにて説法をなすも、馬耳東風に聽き流して、暗示は受け入れられず、何等の効なきのみならず冷笑する者さへあり、然れ共患者に向つて、何か一つ奇妙なことをして示すと、忽ち信仰心を起し暗示はよく受け入れられて病氣は全治す

る者なり、其一例を下に記さん余の知人某は一種の術にて蠟燈に火を點じて口中に入れ、暫くして出すも火は依然と燃へ居る、斯くして患者に示し此蠟燈の火は消へなき故汝の病氣は必ず全治すべしと云へば患者安心して身心相關の理によりて健康に復す、又余の知人某は、細紙二枚に全快不全快と各々記して之を捻り、線香を以て全快と記せし紙捻りを吊り上げて開きて示し、必ず全快しますと安心を與ふ、線香は粗雜の質故、其の尖端に紙捻りはよく附着するものなり、又疑ひ深き患者に對してブランセットにて占ひ全快をブが指したる故必ず全快すと確信せしめて大効を奏したるものあり、約言すれば患者の精神作用を大ならしめんが爲めに便宜の方法を行ふを余は爰に魔術應用と云ひたるなり、若し其語が惡ひと思ふ者は魔術應用の四字を抹殺し無きものとせられたし。

彼の切支丹パレン術とは何ぞや、奇妙不思議のもの、如く思ふものあるも、今日其れを科學上より見れば、實に馬鹿毛たことなり、昔キリスト教を我國に布教せんとしたるに、我國人之を嫌ふて信せず、よりに如何にかして之を廣めんと苦策の結果前記魔術應用治療法の如く之を信ぜしむるには不可思議のとなして信用を

博すに如かずと思ひ、頭にて電氣の光を發したり、幽靈の幻燈を映じたりして示し、愚民の心膽を驚かし、斯く不思議のとなし得る力あり、從て其他のとなをやと風聽したり、之れによりて愚民は大に驚き、時の幕府も驚き、之を嚴禁し犯したる者は打首にすとの嚴命を布告したりと云ふ、而し今日之れを見れば、實に馬鹿毛たる小兒欺ましのことに外ならざるなり、以て、切支丹パテレンの本姓知るべきなり

第六章 見神術

神とは何ぞや、神は有形なりと云ふものあり、無形にして目に見るべからず、心に見るべきものなりと云ふものあり、有形にして目に見ることを得とする論者は、彼の本像の不動の如き繪畫の觀音の如きは、即ち神祇なり、中には生神なるものあり、稻荷の狐に於ける如き、其類なりと、此説によれば、神を見たりと云ふには、信者の枕元等に不動なり觀音なりが、紫雲か白雲か何にか乗りて現はれ、難有御言葉を下して、後消へ去るなり、心に見るべきものなりとの説は、神は無形にして心に感ずべきものなり、即ち神に近き高潔の心となれば、神に近づきたるものにて、終には全く神と

同様の氣風になるものなり、其時こそ即ち神を見たるものなりと云ふ、之を學理上より解説すれば、前者は幻想にして後者は或學者の云ふ個人の精神が宇宙の精神と同轉となりたるものにて、余の云ふ催眠状態なり、有形の神が目に見へるは催眠術にて神が見へると云へば、神が現はれて見ゆると同一理なり、今爰に人あり大に神を信ず、一心不亂に之を祈禱す、其精神は悉く信仰心に固まり、一點も他念なければ、終には實際何者もなきに己れが信ずる不動或は天狗など現はるることあり、之れは人を殺した悪人が我て我身を責めて幽靈が見ゆると同一理なり、昔の小説に往々見る所の、一心に神を祈り居りたれば神が現はれ、其靈顯によりて大効をなしたりと云ふは、即ち此幻覺或は錯覺を見たるなり、幻覺錯覺の神を實際の神なりと確信し、必ず大願成就すと喜び豫期せば、心身相關の理によりて、全く大願成就するなり、

余は天性不思議の現象を好み、夫れも遠因の一ならんか、十歳位の頃、寢所に伏し居りて時々幻覺の神を見たることあり、故に余はあれと驚いて父母に告ぐ、父母傍にありて何處に何が居る、何も居らぬてはないかと云ふて燈火を以て其處を照す

と忽然として消へ去り、又其翌夜も變りたる神出てたること十數夜なりき、其中或時は燈を照して居るに、陰暗き處に現はれ、又は夜の明け方などに現はれたり、其神體は今日確く記憶に存す、之れ如何なる理由なるか、今日之を考ふれば、決して怪むに足らざる現象なり、思ふに余は或事情により、先天的神經質に生れたる故、幻覺性妄想と名づくる、一種の精神的現象を起せしならん、此精神病の現象は急性に來りたるを以て、余は其精神の異狀を自覺せざる瞬間に罹り、暫時にして消へ失せたるを以て余は我精神に異狀あるを自覺せず、而して記憶其他の連續せるによりて、幻覺を忘れざるならんか、余は其神を見たるの故を以て、毫も信仰上の問題に關係あると思はじ。

今では余は自己催眠によりて、幻覺上の神を自在に見るを得、又少しは宗教上の門を窺ひ、心の神の如何をも感ずるを得るに至れり、之れは催眠術を研究し且宗教の本を少し覗きたる賜なりと、常に喜び居る所なり、神と云ひ佛と云ふ學理上より云へば其體同一なると信ず、故に見神と云ふも見佛と云ふも根據は同一に歸着す、此意を體せば、見神の實驗亦た堅きにあらざ、神を見んと欲せば神を信仰し、精神を修

養せば、其域に達する敢て難きにあらざ、自己催眠法によりて幻覺の神を見ることは、降神術を研究すると同一の方法なり、只其目的を異にするのみ、如上に述べたる所は甚だ卑近の通俗説なるも、之れを六ヶ敷論じ合ふも、畢竟爰に歸着する者なり、以下諸博士の高論を抄出して余の説を確めん。

井上博士の妖怪學講義に託宣神告の理を説明して曰く、

託宣神告は耶蘇教の如き有神教に於て一般に唱導する所にして、吾人若し神を信ずること厚ければ、其心上に神の託宣あり、或は神に接見して其命令を聞き、或は夢に神の示現ありて其指教を受け、或は突然託宣を感ずる等の事ありと云ふ、此等の事實を説明せんには、固より物理的の及ぶ限りにあらずと雖も、心理的よりするときは之を説明することを得べし、蓋し吾人の精神にして神を信ずるの一點に聚まり、其點に思想の專制を惹起するときは、或は幻覺妄覺を生じて神の體を顯現し、或は偶然に神の託宣を感ずることあるは自然の結果なり、されども此の如き現象は、是れ眞に神ありて然らしむるにはあらず、全く心其物の作す所なりとす、右は是れ心理的説明なれども、更に進みて其理を推究するときは、爰にも亦理想的説明を用

ひざるべからず、此説明に據るときは吾人の心の本體、即ち無限絶對の境遇よりして吾人の精神上に感動を及ぼすことあり、是れ託宣神告の起る所以なりとす、然れども其所謂絶對の體は耶蘇教にて唱ふるが如き物心以外に獨存する神にあらずして、其體は吾心と相通じ、又吾心の本體たるものなれば、其本體の發動は之を吾心面にて感受し得べきこと、實に看易き理なり、若し然らずして耶蘇教の立つるが如き神を以てせば、決して之を説明すべからず、是に於て理想的説明に據るときは、佛敎にて立つる所の眞如説に依らざるべからずと。

福來博士は東亞の光の紙上に論じて曰く、蓋し見魔の如きは其實用的價值の上より云はゞ、見神見佛に反對せりと雖も、之を心理學的方面より見る時は、精神を向上的有極的活動原理とするの見解と親密なる關係を有する者なればなりと。

此見神と云ふ文字は故網島梁川氏が用ひ初めしに起り、一時世人は大に耳を傾け議論紛々たりき、よりて尙見神のことを詳しく調べんとする者は網島梁川著「病間録」回光録、宇佐見英太郎編輯「見神論評」、文淵堂編輯「病間録批評集」等を見られたし。

第七章 幽靈對話術

靈魂をば心と云ふものあり、精神と云ふものあり、靈魂は不滅のものにて、肉體は死すとも依然たるものなりと云ひ、肉體死すれば靈魂なるものも共に滅するものなりと云ひ、此問題は宗教家の等しく口にする所なり、靈魂即ち精神は肉體を支配する主宰者にして、肉體の働きは皆精神即ち靈魂の命令による、若し靈魂の命に依らずして肉體の働きあらんか、其の人の働きにあらざるなり、人の働きと云ふときは、靈魂と肉體との行動一致して初めて然るなり、人は靈と肉とによりて成ればなり、爰に人と云ふは、法律上の人と云ふ意味とは異りて、單に心理的哲學的より見たる人を云ふなり、法律上にては國家も人なり、會社も人なり、之れ即ち法人なり、法律上に云ふ自然人を心理的哲學的の上より觀察して云ふなり、此人が怨を抱きて死したるときは幽靈となりて怨を晴らすことありや、幽靈は青き長き顔に、髪を亂し白衣を纏ふて兩の手首を胸先に下げ、ウラメシイと唱へてフラ／＼と出ると云ふ、果して斯かるものありや。

文學博士井上圓了先生著「妖怪學講義」に曰く、

「夫幽霊の談は時の古今を問はず、洋の東西を論ぜず、遍く世に傳はれる所にして、眞に之有りと思ふ者、現時にありても猶鮮しとせず、而も實際之を見たりといふ人に至りては甚稀なり、然らば彼多數なる幽霊論者は大抵實際に之を見し人にあらずして、古來の傳説若くは世人の風説に聞き、依りて以て自己の信仰を固うしたる者なり、是を以て眞に幽霊有りと信ずる人に對しては、其論の眞偽を質さんより、寧ろ傳説風説の果して確實なるものなりや否やを質すを要す、即ち幽霊有無の問題は事實眞偽の問題に歸着するなり、今幽霊有りと論ずる者の論據とする所を考ふるに、靈魂不滅の説に外ならず、即其説に曰く人の死するといふことは唯其肉體が生活作用を息めし迄にして、靈魂其物の滅せしにあらず、既に靈魂にして滅せざる以上は、一旦肉體を離れし後と雖も、如何にかして一種の形を現はし、人に其存在を見すべき道理なり、故に死者が自家又は社會の事に就て執念を残して死後猶安ずること能はざる場合には、幽霊となりて其形を生存せる人に見せ、其懐ふ所を告ぐることを得るは疑ふ可からず、と然れども少しく考ふるときは、世に所謂幽霊と靈魂

不滅論者の所謂靈魂とは全く性質の異なるものなることを發見するに難からざらん、何となれば所謂幽霊には形あり色あり聲もあり、重量もあり、而して所謂靈魂は人の精神を指すものにして、此等の性質を具へざればなり、若し幽霊にして果して靈魂と同一物ならんには、是即ち精神其者の體にして、一旦肉體を離れし後形色を具へて人の前に現すべき謂なければ、世に其形體を見しといふ人の眼前に現れし物は、實は幽霊にあらず、又靈魂にもあらずして、之を他物に假定して可なり、且幽とは不可見の謂ならずや、而も之に形體ありとせば、論理上撞着の甚しきものといはざる可からず、されば彼幽霊論者の説く所は、道理上既に靈魂不滅説と全く關係なきものと知るべし、且實際上に於ても、全く自家の經驗に基けるにあらずして、多くは風説傳説の類を根據とせるものなれば、之を事實として其論を承認すること能はざるなり。

と今日は芝居に演ずる幽霊、繪畫に上ぼせし幽霊の如き有形物は、大古畫家が想像して書きし者にして、實際に斯る者なしとは一般に信ずる處なり。

余曾て催眠術新報紙上に於て心理學上幽霊、生霊、死霊、怪物を顯す法と題して次の

如く論じたることあり。

俗に云ふ生靈、死靈、怪物、幽霊は心理學上過去の記憶より起る一種の心的現象に外ならず、よりて記憶と人生の關係を述べれば此問題は解説し得らるべし、元來記憶は主に過去の事に關す、過去の記憶は實に未來を限るものなり、吾人の運命は殆ど過去の記憶に依つて支配され居るものなり、畢竟吾人が今後進んで往く所の筋道は、皆從來記憶せる所を彼此折衷し組織して、而して或は事業に従事し、或は學問に従事し、後世の計畫を立てて往くなり、故に前半生の記憶は後半生の運命を定むと云ふも誣言にあらず、前半生は愚か、日々過去の記憶が吾人の未來を支配せり、凡人は青年時代には前後の思慮なく、随分亂暴な事をなし、殊に殘虐な事をなすものなり、其當時には左程惡事と心付かず、青年の時は何事も遠望的に少しも回顧せず、段々自分の勢力衰へて來ると、回顧的になつて、後をのみ顧みる様になる、故に後半生は現在活世界に居り乍ら、此社會の生活でなく、寧ろ過去の社會の生活をなし居るものなり、即ち過去の事が何時にてもありくと頭の中に現出す、年を取つて眼が惡く耳が遠くなり、腰が曲り足が重くなりて來ると、靜かに好きな盆栽でも眺め

て日を暮すより道はなし其時に當り第一の樂は過去の經驗を繰り返すとなり、其時に於て自分が過去に俯仰天地に耻ざる善事をなし置きたる記憶が現はるれば主觀的に最も幸福なる生活をなすとを得、之に反して人に聽かれて恥かしき惡事をなし置かんか、其記憶が現はるゝ度に煩悶苦惱するに至る、今迄は他に強き刺激ありて意識の底に隠れて出てざりしも、其刺激無くなりしより非常の勢力を以て現れ來るなり、之れが所謂若い時に殺人、毆打等の惡事をせしものが、年取つてより化物、幽霊、生靈、死靈等に苦めらるゝ所以なり、化物、幽霊、生靈、死靈は畢竟全く過去の記憶より起る一種の心的現象に外ならざるなり、或繼母繼子を非常に慘虐に取扱ひ、長男にも拘らず自宅に居ること出來ざるやうにして追放し、失踪の宣告をして自分の子に家を嗣かせり、然ると其人が死に臨みし時、先の繼子の名を呼んで非常に苦めり時には其母は怒りて、己の床の中に入るとはひどいと云ひ、又腿に喰付いたとか、手に喰付いたとか言ふて泣きて叫べり、傍人斯る事はあらずと云ふも承知せず、見てくれと云ふより喰い付かれたといふ所を檢するに、果して喰付いたと同様の傷あり、斯くて其婦人は非常に苦んで終には死せり、此場合に於て昔の人は生

靈とか死靈とかの崇りなりと云ふも、吾人の解釋によれば過去の記憶が強く中樞を刺激し、心身相關の理によりて起りたる一現象なり、嗚呼惡ひことはすべからずなり、惡事をなして物質上に満足を得るも、後日精神の苦悶を如何せん、宜しく善事をなせ、假ひ物質上は不足を告ぐるも、即ち口に美味なく、居に佳麗なし、と雖も、精神の愉快は、王公の富も、遠く及ばざるべし、上述の理によりて之れ等のものを顯はすと否とは、銘々の心掛如何にあり、之等のものを恐るゝものは其起る種子を蒔かざるぞよし。

余は之を以て幽靈に對する心理學上の説明に代へんとす、俗に曰ふ神佛の崇と稱する現象も之れと同一理由によりて起る所の自己暗示の結果なり、又彼の鬼門方位、日柄縁起、相性等も同一理由にて説明し得る精神作用に外ならず、即ち方位相性が惡しき故必ず災難あるべしと豫期し確信すれば、其豫期確信通りの結果を得るなり、又之れと反對に、日柄縁起が善かりし故必ず幸福來るべしと豫期し、確信すれば、其豫期確信通りに幸福來るなり、愚民は此理を知らずして、迷信に陥る嘆ずべきなり。

以下人魂と稱する者に就て少し説明せん、人魂と稱ふる者は即ち學者の所謂怪火なり、怪火には種々あり、燐火、隱火、鬼火、狐火、海火、不知火、龍燈、聖燈、佛燈等一々擧ぐるに遑なきなり、是等は皆物理上の原因によるものあり、或は精神作用によるものありて、よく其原因を探求すれば、決して怪しむに足らざるもののみなり、彼の狐の御婚禮と稱して、夜中に點火が列をなして數多見へることあり、其點火は或は消へ、或は點じて見事なることあり、其は狐が人骨を口に食へて、歩むなりと云傳ふ、其現象は遠くより之を望むもの故、實際よく調べて見れば、人間の婚姻にて數多の提燈が人の影になりたり、又現はれたりしつゝ歩むなりき、此場合最も多からん、然し實際狐が人骨を食へて奔走するときは、青色の燃火を生ずるものなり、之れは骨中に含有する燐素が狐の口中より吐き出さるゝ、炭酸に相合して發するものなり、凡そ動物の骨中には悉く燐素を含有し、而して狐が行くゝ呼吸する毎に口中より炭酸を吐き出して、二者相合するに原因するものなり、故に古昔よりの言ひ傳へも、穿ち假空談のみにあらざるなり、余は曾て東京新報に次の如く論じたる事ありき、俗に人魂と呼ぶものあり、墳墓の邊から青い火の玉が中天に上りて消ゆることあり、之

六二

これは死人の亡魂が宇宙に迷ふ證據だなどいさも本當らしく甚だ恐を抱く人あり、多くの場合に於て之れは其を見る人の精神作用に依るものなり、實際に於ては其事が甚だ稀なり、併しながら動物の骨の中には例の燐素の化合物があるから、永く墳墓の中に埋まつて居た、人骨が化學的變化の結果、一種の燐火水素を發生し、之が他の空所から出て、空氣に觸れ忽ち炎焼して光を放つことは稀にあることにて、或は之を認めて人魂亡靈等と早合點するものあり、昔より此燐火に就ては種々の面白い附會の説が澤山あるも、一も科學的に研究する材料となるものなし。

催眠術を應用せば幻覺錯覺を以て靈魂でも、幽靈でも、人三化七ても何んでも自在に現はす事を得、催眠術による場合は、人爲的故爲的なる故、左程驚かざるも、自然的偶然的に現はれたる場合は、其原因を誤解して大いに喫驚するなり、然れども其原理は人爲の場合と同じく、精神作用なるを以て、原理を明らかにすれば左程驚くべき珍奇の現象にあらざるなり。

第八章 眞言秘密術

眞言秘密とは何者ぞや、或人曰く這は容易く俗人に示すべきものにあらず、之を示さば秘密の名に背くと、或は之を説明するも専門に研究せる者ならては容易に解し得らるゝ問題にあらずして信に不可思議の秘法なり、と又或者は曰く愚夫愚婦は斯る馬鹿毛た嘘事を信ずるも、日新の學理を修めたるものは一笑に附して顧るものなし、と諸説紛々として期する所を知らず、よりにて門外漢たる余は眞言秘密を記したりと稱する書を参照したるに、普通釋教と眞言大日教とによりて所説を異にし、眞言宗の六大と稱することを管々敷説明しあるも、畢竟は精神作用即ち心身相關の原理を六ヶ敷佛敎を引いて説明したるに過ぎざるものゝ如し、故に其詳細は、專問の書に譲り、爰には唯普通に行者が行ふ所の印の結び方を示すに止めん。

眞言秘密を行ふと云へば必ず外形に現はるゝ所の印中護身法と九字を以て其尤なるものとす、護身法は十八契印中第一にして秘密甚深の印言なりと云ふ。

其一は、淨三業の印と稱し左右の掌を相合せて掌中をうつろにす、斯くなしながら唵薩婆訶輪駛薩囉達磨薩囉婆縛輪度哈と五遍唱うるなり、然れば身口意にて作りたる罪業を滅して清淨ならしむることを得と。

其二、佛部三昧耶の印にして前記淨三業の印の掌を開き物を兩掌に盛り置く如き姿勢をし乍ら、唵但他藥都納婆囉也娑囉訶と三遍唱ふ然れば十方三世諸佛の護念を得て壽命を増し福惠を長ずと。

其三は、蓮華部三昧耶の印にして左右の五指を開きて拇指と中指と小指と小指と相接して八葉蓮花の形としながら、唵跋囉訶納婆囉也娑囉訶と三遍唱ふ然れば觀世音及び諸菩薩の加持を得て一切の業障を消除すと。

其四は、金剛部三昧耶の印にして左掌を下方に向け右掌を上部に向け左右の兩掌の背を密接せしめ、拇指と小指とを各釣の如く引きかけながら、唵囉日盧納婆囉也娑囉訶と三遍唱ふれば、金剛部の諸尊の靈顯をかふむり、一切の病難を除き堅固の體となると。

其五は、被甲護身の印にして、兩小指を以て十文字形とし其兩又各々薬指をかけた堅く握り、中指と中指の尖端を合せ人、挿指の尖端を中指の背部に附け、拇指と中指とを密接しつゝ、唵囉日羅銀爾鉢羅捺跋囉也娑囉訶と五遍唱ふれば、諸の天魔の障碍を除き一切の厄難をよけ、身を堅固ならしむと。

以上を護身法と云ふ、其印の結び方及び呪文の唱へ方は人により多少の差あり、行者は互に我れが行ひ方が正しと論じ合ふも、其結果は同一なり、之れによりて考ふれば、印及び呪文其者が効あるにあらざることを推知すべきなり、其印及び呪文其者が効をなすならば、結び方或は唱へ方異らば、從て其結果異らざればならざる道理なればなり、之を職業とせる者は多年之を行ひ、よく練習せるを以て、前記五個の印を一より五迄手を離さず連續して見事に之を行ひつゝ、呪文は暗誦し居りて早く唱ふるなり。

次に、九字の印の結び方を述べん、九字は縱横法とも云ひ、根本の呪語九文字より成れる故九字の名あり、九字は即ち、臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前、之れなり、俗に九字を切ると云は此事なり。

咒文 印名 印の結び方

臨 獨古印 左右の手をうちへ組みて中指を立て合す。

兵 大金剛輪印 二手内に組み人指指を立て、中指にてがらむ

闘 外獅子印 左右互に中指にて頭指をからみ、大指無名指小指を立て合す。

者 内獅子印 左右互に組み、中指を無名指の交叉にからみ、大指頭指小指

を立て合す。

皆 外縛印 二手各々外へ組み合すなり。

陳 内縛印 十指互に内へ組み入るゝなり。

烈 智拳印 右の四指を握り頭指を立て、左手にて頭指を握る。

在 日輪印 左右の大指頭指の端をつけ餘の四指は開き散す。

前 隱形印 左の手をうつろに握り右の手上に置く。

而して口に悪魔剛伏御敵退散七難速滅七復速生秘と唱へ、息を吹き入れ印を解きて、刀印即ち頭指と中指とを立て他の指を握り、刀を以て物を切り拂ふ状を空中にてなす、其切り方は臨と横切し兵と縦切し、斯くの如く闘者、皆陳烈、在、前、の五横四縦に切り拂ふなり。此印の結び方も人により多少異なる、真言秘密を行ふ行者はよく之を熟練し居りて、前記九個の印を殆も一の如く呪文を唱へつゝ連続して之を行ふなり、故に其手先の莊嚴にして、呪文の奇警なる確に愚夫愚婦は膽を奪はるゝなり。

此護身法と云ひ、九字と云ひ、文字に顯せば唯之れ丈のことなるも、其印の結び方と口に唱ふる呪文とは、何にも知らぬ者の目には確に大秘密の存する如く見ゆる者なり、印の結び方は之れを讀みし丈にては少しも之を知らざるものには、獨習困難なるも、人の行ふを見るか、或は人に就て習はせ、烟草一服吸ふ間に容易に覺へらるべし、其れを練習して早く上手に行ふが奥傳なり、昔は行者其人も之れ等の印には非常の靈顯ありて、確に奇跡を顯はすを得と信じ、行者の祈禱を受くる患者も又行者が一大秘法たる、印を結んで下されたる故、病氣は治すと確信し、豫期して其豫期通りの結果を心身相關の理によりて得たるなり、換言すれば真言秘密は精神作用を惹起する所の方便に外ならずと信ず、殊に俗間に於て愚夫愚婦を瞞着する手段として、真言秘密を振り廻すものあり、愚夫愚婦は真言秘密とは唯々靈顯著しき秘法なりとのみ妄信す、其機に乗じて姦智に富める似非行者は愚民を惑はし、害毒を流すこと珍らしからず。

近來催眠術を行ふに當り印を結ぶ者あり、印其物が人を催眠せしめたり、病氣を治したりする効なきは無論なるも、術者は雜念を拂ふ手段となし、被術者の信念を高

圖三第



ひる方便となる、殊に傍觀者ある場合に普通の催眠術のみにては價值少く見へ、隨て精神作用を惹起すること充分ならず、之を應用せば頗る妙なり、第三圖に示せるは催眠術師が女子の被術者に向つて東方降三世夜又明王の印を結びたれば、忽然深き催眠に陥りたる處なり。

第九章 不動金縛術

不動金縛術は殆も人が金紐で縛せられし如く、身體を動かす能はざるやふにする術なり、此術は古昔より神佛の力に歸して常人の行ふこと能はざる不可思議の法なりとせり、殊に俗間に傳はる所の術は針小棒大にして決して信ずべからず、而し或る程度に於て此術の行はるゝは事實なり、之れ精神作用によりて行はるゝものにして、即ち催眠術の一種なり、今之を説明せんに、金縛の術者と被術者との二人あり、術者被術者に向ふて一定の呪文を唱へ印を結び以て此秘術を行ふものとせんに、被術者は己に今術者が金縛の術を行ふことを知らば、自己の豫期作用によりて、其身體強直状態となり、自ら之を動かすこと能はざるに至るなり、若し又被術者

驚神的大魔術

が金縛の術を我身に施さるゝことを知らざる場合は、豫期作用にあらざるべきが如きも、其場合に於ける術者の舉動容貌、大に平常に異なる所あり、非常の精神力を外貌に現はし一見悚然たる状態を示さんか、縦ひ被術者は何の意たるを知らざるも、之を恐怖するの餘り、手足胴體強直して動かざるなり、之れ宛も蛙が蛇に睨視せられて畏怖の餘り、身體に強直を起して遁走すること能ざると其理一なり、又催眠術に於て覺醒状態にある者に向ひ、突然汝の手は動かぬと云へば、動かなくなることに、あるは人のよく知る處なり、其催眠術を稱して不動の金縛と云ひたるなり、故に不動の金縛なるものは、妄談虚説にして信すべきことにあらずとするは、誤りなると共に神佛の靈顯に歸するも又誤りなり、決して不可思議のことにあらず、心理上の一現象に過ぎざるなり。

余は曾て、東京新報紙上に不動金縛につき次の如く論じたることあり。
「靈顯著しき神社へ盜賊入り、財寶を盗みて布呂敷に包み、脊負ふて逃げ去らんとするに當り、賊の身體は無形の鐵鎖に繋がれ、歩むこと能はず其儘となり、翌日捕はれたりとの噂はよく耳にする所なり、此現象は偏に神の靈顯に期す、然し今日之を心

七〇

不動金搏術

理學上より見れば、右の噂は行者等が信徒の信仰を得んがため、故意に虚偽を傳へたる場合も少なからざるべし、或は事實前顯の事ありとせば、其は精神作用によりたるものなるべし、例へば此神殿は神聖の場所にして、靈顯著しと云う聞へ高きにより、若し神の罰が當りはせずや、と戰々競々としつゝ、物を盗み、イザ逃げ出でんとする一刹那、鼠又は貉の類天井裏等にて突然異音を發せんか、神の罰顯はれたりと恐怖の結果、催眠状態によくある止動状態を呈し居り、其の儘捕はれたるなるべし、余は此原理によりて其現象を自在に起したる實驗をなせしこと算なし、其一例を下に記さん、島津公爵及び中央大學卒業生和賀井操君其他數百名の面前に於て、余は或る男子をして汝の手は動かぬと云ひたれば、其通りとなれり、動く様になつたと云ひたれば、直に滯りなく動けり、又身體は少しも動かずと云ひたれば、毫も動かざりき、之れは催眠術によりて故意に其状態を惹起したるなるも、偶然に其状態を惹起する場合も同一理由によりて生ずるなり。

催眠術を應用すれば手足を不隨になす如きは朝食前のことなり、其より進んで身體全部を何等の感覺なからしむることを得、魔睡藥に代用して外科手術を爲すこ

七一

とあるは人のよく知る處なり。

余曾て芝區西應寺町十五番地土田猪松方服部金平君、其他數百名の面前に於て、一書生に催眠術を施し、疼痛無感の状態となし置き、其腕に針を刺したるに、書生は眠り居りて毫も之を知らず、覺醒後も其事を更に知らざりき。之れによりて見るも不動金縛の有様の容易なるを知るべきなり。

神佛の靈顯は悉く精神作用たる自己暗示の結果に外ならず、試に見よ盜難除けの守札を出す神社の賽錢箱に、嚴に鍵をなしあり、然るに其の鍵を破りて賽錢を盗まると、こと往々あるを、乍去其の守札を購ひて門戸に貼り置けば、盜賊は入らずと家族の者は安心して眠るを得、即ち其の守札は安心を得る利あり、然れ共守札にのみ依頼して戸締を怠らば、終に悔ゆとも及ばざる災難を受くることあるべし。

第十章 精神感傳術(テレバシ)

精神感傳術又は遠感術と稱する不思議の現象あり、萬里を距て、居り其父母親戚の一身上に於ける大變動を偶然に知らすことあり、又故意に此現象を起すことあり。

り、即ち甲と乙とは數間或は數十哩離れ居りて、甲の思ふ所を乙に通ずる不思議の術をなすものあり。

萬朝報に下の如き記事ありたり曰く、テレバシ、即ち精神感應術は漸く進歩して、近い將來に於ては無線電信や、無線電話は不用に歸し、人間は唯だ其精神に依て思想を他に傳へるやうになることは不可能ではないと思はれるやうになつて來た、現に和蘭のザンチャツヒといふ人の夫人は、子供の時から夫と同棲して居たので、今では夫が或事を思ふと同時に其心を知ることが出来るさうだ、此頃英米で之を實驗したが、極めて良好の結果であつたといふことである、それは劇場で行つたので、夫人は舞臺に立つて白墨を以て石板に對し、夫ザンチャツヒ氏は觀客席を廻つて客から何でも構はず品物を出して貰ひ、暫く之を見詰ると同時に夫人は其物の名を石板に書くのである、が銀行手形の番號なども、夫がたゞ之を見詰めれば、夫人は誤らず其の番號を書くといふことだ、勿論ザンチャツヒ氏は夫人の方を向いては居ない、又品物も見えないのである、或時などは或人が兩人を自宅へ招待して、夫人は階下の室に居らしめ、ザンチャツヒ氏を伴つて階上の一室に入り、勞働者の肖像を氏

に示した、然るに階下の室に居る夫人はそれと同時に、人の肖像と叫んだといふ程で、勿論鏡や電氣などを用ふるのでは、決してない、更に驚くべき例がある、米國のア
ンドリュウ、マツコンノルといふ人は、或婦人と類に此精神感應術を練習した結果、
今では其婦人が千二百哩の遠地にあつても、其心を通ずることが出来る、と聲言し
て居る、若し事實である、とすれば重寶な事である。

山口縣下關市西南部町井上仲一方大日本催眠術協會卒業生松川英一君が、心力感
通の實驗をなしたる報告の一節に曰く、或日商用の歸途松山西堀端を通りたる、と
き、數間前に五人連の女學生歩み居たる故、右より順に一人宛後に振り向けしめん
と心力を集注したるに、思ふ通りに振り向け、次に其中の一名をして歩む能はず
と思念したるに、彼は忙然直立したる儘となり、友の進に拘らず止れり、そして次に
右手を挙げよ空を見よと思念したるに、意の如くなりき、と余又酒井伯爵大隈伯爵
其他多くの名門の庭園に於て、紳士淑女の面前にて之と同一の實驗をなしたるこ
とあり、然り而して余は深き催眠状態となり居る者を十數間離れし處に立たせ置
き、閉目せしめ置きて、摸擬の作用を現はさしめたることあり、即ち余が右手を舉ぐ

れば被術者も右手を挙げ、下ぐれば下げ、口を開けば開き、閉づれば閉ぢる、其他余が
奇怪の舉動を一々真似たりき、又余は勝伯爵或は栃木町馬頭町金子國七君其他數
千名の面前にて、一美人を椅子に凭らしめ、余が一言眠れと命じたれば直に深き催
眠状態に陥りたり、よりにて女子の手を水平に伸ばし置き、余が其手を下に引く真似
を爲せば、彼の手は下に下る、上に引き上ぐる姿勢を探れば、上に其手は上ること、恰
も絲に繼がれる人形の手の絲を引くに異ならず、此催眠状態に於ける實驗と同一理
由によりて、精神感傳の實驗を説明することを得と信ず。

催眠術の現象を説明するに、心理學上より説明するを最も進歩したる學説とす、然
れども全く心理學のみによりては今日の處説明し得ざる現象あることは確なり、
或る學者は心理學上より説明し得ざる現象は、虚偽を流布するものなりとのみ速
断して顧みざるも、开は未だ研究の届かざることを自白したるものと見做して可
なりと信ず、然ればとて催眠術の現象を哲學にのみよりて科學的に證明し得らる
ゝ點迄も、排折せんとするは余の又採らざる所なり。

前記の精神感傳の現象は、偶然による暗合の場合もあらん、而し悉く偶然の暗合と

のみ云ひ難き所あり、宜しく學者の實驗を希望する所なり、人を振り向けさせんと欲せば、其後に立ちて振り向けと心中に思ふて、熱心に其事にのみ心力を凝むれば、其通りとなるなり、或は某氏余の宅へ來れ、或は來りたる某氏歸宅せよと熱心に思念せば、其通りに感應する者なり、之等の實驗成功せば、順次複雑なる實驗をなすなり。

凡そ暗示を感應せしむるには、思想を發表する所の形式によるを常とす、例へば斯く思ふべしとの意を通ずる方式なる、言語とか、身振とか、手紙とか、電話とかによりざればならざるを普通とす、而し精神的暗示と云うて、心に思ふた丈にて未だ外部に何等の表出をせざるに、相手方に對して意が通ずるとの説を専ら泰西にて主張する者あり、精神感傳の現象も之れと同一理由に基くならん。

第十一章 天眼通術 (クレボヤンス)

天眼通術とは目又は耳を以て知ることを得ざる、遠方のことを一室に居り乍ら實地其場にあるが如くよく知る所の術なり、從て縮地術、天耳通術、神通術、遠觀術等の

異名あり、之につき數多の實例あり、瑞典の哲學者スヴァイデンボルグ氏は、三百哩の遠方の火事を目前に見たる如く知りて大に世を驚かしたることあり、又ブリッタ氏は一魔術婦に千哩遠くの患者を鑑定せしめられたれば、其患者を診斷しつゝありし醫師さへ知らざりし、棘肉の銅片を發見したることあり、未だ我國にては斯かる實驗の成功したるを聴かず、しかし催眠術により被術者を催眠状態となし置き、之れに暗示して厚き木箱中にある物品を云ひ當、又は未來を豫言して誤らざることあり、或は遠方のことを窺はしめ、實際其場にありし如く、よく適中せしめたることあり、現に日露戰爭の際、肉彈の著者として名高き櫻井中尉が、旅順に於て催眠術を以て敵情を偵察したること、又大日本催眠術協會々友にして、當時麻布三聯隊特務曹長藤倉清左衛門君が、奉天の戰に於て此現象を利用して、彼我の兵士の狀況を一々當てたることは、曾て雜誌に掲げられ、既に世人の熟知する所なり、尙次に大日本催眠術協會卒業生の行ひたる實驗報告を記さん。

術者	赤羽工兵第一大隊第三中隊	齋藤清政
被術者	同隊	野中勝正

右術者齋藤君の報告書に曰く明治四十年十月廿日午後七時前記の被術者に施術す可く立會人及び參觀人二名の外室内に入ることとを禁じ全時施術に着手せり。先づ被術者をして椅子に憑らしめ閉目させ筋肉の各部の力を全く抜かしめ催眠術は充分安心す可きものなること及び沈着す可き注意事項を述べ頭部を軽く摩て暫く心意の平穩なるを窺へり。然して又活目させ今より催眠術をなす可きを述べ距離二尺を隔て懐中時計の中央點を凝視すること二分時にして更に閉目させ力なき深呼吸をなさしむ且つ其數を數へしめ漸次君はだん／＼眠くなりなす君はだん／＼よい心地に成て來ましたもう眠りますもう眠た」と暗示を與へしに被術者は最初より約八分時にして全く深き催眠状態と成れり。因て有意運動の禁止を試みしに甘く成功し次て幻覺錯覺も確實に行われたり(因に此の時被術者は首を稍前方に垂れ時々深き呼吸をなせり)斯くして術者は暗示を以て被術者の故郷へ睡遊せしむ此の時術者は被術者に向て君は今列車に乗て

立會人

鐵道大隊第三中隊

相山茂吉

七八

故郷に到ると暗示せしに全く列車内に在ると思惟し車内の光景又は快走する列車の妙味偕ては停車場に到着せる機毫も實際の言語動作と異ならざりき。間もなく術者は君は今故郷へ着いたと暗示せしに早や全く郷里の人となり父に逢い母に語り知己朋友と相會せる様殆んど實際と異ならず種々なる幻覺をなして后去て東京に歸る其の順序及び経路前述の如し。斯くして術者は幾程もなく被術者に向て睡遊中の幻覺を確實に記憶す可きを命じ且つ覺醒後極めて心神爽快なる暗示を與へ一二三の號令を以て覺醒せしめたり。然して此の現象に於て最も奇とす可きは被術者睡遊中に己が實家に新たに買入れい選まじき馬ありしこと是れなり被術者甚だ不思議に思ひ早刻郷里に向て新馬の有無を糺せしに果して本年六月求めたる馬あれども未だ通知せざるに如何にいて知れるやと頗る怪しみたる返信來れり。如斯報告書は余の許に幾百通となく集り居れり催眠術のことを知らざる者の中には珍らしきも少しく之を知りしものにはさまで耳新らしきことにはあらざる

七九

べし、然し乍ら必ず百發百中と云ふこと能はざるは勿論、天眼通的實驗の行はるゝ被術者は甚稀なり、故に或催眠術家は此現象は不能のことを偽るものなりと云ふも其は未だ研究が届かざることを自白するものなると共に催眠術によれば必ず容易に行はるゝ如く云ふも、又誇大の言たるを免れず、余が之を實驗したる中最もよく此現象を起したる被術者は、福島縣耶麻郡小川村小布瀬區乙千二百七番地大塚幼吾氏なり、余は氏に施術すること數千回にして、催眠術上の現象は天眼通を始めとして、悉く現はさしめたり、天眼通の實驗中過去又は現在のことを當てたるとの點は尤も人の實驗したる所なり、而し未來豫知術と稱して未來を豫言する實驗に熱中せるものあり、果して他日成功するか否哉、空想を議するものとして、一概に排斥せず學者の研究を望む所なり。

此現象を學理上より説明することは頗る困難なり、而し事實出來ると云ふことは争はれざる所なり、彼エツキス光線の如きも、或度迄は學理にて説明するを得るも未だ盡さざる所ありと云ふ、而しエツキス光線の奇なる働きたる不透明物を透視し得る事實は争ふべからざるなり、催眠術上天眼通の原理も之れと同一なり、而し

此現象を説明するに、哲學を以てするものあり、曰く個人の精神と宇宙の精神との合致による、個人の精神が無念無想の極となれば宇宙の精神と同一となる、然れば過現末も何もなくなる、即ち場所の制限時の制限もなくなり、萬里の遠方も此處も同様の現象となる、從て明かとなるや當然なりと云ふにあり、又心理學上より此現象を説明する者は、曾て米國狐狗狸の章に於て述べたる多重人格の理によりて説明す、宜しく學者の研究を望む所なり。

第十二章 火 渡 術

我國古來より祈禱者が火渡を行ふことあり、其方法は種々あるも概ね同一なり、今爰に最も多く行はるゝ所の方法を擧げん、先づ松割木を長さ凡二間巾五尺高さ一尺位に積み重ね、其四隅に竹を樹て繩を張り、七五三を吊り、修驗者は其一方に立ち火を放ち、咒文を唱へ、九字をきり割木全く火となりたる時、助手棒を以て其熾火をたゞき凸凹なからしめ平坦とす、修驗者祈禱終り跣足となり小足にて早く渡る、信者之に従ふ、傍より注意するものあり、曰く必ず跣足なるべし、履物を穿つべから

ず、曰く熾火の中央即ち先に修験者の渡りし處を行くべし、之れ火防の術を専ら中央にのみ行ひたればなり、曰く疑ひあるべからず、否らざれば火傷を受くべし、と稀には火上を渡るに草履を穿ちて渡る修験者あり、其草履は鹽水に二日位浸して乾したるものなり、と又熾火の上を渡る所に鹽を數多撒布するものあり、又豫め松の割木を積むとき、其割木に修験者梵字を一々記す、稀には梵字を記さずして用ひざるものあり、之れは其松木に節ありて火を點ぜんか、やに出て、後渡る際足に火傷すればなり、其火傷を防がん爲めなること發見せられたり、鹽の草履又は鹽を多量に撒布するものは、既に手品の種と見て可なり。

余は此火渡なるものは、神佛の靈顯にあらざりして、物理上及び心理上の現象なることを信ずるものなり、即ち修験者は斯くせば火傷することなくして、無事に渡ることを得との確信固くして動かざるが故に、其結果を得るなり、蓋し其靈顯を疑はゞ火傷すと云ふは、即ち精神の作用たる豫期の結果なり、物理上の理由としては、松の熾火は質鬆粗にして従て熱度低く、火も消へ易し、今試に松の炭火を壘上に落すも直に拾はゞ、焼痕なし、却て火の滅せるを見る、又之を草履にて踏まんか直に火の消ゆ

るを認めん、然るに足底は皮膚厚くして堅く、神經遲鈍なれば、此感覺鈍き足底を以て、鬆粗にして消へ易き餘燼を踏むこと故、何等の火傷なき所以なり、稀に信念の淺き者火傷することあるは、足底の土踏ずなり、之れ土踏ずは凹形をなし、其皮膚他部の如く厚からず、感覺も又他部より鋭敏なり、殊に土踏ずの名の如く熾火と皮膚との間に空隙あるがため、炭火は消へずして却て火傷するなり、よりに土踏ずが割合に高き者は火傷し、土踏す低くして足底殆ど平面なる者は火傷せず、又渡る處の炭火を平坦とするも、凸凹あれば空隙を生じ、足底火氣を受くることあると、踏きて顛倒する患あればなり、而して火焰にて衣裳の燃へざるを不思議に思ふものあるも、焰の端は輕き物を燃焼することなきを知らば、思ひ半はに過ぎん、試に臘燭の焰上に紙を懸垂するも一寸なれば燃へざるものなり、鹽は、無色透明不燃體なるが故、之を火中に撒布するも、火勢を蓋ひ火光を減せず、又多く廣き地を撰み日暮を待てするは、空氣中の水素重量を増して地面に近づき、燃火に缺くべからざる酸素上騰するに便なると火光を成るべく著しく顯はさんが爲めなり、特に最も記憶すべきは精神の作用なり、彼の宗教の信者寒中戸外に於て冷水に浴し、祈念すること數十分

時に亘り、或は嚴冬朔風を衝ひて、襦袢一枚にて寒詣をなし、毫も風邪に罹らず、之に反して衣服を數多重ね着をなし、頭巾を以て頭部顔面を包み、火鉢に暖を探りつゝ、寒ひ々々と叫び而して風邪に罹るものあり、火渡の如きも神佛の靈顯により決して火傷することなしと確信し、而して其結果を得たる所の精神の作用が主なりと信ず。

東京市の路傍に於て大なる手ランプに火を點し、其火を手掌或は腕に摩し附くるも、少しも何等の異常なしとて、之を示して種本を賣るものあり、其火を附くるに、堅く手掌或は腕に摩し附くる故火は忽にして消へ火傷することなきと斯くすれば何等の害なしとの豫期心の結果なりと信ず、火渡の原理は之れと殆んど相似たるものなりと考ふ、余は曾て松平子爵及び東京高輪中學校内推原堅君其他數百名の面前に於て、大ランプに火を點し眞を甚だしく出して火勢を大ならしめ、焔々たる火中に手を入れたるに、何等の異常もなし、只油煙にて手掌が汚れたるのみなりき、只此に注意すべきは、久しく點し置きたるランプなるときは、口金焼け居りて火燒することあるも、點して直ちに之を行はゞ其患ひなし、余の考によれば此實驗を擴

張して、布圍十枚位に石油十石も注ぎ、火を點じて其中を裸體にて自在に通過することを得と信ず、其を見るものは大に驚くも、實際に於ては安全なり、見よランプの火を疊或は板の間に失したるとき、其上に布圍をかければ火は忽ち消へ布圍は少も焼けざるを、一寸見ると奇險の様なるも、やりて見れば簡易のことなり。

曾て中央新聞に「不思議の火渡り外人の激賞」と題して次の記事ありたり。
「米國哲學者ロウエル氏が去る廿五六年の頃、我邦へ來朝せし時、あらゆる神社佛閣の研究をして歸つたと聞いたが、間もなく同氏の見聞録が一卷の書となつて、米國の出版界に現はれた、其中に同氏が筆を極めて驚かれたのは、神田今川小路の神智教御嶽教會で毎年、九月十七日に執行する所の「火渡り」の一項で、夫れが同國人の疑問と研究の材料になつて、爾來日本へ渡航し來る紳士淑女は必ず立寄つて實見するもあれば、自から火渡りを實行し去ると云ふ、外人間には日本に於ける、珍らしき名物」と稱へ居る、其の火渡りの光景を有の儘に描いて見やう。
火渡りの場所は朝來ドンヨリとして何時雨の降つて來やうも知れぬ空合のため、境内の群集は倒年より少かつたが、火渡りの場所はと云ふと二個の門の間にある

三間に四五間の所を太い丸太で結つて、四方に青竹を建て、七五三繩を張つて、不淨の者此場へ入るべからずと認めた旗がたててある、中央に巾一間餘と長さ三間近い所に五十俵程の炭を平たくして、夫れに炭俵を覆ふてあつた。

五時前には盛んに御魂潔めや祝詞をあげて、行者も信者も其方に集まつて居たが、見物がドシ／＼歩き来る徐々雨は降り出して番傘蝙蝠傘をさしかけ、執行の時や來れとわめき出す、折柄某華族の一家、外人には露國公使夫婦を始め、各貴紳令嬢など何れも花々敷着飾りて、七十餘名の來賓に設けの棧敷は見る／＼満員、中にも特に人の目を惹いたのは故市川園洲の未亡人を始め富貴子實子二人の娘と孫を負ふた乳母と云ふ一家九人場中に見えたのであつた。

五時十分頃に神子と云ふ(余はそれに白丁姿をさせたい)印袴纏を着た町内の頭が五六人で、炭俵の四方八方で火を起し始めて、六尺餘りの竹の先へ溢團扇を括りつけたもので煽ぎ立てるので、六時頃にはモウ火氣四方に起り、夫れを又一倍強むべく煽ぎたてるので、灰は群集の頭上に飛ぶのみか、二間三間と離れて居る者も此大火氣の爲に面を焼かれる計りなのだ。

隨て五名の神官が神前の祈禱を終つて、雨は愈々降増つて來たけれども、群集は更に數を増して火氣は益々昇ると同時に、白裝束をつけた神官等庭に下り立ち、幾回となく神事執行の場所をめぐり、且つ呪文を唱へ終はつた、後にシカモ素足で三間餘りの火の上を悠々渡り去るに、露國公使も舌を捲いて驚かれた、此通譯には迅瀬某が附いて居て、遺憾なき説明をして居た、神官の渡り終ると共に少年の一群が尻端折りてサモ愉快さうに渡つた、中に七八歳のも見えた、赤兒を負ふた十一歳許りのもある、之れが幾組となく渡り續けて行くと、後から男女の老人などを合して數百名陽炎燃ゆる春の草を踏むと少しも異ならぬのだ。

以上に述べた神習教御嶽教會でやる處の火渡の原理如何は余は知らず、前記の余の説明に合するや否やは讀者の研究に俟つ處なり、大日本催眠術協會會員にして實驗的に小規模の火渡をやつて見たが、甘く行きたとて報告したる者あり而し別に耳新らしき事なし故に爰には之を省略す

第十三章 狐 遺 術 (いづなつかひ)

狐を遣ふて人を苦しめ、或は狐を斥候に遣ふて人の秘密を知ると云ふ現象あり、又は狐に化かされて馬糞を牡丹餅と思ふて、甘ひく／＼と喰ふ如き、西と東を取違へて歩む如き現象あり、或は狐に取り附かれて病人となる所謂狐憑等の現象あり、狐憑の中にも又種々あり。

井上博士曰く、狐憑に種々の類あることは先般神醫學博士の哲學會に於てなし、演説にても知ることを得べし。

第一種は自ら狐憑たることを知らずして、他人より觀て狐憑となすものにして、假に之を無意識的狐憑と云ふ。

第二は自ら狐憑たることを知りて、狐憑者と自稱するものにして、假に之を意識的狐憑と名づく。

而して此第二種にも亦様々の類ありて、或は目に狐を見、耳に其聲を聞き、其現象を外界に見聞するものあり、或は又身軀中の一部分に狐の宿るが如く感じて、或は狐

は腹中に住めり、或は胸中に在りと云ひ、又は自己の口部より狐の出入することを、見、或は軀中にて狐の話を發するが如く覺ゆるものあり、此等は内界の狐憑なれども皆單に内界の一部分にして、全部の狐憑にはあらず、之に反して内界全部が狐憑の状態に變じて、自身は某の老狐なり、何處の稻荷なりと唱へ、自己と狐との分別を失ひしものあり、此の如き狐憑病は全く精神病の一種にして、幻覺及び妄覺並に病的精神作用に由りて現するものなり云々。

と狐憑は精神病の一種にして地方により其名を異にす、又狐憑に類似の精神病も含み居るかと思はるゝも、今其異名を一二擧げん、四國地方の犬神術、出雲地方の人狐術、山ミサキ術、數イタチ術、小イタチ術、信濃地方のヲサキ術、廣島地方のトウビヤウ術、或は蛇持術、石見にては土瓶術、岡山にては猫神術、猿神術、狐持術、日御崎術、トウビヤウ術、九州地方にては河太郎術、山梨地方にては管狐術など一々枚擧に違あらず、又地方によりては狐の代りに狸、或は貉に誑されたり憑れたりと傳ふ、從て狸遺術、貉遺術等奇なる言葉が出て來。

古來俗聞に云ふ所のクダ狐てふものあり、之を使ふ祈禱者ありて、拇指の爪の間よ

り人の体内に入り込ませて之を苦しめ、或は之を斥候に出して人の秘密を探らす等愚夫愚婦の信ずる所なり、之につき、靈獸雜記と云ふ書の中に下の如き主意の記事見へたり。

いづなつかひと云ふ是正法にあらず、邪術を以て人眼をかすめ、惑はす術なり、近來日蓮宗の僧狐をつかひて人に狐をつけ置て、さて祈禱をして其狐をはなすを以て奇妙の名を得て渡世したりしが、事あらはれて公より召捕りて流罪に行はれしことあり。

と民間にも往々之に類したることあるを耳にすることあり、彼の妖僧は狐を使ひて某氏の體に附けたり、某はあれ狐が己の腕の内の爰處を歩めりと云ふ、見れば其處膨脹して動けり、動くは即ち狐なりと祈禱者は之を爪の間より體外に驅逐するとして、祈禱すれば果して其膨脹は消へ去り、身體の苦痛去る、故に狐附を信ずるものあり、此現象は事實ならんも、之れは精神現象の一にして、心身相關の原理を以て説明するを得べし、人のよく知る處の催眠術に於て汝の手足は動かぬと云へば、健康體の者も、實際動かざることゝなる、之に反して平常足の動かざるもの、動くやふ

になることあり、即ち術者の云ふ通りになる、今狐に附かれたりと云ふものの、腕の膨脹の消ゆるは全く之れと同一理なり、即ち狐附なるものは精神作用による現象なり。

催眠術の實驗に於て人の能く知る所の現象たる術者催眠者に何ひて、汝は狐なりと云へば、四匄ひとなりてコン／＼と鳴く、汝は狐故に油揚を好むならんと云へば、信に油揚を好むに至る、其他或は猿なりと云へば、猿となり、猫なりと云へば、猫となる、蛇なりと云へば、蛇になる、河太郎なりと云へば、河太郎となり、狐憑に殊有なる現象を悉く暗示によりて起すとを得、此現象は催眠術上人格變換の理論によりて立派に説明するを得、換言すれば人工的に狐憑を造ることを得、催眠術によりて生じた狐憑の現象は暗示によりて又忽然消へ去りて平常の身體精神となる、此作用を利用して自然に出たる狐憑の病者をして、催眠術によりて治することを得、愚民は狐憑は眞に狐が体内に入り込み居るものと妄信し、其れを驅逐せんとして或は祈禱に兼ねて慘酷の手段を用ゆるものあるを聞くこと間々あるも、之れは狐憑病の原因を誤解したる愚人の行ひにして、大に戒むべきなり。

狐は人を化す能力あるか否やに附ては今日の如く學問の發達したる時代に於ては、一笑に附して顧みるものなし、而し實際狐に化かされたりと云ふ現象あるは何故ぞや、其は深く之を究めて見れば、狐が人を化かしたるにあらざして、自ら自分の精神にて斯る現象を起したるなり。心理學上に云ふ錯覺或は幻覺の一種に外ならざるなり。例へば寂漠たる森林にて常に古狐の棲める所を夜深更なぞ一人て通りつゝ、狐に化かされはせぬかと戰々競々たらんか終に精神の全部を其事にのみ奪はれ、道を歩みつゝあることを忘れ、終に横道へ入り込み歩むこと數町にして、今迄通りしことなき所に出て初めて道の迷へるに心付き、之れは狐に化かされたるならんと思ふて方角も分らなくなり、西と思ふて東に向ひて歩む様なことをなす、故に益々分らなくなる、此現象を狐に化かされたりと云ふ、余も暫々此現象に出遇ひしことあり、田舎者が東京に來り、夜中道に迷ふて南と北を取り違へて、急ぎ足して旅舎を尋ねあるく現象と、其原理は同一なり。以て狐に化かされたるに非らずして自分で自ら道に迷へるものなるを知るべきなり。

試に見よ今君の座したる布團は今迄恐るべき疥癬の病人が座し居れり、定めて感

染するならんと云へば、斯く云はれし者は忽ち身軀の所々に、痒みを覺へ、之を搔けば搔くに從て小痘を生し、全く疥癬に感じたると同様の現象を呈するものなり、然し實際疥癬の人座したることなき布團なり、即ち心に確く思ふことは、其通りに身軀變化するものなり、即ち疥癬に感じたる現象は他働的にあらずして、自働的の現象なり、之れは身心相關の原理として著名なる現象なり、而し其理を究むれば、左程珍敷ことにあらざるなり、動物に魅されしと云ふ現象も、又此理に外ならざるべし、よりて動物に魅せられたと云ふ現象は、自分の心で自分が起したるものなることを知べきなり。

「報知新聞」に「津輕伯爵邸の狐」と題して次の文見へたり

「開け行く世の尾花茂りし武藏野の面影失せて人馬織るが如きこゝ東京の市にも樹木の茂り晝を遮る大名屋敷の跡には、今尙狐狸の數多住めるもあるべし、茲に説く本所太平町津輕邸は幽邃閑寂名立る大邸宅とて、今尙三疋の狐巢くひ邸宅の一隅に龜を構へて勸請しあり、畜班を脱したる所謂お稻荷は代々三匹の眷族に限られ、大昔より親が子を育くむや代を其子に譲りて何處ともなく姿を隠す習ひなり

とぞ、然るに同邸の主人英磨君には、嘗て獨逸より歸國の折、嚴めしきカイゼル式の美髯を捻りつ、聖代の御世何とて狐等を崇むるとやある打ち殺して敷物とすべしとの嚴命を下されしにぞ、家夫を初め邸内のも一同主君の御筵を畏こみ居りしが、此の由し聞きし狐にも耳のありしならん、其の夜よりして殿の寢屋の隔ての障子に影は、障子に三匹の姿を現はしては障子襖を揺り鳴らし、時としては山岳鳴動するかの如き物の音させ、殿の熟睡を妨ぐるにぞ、流石の君も理外の理ある老狐が振舞に辟易し、無益の殺生は見合と仰出され却て丁重に崇敬され居り云々、と真面目氣に記されたり、此記事の主眼たる……殿の寢屋の隔ての障子に形は障子に三匹の姿を現はしては、障子襖を揺り鳴らし、時としては山岳鳴動するかの如き物の音させ、殿の熟睡を妨ぐる……とは概ね無根の捏造説ならん、若し果して伯爵に斯る物見へ、斯る音聞へたりとせんか、开は幻覺なるべし、如何てか狐にして斯る作用をなす力やあるべき、之を要するに狐に取附かれたりと云ふ現象即ち狐憑は醫學上は精神病にして心理學上より見れば人格の變換なり、普通の人格が狐と自信する人格に變化したる

なり、狐に化かされたりと云ふ現象は、狐に化かされたるにあらずして、自分で惹起したる精神の異常なり、いづな遣即管狐を人の体内に入り込ませて苦しましめ又は斥候に使ふて人の秘密を探ると云ふは、全く根據のなき無稽の言にして、狐憑病は奇怪の現象を呈する故、無智の愚民は狐をたけられたりと想像し、又所醫者が奇を術はんが爲めに虚言を吐きたるを妄信せしものならん。

第十四章 讀心術

讀心術とは術者が被術者の心中に想ひ居ることを察知する法なり、凡そ何の業たるを問はず、讀心術の必要なることは實に意外なり、人を相手とする業務は此應用の如何によりて成否の分るゝ所なり、例へば商人は御客が店頭に於て、實際品物を買はんが爲めに物品を見たり價を聞くのであるか、或は單にヒヤカシなるかを知らずして、ヒヤカシ客を眞に受け、眞實の客を疎にするが如きことありては、店の衰微となるや明なり、其他醫者にして患者の心讀めざれば、治療は得て望むべからず、辯護士にして訟訴事件の眞相讀めざれば、勝利覺束なし、是によりて人を相手とす

る業務に、多年従事する者は自然に一種の讀心術を悟るものなり、彼の東京市内の辻待の人力車夫を見よ、通行人を見れば此人は今何處へ行く人なるかを知り、車夫乗車を勧めて曰く某所へ御伴致しましょう、と云はれし田舎物は何ふして己が行く先を知り居りたかを驚くことあるも、車夫は只行先を知り居るのみならず、其御客の職業迄も殆んど誤らざる様見抜くものなり、之れば多年の経験によりて自然に其徴候を感得し察知するなり、余も又催眠術治療をして呉れとて來たる者の容貌を一見すれば、此人はヒヤカシなるか、何處が惡ひか等殆んど誤らざる様なれり、併し余も随分初は見誤りしこと多々ありしも、數年の實驗によりて、今日は自分乍ら驚く迄に進歩せり、之れ等の秘訣は口に語ることに筆に記すこと能はざる所の機微なるも、自然に何人にも経験を積むに従て察知し得るものなり、其一例を左に記さん。

一日余の家へ來り催眠術治療をして貰ひ度しとて名刺を出したる者あり、余は其人を一目したるに、之れは眞意を以て催眠術治療を受けに來りたるものにあらずと察知し、躰よく之を斷りたるに、然らば明晩伺はんとて去り、又其明夜來りたり、然

し余は又面會を避けたり、念の爲に名刺に記したる住所氏名に宛葉書を出したるに、果して偽名なるを以て、斯る者はなしと符箋されて戻れり、其符箋を見て東京新報社員の安田憲君は大に驚き、彼の人は眞に病人の如くにて、施術熱望者の如く見へしが、偽名にてありしかと開ひたる口も塞がらざる程なりき、若し誤りて前記の偽名者を眞に受け、施術せんか、勞して効なきのみならず、如何なる大珍事を惹起すやも知れず、以て讀心術の必要なるを知るべきなり、次に普通に行はるゝ讀心術の實驗法を述べん。

此術の方法には數多あり、幅雜なる機械を用ひてするものあるも、爰には單に何等の機械を要せず、何人にも一讀なし得る方法を擧げん、先づ室内の何れにか或る物品を術者に知れざるやふ藏さしめ、術者之を察知せんとするときは、被術者の手を執りて其室内をあちこちと俱に歩行し、然る後何れの部分に藏しあるかを當つるなり。

而して其手を取りて俱に歩行する間は、被術者をして専心一意に其藏したる物に注意するを要す、又室内に種々の物品を陳列し、被術者をして或一物を専ら思はし

め、而して其物品に順次手を觸れしめて、其思ふ所の品を當つる法あり、之れは何故に當るかと云ふに、其精神に思ひ居ることは肉體に思ふ通りの變化を來すと、心身相關の理に依てなり、例へば胸中にある苦悶歡樂は如何に之を顔貌に現はさざらん、と欲するも得ず、今被術者が自ら想ふ事柄に全心を注集し居れば所謂不覺筋動を起し、筋肉外貌上に其状態を示さざらん、と欲するも得べからざるに至る、此理によりて前陳の藏したる物品の處に被術者の手を持ち行けば、其手の筋肉の舉動に一變化を呈するや明なり、故に此變動によりて、其意思を察知するなり、故に注意の集注弱きか又は此術を疑ふときは、其察知すべき心術明かならざることあり、

ビネー氏の「人格變換論」に面白き讀心術が掲げあり即ち左の如し。
 「吾人は往々無意識の裡に運動をする事がある、自分が全く知らぬ間に一定の運動をすることがある、一例を擧ぐれば、昔しから世人の能く知つて居る事實である、が吾人が糸の端へ重みをつけ、他の一端を手で持ちながら水を盛れる、茶碗の如きものゝ中にたれて、じつとして居ると、其垂れたる重みは次第に振動を始め、遂には茶碗の縁に當るに至る、吾人が十の數を考へ居れば、縁へ十遍あたる、五の數を數へ居

れば五遍當るに至る、或は又人に鉛筆を握らしめ、自己の名を思い居れよと命じ置き、然る後其人の鉛筆を握れる手を捕へて、汝の名を書かんと云ひながら、小兒の字を習はすが如く書かず、眞似をして、其實自分に何も書かずに居ると、被試験者自ら其名を署して、其當れるに驚くことあり、逆に試験者が鉛筆を握りて、被試験者に手を握らしむるも同一の結果を得べし、以上二種の試験は何人にも常に良結果を得べからざれども、人によりては百發百中頗る好成绩を得る事がある、是は如何なる理由なるやと云ふに、吾人の思想は凡て外部に運動の形を取りて現はれむとする傾向を有す、思想若し具象的の心像なる時は、殊にそうである、若し其發表を妨ぐる事情が他に無かつたなれば、吾人の内部に起る心的状態は、其の人の意志を離れ、且つ往々無意識的に外部に表はる、故に吾人が若し前の茶碗の中に重みを垂れたる場合に於て、振動し始めると、自分は知らず々々の間に自から其の糸を振動せしめて居る、又字を書く場合に於ても、試験者の言を信じ一心に其の名を思ひ居る故、自から名を書いて知らざるのである、以上二例共に内部に起れる觀念が動神經によりて筋肉を動かして、無意識に運動を爲さしめたので

ある、彼の俗間に行はるゝ狐狗狸と稱する遊戯の如きも、同じ道理で説明する事が出来るのである。

井上博士著「妖怪學講義」にはよく讀心術を説明しあり、余と説を全く同ふす重複の點を顧みず左に之を抄出して示さん。

「古來鬼神術と稱せしものの中には、机轉術、机話術及び催眠術の外に讀心術なるものあり、此讀心術は或は察心術又は讀想術とも名づけ、施術者が被術者の心中に想ふことを察知考察する方法なり、凡そ讀心術に二種あり、其一は施術者が被術者の身軀の一部に接觸して、其心中を察知するものと、一は施術者が全く被術者の軀を離れて察知するもの是なり、先づ第一種の例を擧ぐれば、被術者をして一物を室の一隅に藏さしめ、施術者之を察知する場合には、被術者の手を取りて其室の四隅を俱に歩行し、然る後何れの部分に何物を藏し置けるかを考察するものとす、而して其手を取りて俱に歩行する間は、被術者をして専心一意に、此事を默想せしめんことを要す、或は又被術者の心に想ふ所の人名を察知せんとするときは、先づ被術者をして専心一意に其名を想はしめ、同時に其手を取りて、預め黑板上に題したる伊

呂波の文字を順次に一々探らしめ、以て其想ふ所の人名の頭字は、此文字なることを告げ、遂に全き人名を綴るものとす、斯の如き方法を以てせば、十は十まで察知するを必せずと雖も、其七八は察知せらるべく、最も熟練したる人において、十中九までは正に的中すと云ふ、是れ其方法の大略なるが、忽ち是を聞くときは頗る不可思議なるに似たれども、其實少しく其事情を考察せば、決して不思議にあらざることとを知らん、蓋し施術者が能く被術者の心を察知するは、其身軀の一部分に接觸するに由れり、精神と身軀とは密接の關係を有し、精神上の變動は必ず身軀上に現出するものにして、抑へんとするも抑ふることも能はず、是の故に吾人もし他人の身軀に接觸して、其筋肉間に呈露する變動を知覺し得るに至らば、何ぞ心内の變動をも察知せざる理あらんや、但し夫れ吾人の感覺は、未だ微細の變動を識覺する力を有せざるを以て、普通の人には察知すること能はざるのみ、若し生來感覺の鋭敏なるもの、又は經驗によりて熟練せし人は、普通人の能くせざることをも察知せらるべきなり、殊に施術者が自ら想ふ事柄に、全心を注ぐときは、所謂不覺筋動を起し、筋肉外貌上に其状態を示さざらんとするも得べからざるに至るをや、例へば施術者が

其手を取りて、黑板上の伊呂波文字に觸るゝときに、若し被術者の一意に想ふ所の文字の點に至らんか、必ず其思想上に變動を起し、隨て其筋肉舉動の上に變化を呈するや明かなり、故に此變動によりて其心内を察知すること、何ぞ奇怪とするに足らん、されば若し被術者にして、其一點に注意すること弱きか、或は此術を疑ふが如き場合には、此方法を以て、其心狀を察知すること能はざるなり、是に由て之を觀るに、古代は此察心の理を以て、エーテル若くは電氣の媒介に歸せしも、今日は心理學及び生理學の道理によりて説明せらるゝこと明なり、然るに第二種の讀心術に至りては、他人に接觸せずして察知するものなれば、到底學術の道理を以て説明すべからざるが如し、されども若し人の外貌を以て、其心内を察知する所の所謂人相術あることを一考せば、必ずしも觸覺に由らずして他の感覺を用ふるも、其目的を達せらるべきこと知るべし、蓋し人相術の如きも、矢はり讀心術の一種にして、而かも其第二種に屬するものと謂ふべし、況や視覺或は聽覺によりて、克く人の思想を察するは、必ずしも人相家を待たず、世間に往々見る所にして、吾人も平常幾分か之を實行せるをや、若し夫れ到底吾人の感覺力の知り得べからざることを察知したる

が如きは是れ偶然の暗合より起ることなれば、宜しく純正哲學部門の偶合篇を參見して其理を知るべし、之を要するに讀心術は神力魔力の至す所にあらず、又電氣「エーテル」の作用にもあらずして、心理生理の學理に由りて説明せらるべきなり」と以上は井上博士の高説にして、余の大に敬服する所なり。

第十五章 骨相術 (フレンジー)

文學博士井上圓了先生曰く、今日世間に傳ふる所の相法は甚しく妄誕不稽の部分を混入すると雖も、人相其の物に至ては心身相關の理に基き、必ず其道理を存するものなり、是を以て古來英雄豪傑聖人君子には各々一種の相あり、之に反して強盜大賊惡徒には又一種の相あり、決して欺き難し、人相早學第一篇の序に曰く、

それ堯の眉は八采を分ち、舜の目には重瞳あり、大禹の耳には三漏あり、成湯の臂には四肘あり、文王は龍顔にして虎の眉、漢高は斗胸にして隆準なり、周公の反握は典周の相なり、重耳の駢脅は霸晋の象なり、常人の相貌古聖の英姿に比すべからずと雖も、不凡の相に奇形異骨あるときは、常人にも其分に隨ひ、貴賤吉凶の相

あることを知るべしと。

斯く特殊の相ある外、貴人には貴人一般に通ずる相あり、聖人には聖人一般に亘れる相あり、盜賊惡徒みな各々一般普通の相あり、此相によりて人を判ずるときは、大抵其實を失はざるものなり」と真に然り人相の中に手相術、面相術、爪相術、骨相術等種々あるも皆同一理を以て推すことを得と信ず、余は曾て東京新報に秘密看破術と題して論じたる中に次の文あり。

「一般に廣く耳孔より前額に至る距離大なるもの、即ち腦の前頭部の發育著大なるものは豊富なる智能を有し、其の上額の特に秀でたるは理論的、下額の特に凸出したるは物質的、即ち事物の觀察、形狀、大小、重さ、色彩等物性に關して詳細なる智能を有し、又頭の横幅廣く特に耳の圍りの腦髓部分のみ大に發育したるものは破壊、秘密、理財、食慾、敵愾心に富み、又頭腦頂部の前後左右共能く發育し、從ひて頭全體が上に高く且つ開けるものは、徳義心盛んにして、又特に腦頂後部の中通りが聳えて高きものは、決斷自信等の能力の大いに發達せるものと見るべく、又耳より後の部の大いに發育したるは社交心に富める證なり。

右は頭腦の發育と之れに伴ふ性質の概略なるが、育兒又は感化院に於いて特異の頭形の見あれば其の言動に注意し、他兒童の性質と比較し、前記所載のことゝ符合するや否やを見るべし、又反對に平常の性質粗暴氣儘にして、徳義心の缺けたる兒が如何に耳の圍りの腦髓部分のみ發育し、合せて腦頂後部の中通りのみ尖りて高きかを見るべし、又平常の性質良好なる兒にして、頭形が高くして上に開き居るやを見るべし。

人には天性なるものありて後に如何ともし難きものあり、見よ字をよく書くものは左程習はずしてよく書く、然るに下手な手筋の者は如何程習ふて苦心するも書けず、之れは獨り字のみにあらず百般の業皆然り、故に職業は其人の天性に合せる者を撰ばざるべからず、職業にして天性に合せば勞せずして効多きを見るべければなり。

學者たるべきものは、一面に高き額と細高き頭を要し、工業者たるべきものは一面に廣く高き額と、横幅廣き頭を要し、商業者たるべきものは通例の頭形と愛嬌ありて強硬ならざること、を要し、力役者たるべきものは、身體強健なるに於ては、額狭く

頭低き下等なる腦發達のものにても宜し、而して政治家或ひは軍人たるべきものは學者工業者を折衷せし形を要し、政治家は寧ろ前者に近く軍人は寧ろ後者に近きを宜しとす、又所謂實業家及び事實家たるべきものは、工業者、商業者を折衷せし形を要し、雜工雜商たるべきものは工業者、商業者と力役者とを折衷せし形にて宜しきなり、尙ほ讀者はこれ等頭形を現今各種成功者の頭形と對比せば、面白き結果を發見することを得べきなり。

吾れ吾れはよく此骨相に鑑みて、各自の特性に適合したる職業を選び、以て鍛に木登りを望み、豚に水泳を強ふるに似たる見當違ひの無駄骨折を避け、而して各自の最大成功を得べきなり、次ぎに骨相心理的矯正の方法を一言せんに、之れは先づ腦髓なるものは一箇渾沌たるものにあらずして、其の部分に依りて分業的に働くものなりと云ふ實地經驗より得たる主張に基き、第一に其の兒童の骨相的發達即ち頭蓋各部分の發達大小を視察し、此の助けに依りて其の心理的傾向を明瞭に洞察し、其の抑制を要する腦力に對しては、平常夫れに關する考へを引き起す虞ある事物に遠ざからしめ、以て其の能力を用ゐずして捨て置くことに依りて、其働きを微

弱ならしめ、又啓發を要する腦力に對しては、平常夫れに關する事物を以て、其の腦力を刺撃し、以て其の能力の特別練習に依りて、夫れを發達せしむるにて、此の方法は兒童時代には父母又は教師たる人之れを行ひ、青年時代には自省的に之れを行はしめ、數年に涉りて其の成功を期するにあり、(工學士市川紀元二氏説抄出)

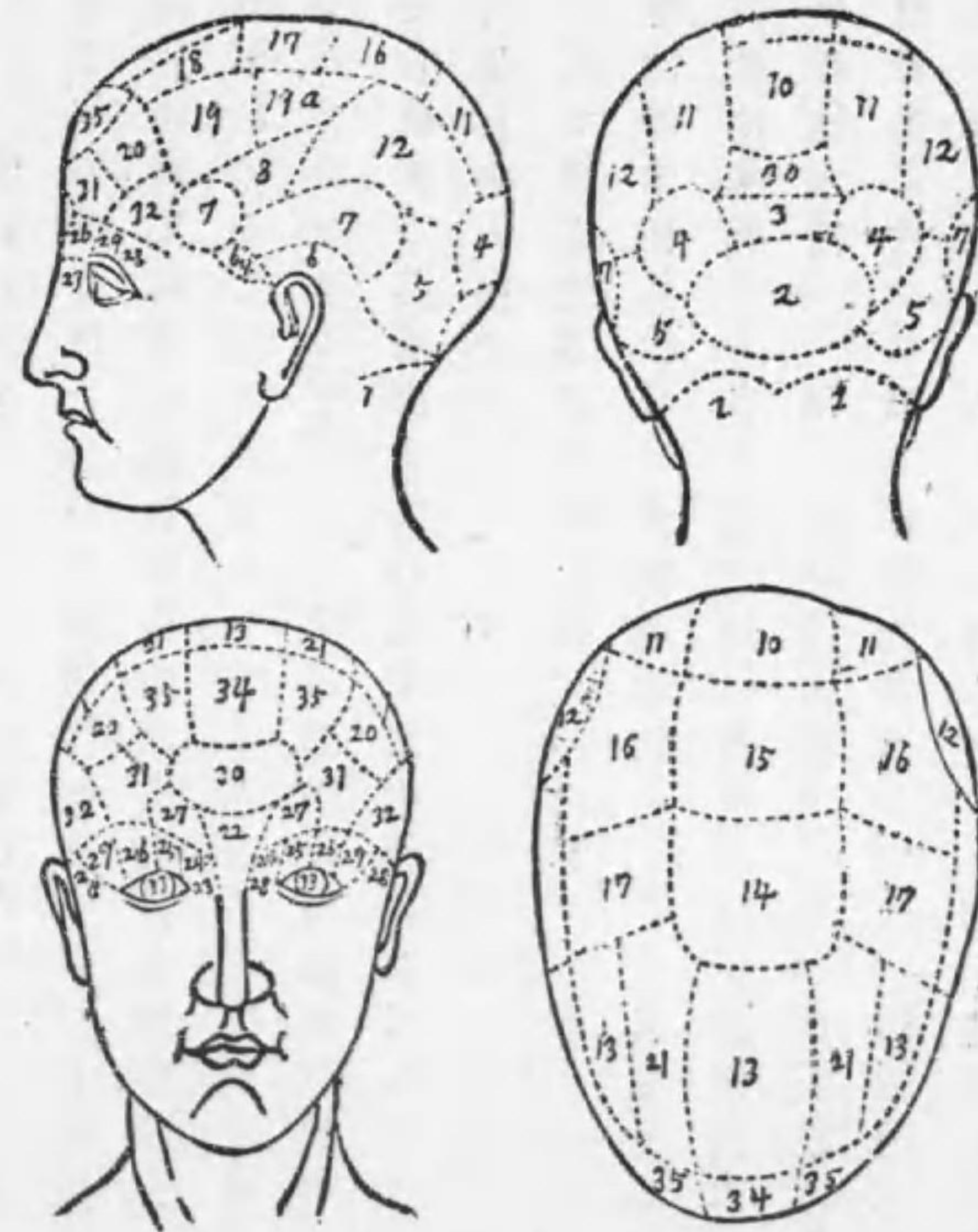
「教育公報」三百十五號以下に連載せる工學士高橋邦三氏の「腦皮質局部作用」は最もよく論ぜられあり、高橋學士は「心性學館々長にして心性學の眞髓とも云ふべきものなり、其要を次に紹介せん。

「斯學に於て認定せる原始的機能左の如し。

- | | | | | | | | |
|----|-------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 1 | 兩性的本性 | 2 | 愛兒的本性 | 3 | 居住的本性 | 3a | 持續的本性 |
| 4 | 友愛的本性 | 5 | 抵抗的本性 | 6 | 破壊的本性 | 6a | 飲食的本性 |
| 7 | 生存的本性 | 7a | 秘密的本性 | 8 | 財產的本性 | 9 | 作造的本性 |
| 10 | 自尊的本性 | 11 | 好譽的本性 | 12 | 警戒的本性 | 13 | 慈惠的本性 |
| 14 | 尊崇的本性 | 15 | 堅固的本性 | 16 | 正義的本性 | 17 | 期望的本性 |

左に略圖を掲げて、各中樞の位置を示し併せて各機能に對する略解を擧ぐ、

圖 四 第



- | | | | | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|----|----|
| 03 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19a | 19 | 18 |
| 事 | 順 | 數 | 位 | 色 | 輕 | 大 | 形 | 物 | 摸 | 機 | 好 | 好 | 靈 |
| 實 | 序 | 量 | 置 | 彩 | 重 | 小 | 狀 | 軀 | 擬 | 轉 | 大 | 美 | 妙 |
| 知 | 知 | 知 | 知 | 知 | 知 | 知 | 知 | 知 | 本 | 本 | 本 | 本 | 本 |
| 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 | 性 |

31 時間知性
 32 音調知性
 33 言語知性
 34 比較知性
 35 推因知性

兩性的本性、男女相愛するの性なり其の中樞小腦に在り高度の發達或は興奮は花風病を來す

愛兒的本性、中樞は後頭葉の下に在り後頭突起部に方る子好きの人は自ら探りて此部大なるを知るべし、過度なるは愛に溺れて子を書ふ、故福澤翁黒田伯等に於て此中樞大なり。

居住的本性、住所を愛し之に永住せんとするの性なり感郷愛國の情は主として之より起る中樞は後頭葉に在り愛兒中樞の上部に位す。

持續的本性、感情思想等を永續するの性なり、中樞は後頭葉に在り居住中樞の上部に位す。

友愛的本性、人に親み友を愛するの性なり、又慣用せる物を愛して之に離るゝを厭ふの傾向あり、中樞は後頭葉に在りて居住中樞の兩側に位す、此部及居住愛兒等諸中樞過度なるときは愛郷病を發するに至る、大隈伯故黒田伯後藤伯福澤翁等に

於て此中樞大なり。

抵抗的本性、他に反抗し敵を防禦するの性なり、中樞は顛顛葉に在り乳壯突起の上方に位す樺山、乃木等諸大將に於て大なり。

破壊的本性、物を破壊或は傷害するの性なる忿怒は之より來る、中樞は顛顛葉に在りて耳孔の上部に位す、肉食獸類殺人犯等に於て此部大なり、適度の働きは事物を進行するに必要にして高度の興奮は噪暴狂を來す、村田男に於て此機能大なり、男は刀を試みん爲め生豚を胴切にすること屢々なり、又出獵に際し獲物の落下するを見るは實に愉快なりと語られしことあり。

飲食的本性、慈食を採らんと欲するの性なり、中樞は顛顛葉に在りて顛顛窩内に位す耳孔の前部に方る。

生存的本性、生命を愛し死を厭ふの性にして、衛生長壽の要素なり、大隈伯鶴彦翁故ビスマーク、グラットストーン等に於て大なり、中樞は顛顛葉に在りて破壊中樞より内方下部に方る。

祕密的本性、思想感情身體等を隠さんと欲するの性なり、中樞は顛顛葉に在りて

顛頂骨の下縁に添ふて破壊中樞の上部に位す、窃盜犯に於て此部及財産中樞大なるを例とす、匿狂伴狂等の大因なり、故陸奥伯福澤翁矢野翁等に於て此中樞大なりざりき。

財産的本性、財産を獲得し又之を増殖貯蓄せんと欲するの性なり、中樞は前頭上向廻轉の下部に在りて顛頂骨の前下角に方る、此部大なる者は自ら探りて知るを得べし、過度の興奮窃盜狂を來す、陸奥伯福澤翁矢野翁等に於て此部小なりき。

作造的本性、物を作造せんと欲するの性にして手藝に巧妙を致する要素なり、中樞は前頭第三廻轉の上部に在り、財産中樞の前部に方る村田(經芳)男佐藤(進)博士等に於て著大なり、又河野、小山(吉郎)佐分利工學士等に於て大なり。

自尊的本性、自己を尊重し自ら信ずるの性なり、過度なるは傲慢横着の原となる、中樞は上顛頂廻轉の上部に位し、持續中樞に接し其上方に位す反身に歩む人々に於て大なり、故福澤翁小幡翁等に於て本中樞小なりき、福澤翁の獨立自尊主義は反省より來れるものと知るべし。

好譽的本性、人の稱賛好評を得んと欲するの性なり、他機能との結合宜きを得ば

高尚なる名譽心となる、伊藤公大隈伯桂侯等に於て大なり、結合否なれば虚榮心となる、本機能は正義警戒等と相待て破廉恥の行爲を抑制す、上記諸氏並杉田定一尾崎行雄島田三郎田口卯吉辻新次森村市左衛門等諸氏に於て此結合を見る、中樞は上顛頂廻轉の側部に在りて自尊中樞の兩側に位す。

警戒的本性、恐怖を生じ警戒するの性なり、此機能幼時より大に顯はる、中樞は顛頂葉上縁角狀廻轉に在り、顛頂突起部に方る憶病の人は此部突出す、婦人に於て大なる者多く過大なるは憂鬱病を來し小なるは輕卒に走り易し、本機能相當の發達は處世上最も大切なり、

慈悲的本性、博く愛するの性にして慈悲仁惠の素因なり、中樞は第一前頭廻轉の上部に在り、前頭百會より少しく前方に位す、西郷南洲東郷大將等に於て此部及尊崇中樞大なり、本機能小なる輩は人の困難を見て意に介せず、凡て前頭の高く聳ゆる人は本中樞大なり

尊崇的本性、神を尊み人を敬するの性にして宗教心の素因なり、中樞は前頭向上廻轉の頂部に位し前頭百會の前後に亘る、故原且山鳥尾得庵山岡鐵舟丸山作樂福

澤翁小幡翁陸奥伯等諸氏並青木子小村男清浦男等に於て本中樞大なり、本機能小なるときは野鄙無禮を來す。

堅固的本性、堅固不動の性にして忍耐の要素頑固の素因なり、中樞顛頂向上廻轉の最上部に在り、鳥尾山岡海江田青木等の諸子爵並辻森村高島吞象等諸氏に於て著大なり、此器小なれば心動き易し。

正義的本性、正義公平を尙ぶの性にして湊川公赤穂義士佐倉宗五郎等の行動に顯れたる性と知るべし、中樞は顛頂向上廻轉上等に在り堅固の兩側好譽警戒の等に位す、東郷大將乃木大將廣瀬中佐杉田尾崎島田森村辻氏等に於て大なり。

期望的本性、希望を未來に屬し事物を期待するの性なり、中樞は前頭向上廻轉の側部に在り、冠處縫合の後方即ち尊崇中樞の兩側に方る、故鳥尾山岡福澤等諸士に於て大なり。

靈妙的本性、靈妙不可思議の事を好み神秘を感ずるの性なり、尊崇期望と結合して宗教心を現す、此三者高度に興奮するときは宗本性偏執狂を來す、中樞は第二前頭廻轉最上部内半を占め、期望中樞の前方に位し摸擬中樞の外側に在り、鳥尾得庵

山岡鐵舟高島吞象丸山作樂等諸氏に於て著大なり。

好美的本性、美を好むの性にして詩的感情の大原素なり、又他機能を誘發して事物の改善を計るに至る、中樞は第二前頭廻轉の最上部外半を占め、靈妙中樞の外側に位す、春嶺侯早稻田伯歌子女史鶴彦翁愕堂等諸氏に於て大にしてアイヌ南洋人等に於て小也。

好大的本性、高大宏壯を尙ぶの性にして好美と共に詩想の素因なり、中樞は顛頂向上廻轉の上部に位す、得庵鐵舟吞象森村氏等に於て大なり。

機轉的本性、機轉を司るの性にして機智諸識滑稽等の大素因なり、中樞は第二前頭廻轉の中央上部にあり、推因中樞の外側に方る大久保彦左衛門大岡越前守等の言行に顯はれたる性なりと知るべし、故西郷侯丸山作樂氏又桂侯松方幸次郎原田貞之助得能通要等諸氏に於て大なり。

摸擬的本性、顔容姿勢舉動等を摸擬するの性なり、中樞は第一前頭廻轉上部の外半を占めて慈惠中樞の兩側に在り、市川尾上兩俳優に於て此部著大なり。

物體知性、總じて物體を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉の下部内半

に在り、
形状知性、物の形状を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉の下部内半に在り。

大小知性、物の大小距離を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉下部に在りて形状中部の外側に方る、村田男佐藤進高木兩醫學博士松尾工學博士河野小山(吉郎)佐分利三工學士に於て形状大小輕重共に大なり。

輕重知性、物の輕重を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉下部に在り大、小中樞の外側に方る。

色彩知性、物の色を認識記憶するの性なり、中樞は第二前頭廻轉の下部内半に在りて輕重中部の外側に方る、鶴彦翁歌子女史等に於て大なり、此部欠損するときは色盲を來す。

位置知性、物の位置即ち場所を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉の下部外側に在りて輕重中樞の上方に位す旅行好きの人に於て大なり、村田男石墨男坪谷氏等に於て著し。

性數量性、物の數を認識記憶するの性なり、中樞は第三前頭廻轉の下に在りて順序中樞の外側に在る、大隈伯肝付少將鶴彦翁等に於て大なり、順序知性、物の順序を認識記憶するの性なり、第二前頭廻轉部下外半に在りて色彩中樞の外側に在り、

事實知性、總じて事物出來事等を認識記憶するの性にして、中部は第一前頭廻轉に在り、額部の中央に在り、物體中樞の上方に在り、井上哲次郎博士、下田女史等に於て著大なり、

時間知性、時間を認識記憶するの性なり、中樞は第二前頭廻轉中樞に在りて、事物中樞の外側に在り、時間の約を守る者に於て本中樞及正義中樞共に大なり、

音調知性、音調を認識記憶するの性にして、中樞は第三前頭廻轉中央外部に在り、時間と共に音調の要素なり、西幸吉鶴彦翁、横山孫一郎に於て敏なり、

言語知性、言語を認識記憶するの性なり、第三前頭廻轉後下部に在り、レール島の上部に在り、シルヴェユス裂の前方に在り、眼窠を壓し横狀に在り、島田、尾崎、高梨、市川團州等諸氏に於て大なり、此等疾患あれば失語症を來す、

比較知性、事物を比較し異同を認識記憶するの性なり、中樞は第一前頭廻轉中央部に在りて、事實中樞の上部に在り、故福澤翁に於て著大なり、其比喻に巧妙なりしを見て知るべし、

推因知性、事物の原因結果の關係を認識記憶するの性にして、中樞は第一前頭廻轉の中央側外に在り、即ち比較中樞の外側に在り、前頭突起部に在り、比較と相待て推理反省作用を呈す、菊地、井上、富井、北里、青山、三浦、吳、下瀬、眞野其他諸博士に於て本中樞比較中樞共に大なり、各推理に妙なるを以て知るべし、

因に曰頭の全部殆んど圓滿の發達を呈して、資質宜しきを得、其行動世に顯はれたる者の二三を擧ぐれば、伊藤公大隈伯井上伯桂侯渡邊國武子、澁澤男等とし、故人にありては岩倉、木戸、大久保の諸公、勝伯兒玉大將等とす、

上記諸中樞は素より上述の順序に於て發見せられたるにあらずと雖も、列記し來れば不思議にも同種の諸機能中樞各腦の一方面に群集し居るを認め、即ち後頭部には種族の繼續に必要な諸機能あり、顛頂部及前頭上部には宗教德義事物改善等に關する人類固有の諸機能あり、又前頭下部中央部には認識推理等知識に關す

る諸機能ありと。

人相或は骨相なるものも、心身相關の理によりて或程度までは變化するものなり、惡事のみ働き居るときは惡人の相あるものなり、然し多年惡事をなし恐ろしき惡人の相となれる者も後、行を改め善を積まば、善人の相と變化するものなり、見よ飛ぶ鳥も落す様な勢ひの人の愉快氣な福相の顔を、然るに其人一朝破産して妻子を養ふに困ると云ふ憐れの境遇となりしときの顔を前日の顔に比較すれば全く別人の如き貧相と代はれることは往々世にあることなり、吾人は此理に基きて己の欠點を矯めつゝ天性の特質をして益々發揮せしむべきなり。

第十六章 忍術

忍術は一名隱身術と云ひ、我身體は他人の目前に於て働きながら、他人の目に觸れざるやうにする秘術なり、昔徳川時代に於て忍術士箱根の番所を通るとき、門鑑を所持せざりし故、忍術を以て通りしとか、由井正雪は此術を以て、或る城中に忍び入り、殿中の模様を探れりとか、云ふて人の奇とする所なり、之れ又大に潤色ありて、其

風説は悉く信を措くに足らざるも、少しも根も葉もなきことにあらざるべし、巧に催眠術を應用すれば、此現象を現はすことを得べし、催眠術によれば目前に有るものを見へぬ様にするを得、又目前に何物もなきに思ふ儘のものを現はし見せしむることを得、之れ即ち催眠術上幻覺の實驗にて、斯學を研究したる者の目には、敢て珍ら敷事にあらず、去り乍ら之れは深き催眠者に對してのみ行はるゝことにて、覺醒状態にある者に對しては行はれざるを本則とす、然れども催眠感性の高き者に對して巧に催眠を應用する者は、覺醒状態即ち普通の状態にある者に對しても、催眠者同様に暗示を感應せしめ、身體を見へぬ様になすことも絶對的不能にあらざるなり。

或人余を訪ふて曰く、忍術療法を行ふ者ありと、よりて余曰く、其療法は如何なることをなすや、或人答へて曰く、患者の手を術者の掌上に載せ、患者に閉目せしめ、勉めて無念無想とならしめ、而して術者は靜かに、其掌を除くも患者の手は其儘となり居る、此時患者は前に術者の居る事、此世の有ることを全く忘るゝ状態となる、其時術者は患部を擦りてやるなり、暫時にして術者は、患者の手を握りて、元の位置とな

るなり云々、余曰く其れでは、催眠術療法と殆んど異なる所を見ずとて、笑ひたることありき。

第十七章 仙術

古今百物語評判書に曰く、ある人間て曰ふ、仙術には天仙地仙の別ありて、千萬年の壽を保ち、空をかけり地をくぐり、千里を目前にちよめ、小石を大山になし、さまざまの奇妙あり云々、又「仙術と忍術」と云う書にも、世に仙術と云ふことがある、これは除程奇妙なる術で、例へば酒をふきて火を救ひ、雪を削りて鉛となす、或は白石を化して羊となし、或は尺地の術と稱へて地脈を縮めて千里の遠きを尺地となす、など其奇怪なることはどうしても、普通一般の理法を以て解することの出来ぬ一種の法である、と此種の記事諸書に見へたり、之れ皆小説的の記事にして、信を置くに足るものなし、而し諸書により考察するに仙人と云ふは、人慾を去り世俗を遠ざかりたる者を形容したるものならん、今日の世に於て青年等か仙人を學ぶは、余り望まじきことにあらず、然れども其中のよき所たる不正の慾を去るとの點を取らば、又大

に可ならん、其修業法なるものは所謂催眠術上の自己暗示を以て尤も近道とす、井上博士の「妖怪學講義」に曰く、

「今より十餘年前大阪に河野久と名づくる人あり、毎日吸氣法を行ひて食事に代へ、數日間斷食するも更に飢うることなく、以て自ら仙術を得たりと唱へしことあり、されども是れ亦一種の鍊藥の如きものを時々食して常食を廢したるもの、み、其他昨年頃伊豆國に鈴木範衛と名くるものあり、同じく斷食して生存し得べき一種の仙術を發見したりと稱せしが、皆目的を達すること能はざりき、斯の如きは猶ほ人をして不死ならしむる法と等しく、一の妄想に過ぎざるなり、されども長壽法に至りては決して斯の如きものにあらず、若し能く今日の衛生法に注意せば、其目的を達するを得べし、而して此衛生法は單に衣食住の上に止まらず、又精神上の衛生をも要することを知らざるべからず、之に就き雲萍雜誌に左の如き談話あり、

夢窓國師の書れたるものに、人は長生せんとおもはゞ嘘をいふべからず、嘘は心をつかひて少しのことにも心氣を勞せり、人は心氣だに勞せされば命長きことうたがふべからずとあり、鐵拐仙人の贊に、

仙人は不養生せず腹立てず物ほしからずそれでなが生きとあり

博文館発行の『少年世界』に面白き仙人の記事ありたり即ち次の如し。

「仙人に就いてのお話は支那及び本邦にも古來澤山あります之亦一種の架空談に過ぎないのでありますが中には頗る趣味に富んだ傳説があるので彼の陽勝仙人の傳に就いて見ますと陽勝の姓は紀氏とて能州の人でありました陽勝の母は日を吞むと云ふ不思議の夢を見て陽勝を娠んだので生れて十一才の時に叡山の空日と云ふ僧侶の弟子になりましたが性質極めて剛口で一度學んだ事は決して忘れませんでした。

其の上非常に慈悲深い人で裸で寒さうな者を見ると自分の衣服を脱いでやり飢へて居る者に遇へば自分が食はないで食物を與へて居りましたが此の人が仙術を習ふに就て先づ初めは穀物類の代りに蔬菜を食べそれより蔬菜を止めて木實を食とし次第に食慾を斷つて日に一粒の粟を食べるばかりでしたが後には遂に全く人間界の食物を採らなくなりました。

或る時自分の今迄着けて居た處の袈裟を松の枝に掛けて其の傍に延命に與ふと書いて置きましたか延命と云ふ僧侶が後て之を見付けて大層悲しがりオイ／＼泣き乍ら深山幽谷の間を尋ねて歩きましたか陽勝の姿はどうしても見付かりませんでしたかこゝに此の陽勝には年考ひたる父がありましたが或る時重病にかゝつて歎いて云ふには己にも子は大勢あるが可愛いと思ふのは只一人の陽勝のみだ彼は何處に居るか知らん人の噂を聞くと仙人になつたと云ふことだがそれが本當なら神通力で以て己の心の程も知つて居るだらうが一度位は己を見舞に來さうなものだと云ひました。

すると陽勝は早速この事を聞き付けて飛んで父の家の屋根の上に来て頻に御經を読み始めました父は其の聲を耳にしてあの御經の聲は誰だらう何となく陽勝に似て居るやうだがと云ひますので家の者が急いで外へ出て屋根を見ましたか成る程御經の聲は明かに夫れと聞き知られるが人の影らしい物は見えませんでした。

時に又陽勝の聲で御父さん！私は貴方の家を離れて仙人に成りましたが併しま

だ御養育の御恩を返しませんから、之より時々來て御經を讀まうと思ひます、就ては毎月十八日に香を焼き華を散らして下さい、私はその香の煙を目的にして屹度参り、こゝで御經を讀みませうと云つて、其のまゝ何處ともなく失せて仕舞つたと云ふこととて、之等の傳説は慥かに僧侶の手に依つて捏造された虚説であります、と昔日は斯の如き捏造説を信じたるも、日進の學理を究めたる讀者諸子には一笑の價值だもなし、只斯の如き事を古人は仙人と呼びしものかとの参考に外ならず、又同書に天人の記事あり曰く、天人と云ふ者も古來本邦の口碑傳説に澤山残つて居りますが、此の天人の姿を見ると、極めて高尚な女が、羽衣を着て空中を翔り、音樂を奏したり、舞を舞つたりするのです。

一 躰天人と云ふ言葉は、之も經文の中から出たもので、此世界には人間の上に更に天上界と云ふ世界があつて、其處に住んで居る者が、即ち天人だとしてあります併しながら天上界の有様は誰も見た者がありませんで、只想像的に出來上つたものに過ぎないのです、三保の松原の羽衣の話や、彼の有名な竹取物語にあるかくや姫など、云ふ天人も、多くは時の小説家が經文にある事柄を基として、巧みに之を

潤色したのに過ぎないのであります、と信に然り然りなり。

都新聞に、仙術の研究者と題せる頃中に次の如き記事ありたり。

「……………曰く無病、即ち長生、人の死は病魔と此の人生の大敵なる病魔を降伏せしむるの方法は古き支那の仙術にては練丹なり、練丹とは如何なるものなるやと尋ぬるに吾が丹田に氣を練り込むことなり、丹田とは一名を石門といひ、臍の下二寸のところ、在り、此の裡に氣を練り込み、其の氣の熟する時は決して病魔に侵さるゝことなし、畢竟病に侵さるといふ事は吾が心に邪念のあるが爲め、其の乘入らるゝところとなるにて、此の練丹は禪宗にて座禪して定印をなし、一切の邪念雜念を拂ひ、無念無想と同じ道理と覺りたれば、旋て南隱禪師の白山道場に赴きて參禪し、仙術に加味するに禪法を以てして、日毎にこの練丹の法を行ひたれば、他人より餘命幾くもなしと言はれたる病羸の氏なりしも、是れより次第に精力を回復して次第に壯健になり來れり。

斯くて氏は種々なる方術を研究したる末、更に天明年間長崎加年翁の創めたる感通醫術といへる大動脈に因つて全身血脈の循環を完全ならしむることを、其の中

興の祖青木俊英氏に就て學び得たり、こは臍より左に指一節を距てたる大動脈の通ずる箇所を右手の掌又は三本の指にて壓へる方法にて慙くすること一時間以上なる時は、鬱結せる血潮は滾々として循環を初め、頭の頂邊より足の指先きに至るまで温氣春のごとく流通すといふ、左れば此の方法を數々講ずる時は決して悪血滯停することなければ、胸開け邪念去り無病長壽す、長崎加年翁は素より二世加年氏も鈴木も天壽を全ふし得たり、この法は熟練なる人に因つて行い貫ふを善しとすといへり、氏は又た瀧澤正明翁即ち正白齋明久といへる人について、天保年間横山丸三といふ人より出でたる天源養氣術といふを學べりとぞ、更に又耳の根に力を入れ其の力を全身に及ぼす法、即ち原坦山師が楞嚴經より研究し得たる耳根圓通術をも研究して筋肉を發達せしむる方法をも講じつゝあり、原坦山師が惑病同源論を唱へ、病氣と迷ひとは同じものにて惑ある人即ち病氣ありと説けるは眞理にて總ての邪念を去れば無病にて長生するを得とぞ、左れば無病長生は精神の快活を第一とす、病弱の人の轉地療養するも運動を勉むるも、皆な此の精神の快活を求むるなり、要するに他方に依りて血の循環を計るものなり云々……

仙術療法と稱するものあり、其要旨に曰く、人は慾の塊まりなり、精神上或は肉體上の慾を望んで止まざる者なり、現に病氣の中でも胃病の如きは、食物を慎みさへすれば必ず治する者なり、然るに悪いと知りつゝ喰ふて病氣を重らすなり、又房事は此病には悪い、必ず悪い結果が歴然たりと知りつゝ、終に其弊に陥る者あり、又不正の金を貪ると良心の咎めを受くることを知りつゝ、終に心を苦しむる種子を蒔く者あり、之によりて之を見れば人は慾心をさい去れば、身心をして安樂に居らしむることを得、仙術療法は此理に基きたる者にて、總て不正の慾を去るなり、良心にやましきことをせざる者は、精神玲瓏として愉快活潑なることは、已に一般の認むる所にして、余の喋々を俟ざる所なり、既に西洋にては此理に基きて斷食療法或は待餓療法なるものを主張する學者あり、以下少しく之を述べん、病人中營養不良に基くもの稀れにあらんも、多くは營養物を多く用い過ぎたるより起て病氣少なしとせず、殊に腹部張りて苦しき者の如きは、食物を一二回廢すると忽ち治するものなり、一二回の食を廢する實に金の入らぬ造作もなきことの如くなるも、實行は頗る困難のものにて、非常の忍耐を以てせざればならず、況んや數

口或は數十日の断食に於てをやなり、之に反して待餓療法は簡易にして何人にて
も直に行ふを得、其要は次の如し、(一)全く中餉を廢する事、(二)自然に餓餓の起るまで
は決して食はざる事なり、唯之れ丈のことにて至て簡易なり、断食療法は數日又は
拾數日全く食を断つなり、食を断ち居ると初め一二日の中は餓餓と倦怠と疲勞を
覺ゆるも、何等の苦痛なく、三日乃至五日も經ると、次第に爽快を感じて、病は消へ失
すものなり、斯く數日断食することは働く者は絶対に不可なり、而し待餓療法即ち
餓餓を覺ゆるまで喰はずに居る法は、何人にてても應用するを得、餓餓を覺へて食す
るにも飲食物は常に控へて飽食せざるを可とす、之れ實に健康長壽の法として、鶴
の例を見ても明なるにあらずや。

第十八章 幻術

古今百物語評判と云ふ古書に曰く、幻術は魔法とひとつにて、色々の不思議をなし、
劍をのみ火をつかみ、身を自由にかくしなどするよし承り候云々、又、無病長生法、と
云ふ書に次の意味の記事あり曰く、能く幻術を行ひ、凡そ事の過去たり現在たり未

來たり又數千里の外たるを論ぜず居ながらにして能く知る、術者の思う通りに被
術者の感覺を刺戟す、例へば術者が猫を想像すれば猫來りと云ひ、鼠、兎、狗、雞、雀、等術
者が胸中に畫く所のもの一として、被術者の眼に映じ來らざるなし、人形と被術者
と人格を轉換し被術者と人形は室を異にし置き見へざる所にて、人形の髪を引け
ば、被術者痛しと云ひて頭を抱へ、被術者の手を摘むも被術者何等の感覺なし、被術
者は雜誌を硝子の如く透明に見、雜誌を隔て、種々の形を當てたり、等の試験を掲
げり、其試験の次第をよく熟讀するに、幻術と稱するもの果して右の如きものなら
ば、之れ催眠術の現象にして他にあらず、只書籍の中に記せしことは少しく潤色あ
るに過ぎざるのみ、決して無根のことにあらざるべし、催眠術を以てすれば何人と
雖も今日は之等の現象をば呈せしむるを得、又科學上立派に説明し得る所の現象
なればなり。

前に引用したる中……劍をのみ火をつかみ、身を自由にかくしなどするよし承
り……は之れは無根のこと、或は針小棒大の記事と信ず、手品か幻覺なればいざ
知らず、實際に斯の如きことは今日の學說にては概ね否定せざるを得ず、然れども

次に引用したる、無病長生法の記す處は東京の新聞記者も立會て實見したる處なりと云ふを以て事實ならん、又事實出來得ることにて催眠術を研究したる者の目には決して珍らしからず何者其中の過去現在未來の事、又は居ながら遠方のことを知るは、催眠術上天眼通の現象なればなり、術者の思ふ通りに被術者感覺することとは催眠術上思想移轉と云ふ現象なり、雜誌を硝子の如く透明に見ることを得るは、催眠術上透視と云ふ現象なり、之等の諸現象を余は悉く實驗し成功したること算なし、其詳細は拙著催眠術獨稽古に説明しあり、斯くの如く幻術なりと云ふ所のことは悉く催眠術なり、思ふに古へ催眠術とは如何なる者なるやを知らざる時代に於ては其現象を以て幻術なりと云ふものあれば然らんと早合點したるに依るなるべし、今より之を見れば催眠術の現象なるや明なり、東京の某所に幻術療法と云ふ看板を出した醫士あり、よりて如何なる療法なるかと尋ねたるに、畢竟催眠術療法に外ならざることを確めたり、以て幻術の正體知るべきなり。

第十九章 氣合術

古來より我國特有の武士道中に氣合術なる者あり、刑事巡查等が犯人を追跡し捕縛する場合に、不知不識此術の一部を應用しつゝあり、例へば現行犯人逃走したるとき刑事巡查が其後を追て掴まへんとするに當り、犯人は餘程先に逃げ、十間も先を歩みつゝあるにも拘らず、此時巡查大喝一聲、シメタと叫ぶや、犯人は思はず足すくみて倒れ捕縛せらるゝことあり、又此術に達せる劍客は、歩行しつゝある者に、一言エイト氣合を掛くれば立ち止りて歩めなくなることもあり、或は劍客互に雌雄を争ふ場合にも、突然此氣合を掛け、敵をして敗北せしむること珍らしからず、余の考によれば其理は催眠術に於て被術者に向つて、汝の足は疊に堅く着いて離れず、如何に離さんと欲するも足は動かさずと云へば、其通りとなる現象と性質は同一なりと信ず、催眠感性の高き者なれば、殊更に催眠法を行はざるも術者が突然斯く云へば其通りとなるものなり。

大凡社會に立て事を爲さんとする者は何業を問はず、人心操縱即ち氣合術に長じ

膽力を鍛練する必要あり更に之を要せざるものなし、大にしては國と國との關係の如き人心操縦に妙を得ば、單に外交のみにて戰爭をなし降伏せしめたるより以上の好結果を收むるとを得、小にしては主婦がおさんを甘く操縦せんか、おさんは給金も何も顧みずしてよく勉むるに至る、若し一私人と一私人との間に談判交渉事でもある場合に、操縦法に熟達せんか、自分の主張を相手方に悉く認諾せしめ乍ら相手方を喜ばしむるとを得、それに反して操縦法に疎ならんか、自分の意見は相手方の怨を買ひ、激怒に觸れ、却て敵を設けたる外何等の得ることなくして仕舞ふ場合あり、以て操縦法の必要知るべきなり、げに此法に妙を得ると否とは、其人の成功と否との分るゝ所なり、元來操縦法中に述べんとする氣合術は武士道の一種なるも、精神鍛練に資すること尠ならず、且相手の者に對して萬事の懸引上に交際上に應用して妙なり、故に催眠術者が被術者に對して暗示する場合に、之を應用せはよく暗示をして感應せしむることを得ん、何をか操縦法と云ふ曰はく操縦法とは相手方の精神の虚を洞察し、其實を避けて其虚を衝くの術なり、今相手方と談判せんとするに當り、相手方は我主張に反抗せんとする精神にして五分のすきもな

きときは我が言を述ぶるも悉く無効に歸すべし、此の如き人の精神を操縦するに二種あり、一は敵の反抗精神を威壓する者にして、他は反抗精神に油斷をさして其虚を衝き或は却て之を利用して談判の効果を助くる者なり、此後者の場合を氣合術と云ふ、氣合術をして最よく運用せんには、只自然に生ずる精神の虚を窺うに止めずして、更に積極的に吾人が望み居るやふの精神の虚を故意に誘起するの手段を取らざるべからざる場合あり、故意的に精神の虚を誘起する法を文學博士福來友吉先生は五つに分ちて、催眠心理學に論ぜり、同書に基き之を説明すれば左の如し、
 (一)轉氣法 突然一事に氣を奪ふて、他方に油斷を生ぜしめ、其油斷に乗じて勝を得るの法なり。
 (二)挫折法 己れに對抗せんとする精神を引き外づして、其勇氣を挫き以て其虚に乗ずるを云ふ。
 (三)誘念法 相手方が己れに反抗せんとする場合に於て、相手方の好む方面より説き起し、不知不識の間に反抗心を消滅せしめ、己れの意に従はしむるやふ誘引するを云ふ。

(四)利用法。相手方の主張する所を稱揚して、其自負心を悦ばしめ、其を利用して自分の意をよく感受せしむるの資に供するを云ふ。

(五)放任法。活動しつゝある精神を正面より禁止せんとすれば、反つて益々活動す、故に其活動する儘に放任し置き、以て其進行をして自然に停止するに至らしむるを云ふ。

以上は文簡にして一讀にては解し難がるべきも、數回熟讀し潛心注意してよく其場合を想像すれば、自然に大に悟る處あるべし、斯くの如く口に云へば其操縱法は容易なるも之を實地に生かして働かしむるには膽力大にして、應用自在ならざるべからず、故に膽力修養の方法を以下少しく述べん。

(一)膽力も畢竟心の落附きにて精神平靜なることなり、故に平常意を此に注意するを要す。

(二)膽力修養は自動的に啓發的に終身一寸も怠るべからざるもの修養を積み積む程益々膽力は大となるものなり。

(三)古今を見るに一世に名を擧たるものは皆膽力大なり、之れ等は天性大なる膽力

をして益々修養によりて大ならしめ、確乎不動の信念の一徹に凝り固まりたるものなり。

(四)王陽明曰く山中の賊を破るは易く、心中の賊を平らぐは難しと、王陽明の如き幾度か白刃の下生死の間を出入した者てさへ然るに、況んや吾人の如きものにして胸中の雜念一掃は難事なり、其難事に打ち勝つ丈の決心を要す。

(五)膽力を大ならしむるには、凡ての慾を去るにあり、慾さへ去れば最早何事も氣にかゝるものなき筈なり、氣にかゝるものあるは未だ全く慾を去りきらざる故なり。

第二十章 棒 寄 術

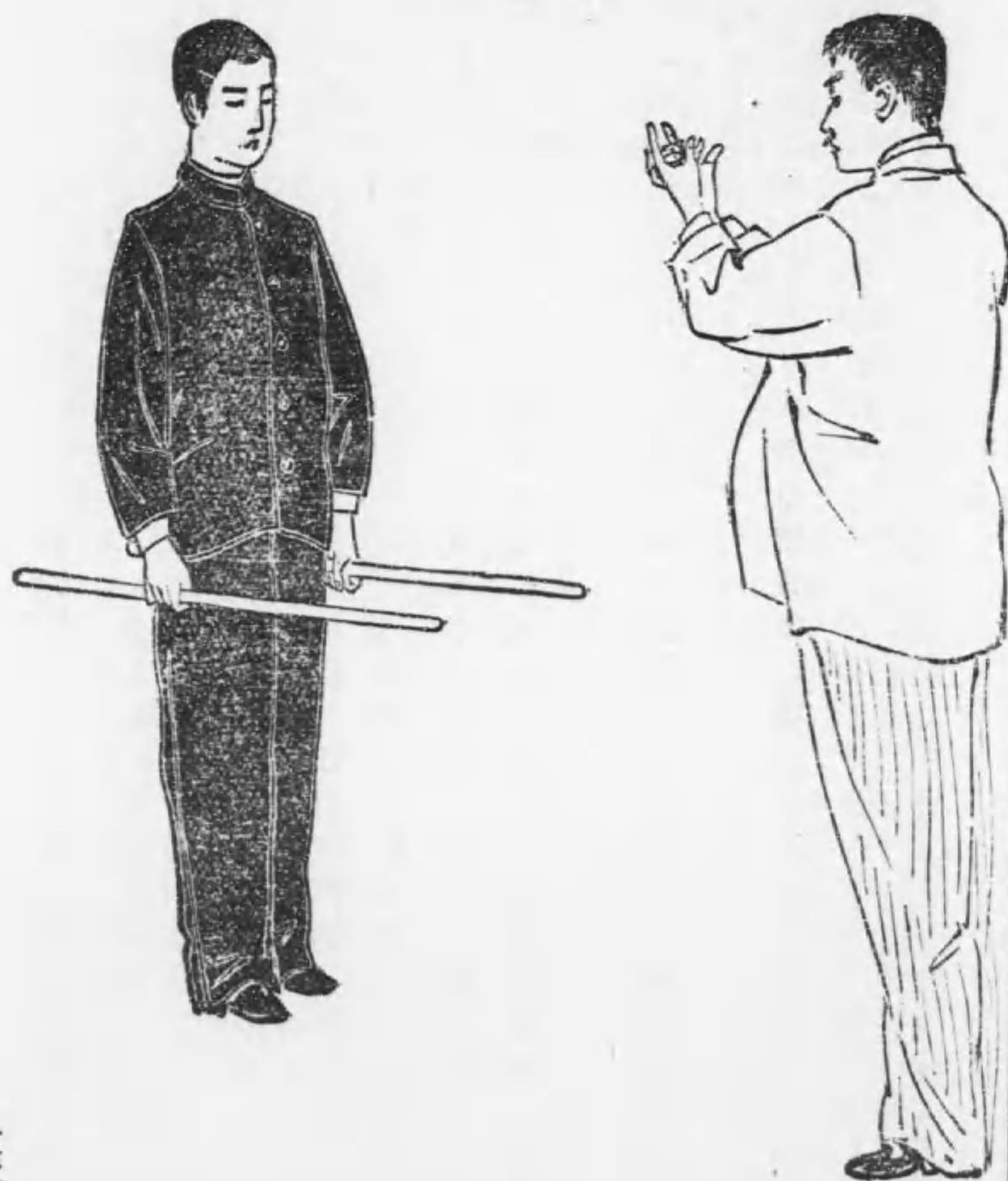
先づ被術者を直立せしめ、兩手を兩側に垂れ、其の兩掌に一個の棒を握らしむ、棒は直徑八分位長さ六尺位、竹にても躰操用球竿にてもよし、其棒の中央に驗をなし置き、其驗を握がらしむ、術者は凡そ六尺位離れたる所に直立し、被術者をして施術者の顔を見詰めさせ、術者も又被験者の顔を見詰め、心力を強烈に集注し、被術者に閉

目を命じ、勉めて無念無想ならしめ壯嚴なる口調にて、棒は漸々寄る堅く棒を握る」と數回繰り返して云へば、其通に漸々寄りて棒の先端は互に密接す、此現象は物理的の作用も加はるべしと雖も、主として精神作用にあり、即ち被術者の精神が無想の境にあるに乗じて、棒はよるとの暗示が感應し、被術者は故意に棒を寄せずとも、不知不識の間に血液及び筋肉が棒を寄する様に働きて終によるなり、換言すれば心身相關の原理によるなり、擴義に於ける催眠術なり、故に甚だしく疑念強きもの又は故意に強く棒を寄せざらしめんと反抗するものに、感應せしむることは困難なり。

棒の先端が寄りて密接するか交叉したるときは、被術者の眼を開かしめ、棒の寄りたることを示し、又閉目せしめて今度は棒の先端次第に元の位置に開くと云へば、其通りに開くものなり、之を棒開きの術と云ふ。

余が此術を實驗したることは前後數百回なり、其中東京麻布東斌學校内清國人王、尙之君を被験者として、實驗したる次第を示さん、先づ王君をして余の應接室の一隅に直立せしめ、第五圖に示せる如く棒を兩側に垂平となして兩手に緊と握らし

圖 五 第



め余は數尺離れたる所に直立し清國傳來の五鬼の印を結び、何事も考へずに居る益々堅く握ると二三回繰り返したるに、忽ち棒の兩端は密接せり。爰に於て余は印を解くと共に、棒の兩端は開くと云ひたれば其通りとなれり。余が印を結びたる意は、心力を集注する方便と、傍觀者をして如何にも秘法あり不思議のものなりと思はしめんが爲めなりき。此術を實驗するに當り、注意すべきは被驗者をして棒の先端を見せず、術者の顔又は手先を一心に見詰めせしむるをよしとす、止むなくんば前記の如く閉目せしむるも可なり。實驗中被驗者は誰れか棒を手にて寄せ居るやう感じ、多少の反抗心を以て寄せざらしめんとするも、自然に寄りて密接せるに驚くものなり。

井上博士が「妖怪學講義」に於て棒寄術を説明したる所は穩健なる學說と信じ、抄録して參考に供せん。

「今其原因を考ふるに物理的及び心理的の二様の説明によらざるべからず、先づ物理的説明によれば、棒寄は猶ほ「コックリ」と同じく、吾人が永く靜に手を保つこと能はずして、必ず五分乃至十分の後には、手に動搖を來たし、隨て疲勞を生ずれば、愈々

動搖を増し、筋肉自然の組織上より棒寄の結果を生ずるに至るものなり、然れども此物理的説明のみにては、盡く其理を解すべからず、必ず之に加ふるに心理的説明なかるべからず、今心理的説明によりて觀れば、是れ亦「コックリ」と同じく豫期意向不覺筋動に由るを知るべし、即ち兩手に棒を握るものは、豫め棒の前端の相合すべきことを信ずるを以て、其意に期するが如く、自然に其作用を手の筋肉上に發現するものにして、而かも自身は之を信ずる一點にのみ、全心を注ぐを以て、覺えず識らず棒端接合の作用を現するに至るなり、斯くして既に其前端の相合するや、復び漸々徐々に其本に復するに至るも、亦豫期意向の然らしむる所に外ならず、若し該人をして一度合して又開くことを知らざらしめば、本に復せざるか、或は十分の結果を得難かるべし、然るに若し其開くべきことを知れるときは、自己の思想之を迎へて、覺えず棒の兩端の漸く離開するを見るなり、又之に向ひて呪文を唱ふるが如きは、是れ一種の儀式にして、其豫期信仰の度を強からしむる方便となるなり、是を以て婦人少年無學なる者には、其効驗を多く見る、是れ其原因の全く精神作用、即ち心理的豫期意向によりて生ずることを證するものなり、西洋に於ては、此棒寄に甚だ

よく類似せる奇術あり、之を靈棒と稱す、願ふに吾が邦の棒寄せは或は此方法の傳はりしものにあらざるか

第二十一章 火箸曲術

俗に馬鹿力と云ふことあり、平常腕力弱くして半人力もなき者が、一朝狂人となりて暴れ廻る際には非常なる驚くべき大力が出で、壯健の者數名集るも、其力及ばざることあり、又病人あり寝に就き苦惱し居りたるに忽然隣家にて火を失し、忽ちにして大火事となり、今や我家も類焼に逢はんとす、此時病人蹶起して重要物を入れ置きたる箱を抱へて逃げ去れり、後火災止み幸にして類焼を免がれり、よりて曩に病人が持出したる箱を持ち入れんとするに當り、壯健の者四名にて汗を流して漸く元の處に納めたり、斯る重き箱を何ふして病人が手軽く一人にて持出したるか、之れは狂人の馬鹿力と同じ場合にして、何事も顧る違なく一心不亂になりたる故なり、換言すれば其事にのみ精神が凝り固まりたる故なり、心力集注の結果の如何に驚くべきかを知りぬべきなり、催眠術上に於ける不思議の現象は、悉く心力集注

第六圖



の結果に外ならず、例へば催眠術で病氣の治するは催眠状態と云ふ、鏡の如き無想の精神となり居る被術者に向て、病氣は治したと術者が一言云へば、被術者の精神は其の通りにのみ堅く集まりて他念を起さず、故に心身相關の理によりて其言は

れし通りの結果を得るなり、又何等盡心なき者に催眠術を罹け、畫が上手に書けると云へば、畫が上手に書けるとのみ心力集注し、少しも他念なき故、眞に畫が上手に書けるものなり、大日本催眠術協會卒業生なる島根縣鹿足郡日原村字日原西本桃雨郎君が、少しも畫を習ひしことなき小年に催眠術を罹けて、畫が上手になつたと暗示して後書かしめたるに、第六圖の如き畫を得たりとて送り越せり、火箸を曲げる術は、此理に基きて行はるゝものなり、其方法は先づ火箸をとりて、左手に其一端を握り、右手の小指をかけ、之れは細き銅線なり、自由自在に曲るものなりと思念し、其思念を強烈にし胸中の雜念去りて、唯余は此銅線を曲ぐると云ふことのみ、心に寄せ、アットと全身の力を込むれば、火箸はくの字形に曲るものなり、火箸は太くて短きものは適せず、成べく長きを可とす、之れ余り太ければ曲がらず、又短きものは折るゝ恐れあればなり、其れを曲ぐるに當りて漸々と力を入れんか曲らず、一度に全力をアット云ふ氣合と共に集むるを要す、例へば爰に十五の力ある人あり、十五の力にて火箸は自在に曲ると假定せんに、其人初め五の力を出し、次に又五の力を出し、最後に五の力を出して十五の力を費すも、火箸は五の力しか感せず、故に曲

らざるなり、故に此法は物理の原則によりても説明するを得ると共に、精神の集注の結果の如何に大なるかを立證する唯一の方法なり、野戰砲兵第十一聯隊、砲兵特務曹長谷本延衛君は大日本催眠術協會々友にして催眠術の奥義を究めらる、君の報告書に曰く、直徑一珊知米の火箸二本を取り、之を揃へて左手に其上部を握り、他の一端を僅かに、右小指上に托し、傍觀者に示すに、心念術の威大なることを以てし、此火箸は銅線なりと思念すれば、忽ち、くの如く屈曲す可しと云へば、一同一笑す、余此れより曩に數回實驗せるを以て、平然として雜念を去り、心力を集注し、心機熟するに及び、エイトと全身に力を込め、全く形に變曲せしめたり、傍觀者一同は意外の効果に戰慄の言さへ洩したり、明治四十年四月五日週番服務の爲め在營中、午後七時頃週番士官室に於て施術す、觀覽者砲兵曹長岩佐竹次、同軍曹伊藤百歳一外四名云々、火箸曲術は如此簡短にして何人にも直に行はる余は大日本催眠術協會に於て新潟縣中魚沼郡吉田村字眞田桑原茂次君其他數百名の面前に於て之を實驗して示し次に桑原茂次君其他の人々も實驗したるに忽ち皆甘く成功し、一人として仕損

とたるものなかりき、理論と實際は如斯簡易なるも、見る者をして何にか大なる秘訣でもある如く見せざれば甚だ興味なし、故に或人の如く火箸を握りて推し戴き、或は手に印を結び、或は指頭を以て之を撫し等して、見物人の膽を奪ひ、而して後に之をくの字形に曲げんか、忽ち大喝采雨の如くなるべし。

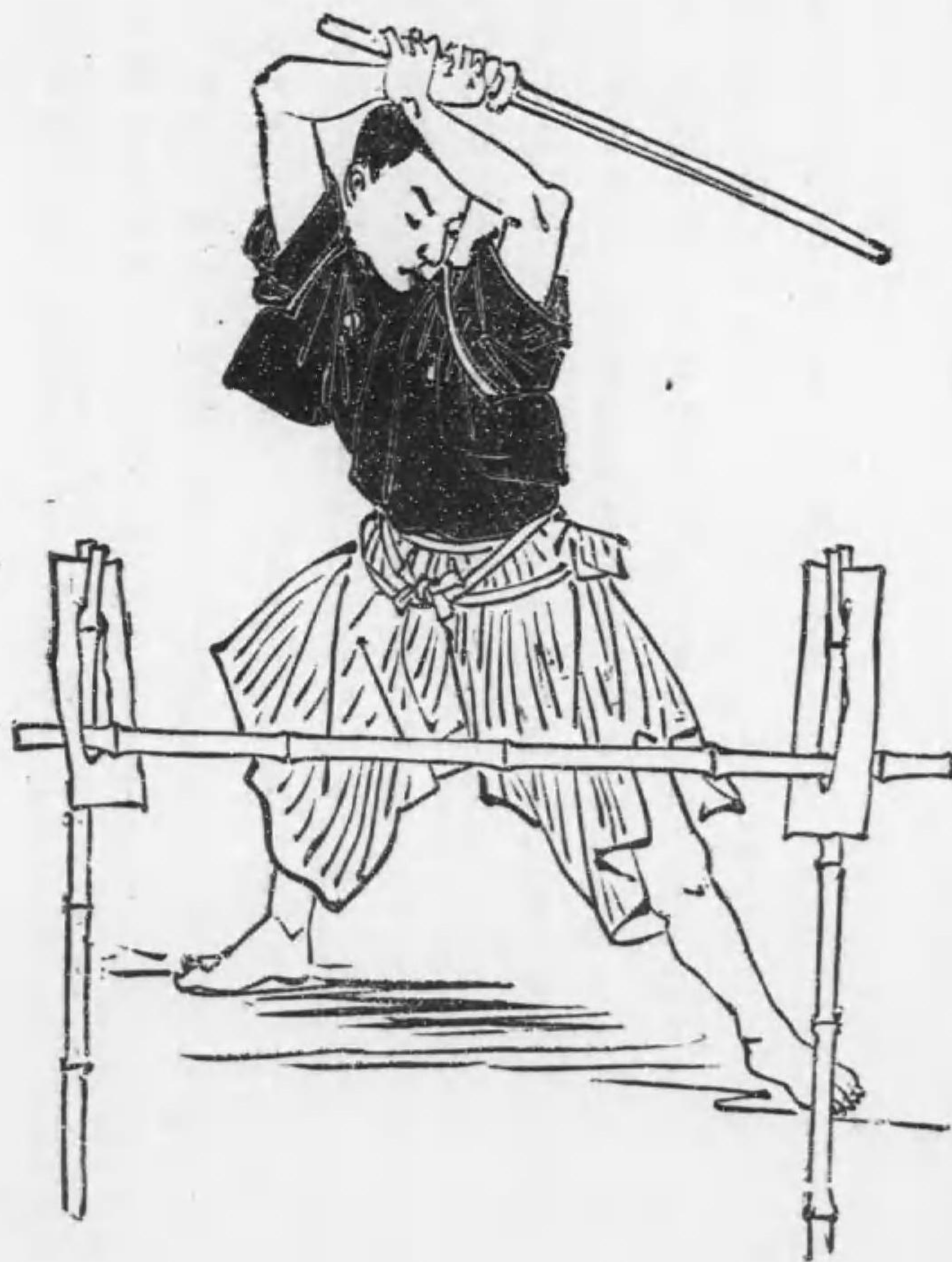
第二十一章 武道竹折術

此術は東京の路傍にて之を演じて示し、其の種本と稱する小冊子を賣るものあり、即ち術者は短袴を穿ち後ろ鉢巻にて、地上より二尺位の高さの臺を兩側に置き、其の上に各々一個のコップを置き水を一杯注ぎコップの端より端にかけて直径一寸長さ二尺五寸位の青竹を載せ、術者は木刀を振り上げ、一刀兩斷と云ふ如き態を装ひ、エイと一聲叫ぶと同時に、其の竹の中央を一撃すれば、コップは碎けさるのみか、水は少しもこぼれずして、竹は中央より折る、又一方あり、地上より二尺位の高さに突出せる様、竹又は棒を地に打ち込み、夫より二尺五寸ばかり距て、同一の竹又は棒を設け、白紙の幅一寸位のものに穴をあけたるを、前記二個の竹に枝を設けた

るにかけ、其の紙の穴に直径一寸長さ二尺五寸位の青竹をかけ水平となし、木刀を以て一撃すれば、竹は二つに折れるも紙は破れず依然たり、此術につき注意すべきことは竹の真中を打つことなり、若し少しにても端を打つことあらば、其の近き方に早く、重みが及びて、仕損ずることあり、よりて竹の真中に尺を量りて一寸黒にて印を附け置くを可とす、其れを打つ木は、堅き木にて造りしものなれば、昔の木刀にあらざるも可なり、又其れを打つ際は、身構へを充分になして心力を集注し、吾は此竹を二つに折ると云ふことの外、何事をも思はざるを可とす、此理由を武術家は武道の極意であると云ひ、物理學者はコップの端より端に架したる青竹を打つに其の打つ力非常に迅速なるを以つて重力の未だ其の兩端に及ばざる先きに、竹は折る、故其の兩端は下へ押ゆる重力の反射にて上へ跳ね揚がる故に、紙或はコップは少しも重量を感ぜざるなり、と催眠術家は之を催眠術上の現象たる、強烈なる心力集注の結果として説明せり、實驗上心力の弱きときは仕損ずること往々あるを以てなりと。

以上の文を會て「催眠術新報」に掲げたるに、其通りに實驗して成功したりとて報告

圖七第



一四六

するもの續々あり、其中大日本催眠術協會々友なる朽木縣足利町巴町五四六番地
 中村林吉君の報告の要に曰く、催眠術新報に書ひてある通りにコップに水を盛と、
 其上に青竹を載せ木刀を以て其中央を一撃したるに、コップに少しの異常もなく
 見事に竹は折れたり、次に二本の棒を立て、白紙一枚を八ツに割きたるものにて青
 竹を吊り、其中央を一撃したるに、紙は依然として居り竹は折れたり、次には青竹の
 兩端を細糸にて吊り下げ置き、中央を一撃したるに細糸は其儘となり居り、竹は前
 の如く折れたり云々、
 此術も又多少の練習を要する故、初より見事に成功することは六ヶ敷も、少しく研
 究すれば誰にても上手になるものなり。

第二十三章 男女交際の魔術

男女交際の關係を目して魔術と云ふは、附會も甚だしきが如くなるも、余の考によ
 れば之こそ所謂理外の理にして眞の大魔術大不可思議のこと、信ず、試に見よ、絶
 世の美人が、人三化七の如き醜男に迷ひ、親を棄て世を棄て、願みざるを、又立派な

る門閥家に生れし貞節の美妻あり、愛子ありなから其を棄て、醜き賤女を慕ひ、名譽も財産も生命も犠牲に供するものあるは抑も何故ぞや。特に之等の男女は智識學藝衆に超へ居りながら、斯る理不盡の悪行を敢てなし之れ程善ひことは此世になひと思ひ居るは實に不可思議にあらずや。馬糞を牡丹餅と思ふて、喰ひ、木葉を紙幣と思ふて紙入に納むると異らざるにあらずや。余は之れ以上の不思議の現象を未だ知らず、實に魔術的と絶叫せざるを得ざるなり。之れは殆も催眠術上に於ける幻覺錯覺の現象と同一なりと信ず、換言すれば偶然に妙な暗示が感應したるなり、男女間の關係は悉く精神作用なり。例へば爰に二枚のハンケチあり、其一枚は美人の賞れ高き華族女學校生徒某伯爵の姫君の愛品なり、君に保管を頼むと云はんか、忽ち鼻毛を伸ばし其ハンケチを持ちたる丈にて、其愉快得意幾何ぞや。他の一枚のハンケチは隣家の醜女も鍋の所持品なり、君に保管を托すと云はんか、憤然として人を馬鹿にするなど激怒するならん。嗚呼之れ抑も何故ぞや、其の實二枚のハンケチは同一物にして醜女をさんの所有にもあらず、伯爵の姫君の所有にもあらず、斯く云ひし丈にて一は快感を得、他は不快を感じ、一は喜び他は怒ると云ふに至りて

精神作用の如何に奇なるかを知りぬべきなり。口先でさい然るを。若し其れが實際に姫君に手を握られし心持と、鍋に手を握られし心持とは如何實に雲泥の差あらん。嗚呼奇なる哉怪なる哉男女の關係、余が魔術的不可思議と云ふも寧ろ奇言を弄するものとして、一概に排拆すべきにあらざることを首肯せらるゝならんか。

人の生涯の運命は往々交際の巧拙の爲めに左右せらる、諺にも人は交際の動物なりと云ふ、男女を問はず眞に交際に巧妙なる人は世の所謂成功を得るの利便多きは夫の顯門の家に生れ、金錢に不足なき人に比するも決して遜色なきなり。交際の上手下手は天性によるも、一意に之を學は、何人と雖も竟には相應の熟達を得べきこと、殆も習字に於けるが如くならん。天性によりて進歩の遲速は免れざるも、人生れて字を習ひしことなくして、字を能くする者なきと一般にして、交際法の如きも諸法則を心得、機會ある毎に之が應用に怠らざれば、竟には必ず巧妙の域に達せん、人若し自己の交際法につき欠點を感得せば、宜しく之れが矯正に意を用ひば、必ず理想の域に達せん、交際上の大秘訣を次に摘記して之を示さん。

秘密にして呉れと言はれ、又秘密にせざればならざることは例へ半句と雖も漏すべからず、他人の書籍或は書簡等は決して許しを受けずして手に取り見るべからず、他人の感情を害する言葉は深く注意して素振及び口に出すべからず、人の性行や事業を噂すべからず、他人を不快ならしむる言葉を堅く避くべし、人格を卑しむる如き言葉舉動は堅く避くべし、親密の間柄と雖も狎れ過ぎたる無遠慮の言葉は避くべし、他人を非難すべからず、己を責めて人を責めざるやうにすべし、阿諛に流れざる限りは他人を喜ばしむる世辭を用ゆべし、相手方の長所美點を認めて之を尊敬すべし、相手が自負する所を認め其れを捉へて世辭を述べ、如何にせば相手方を喜ばしむるかに注意し實行すべし、世間にては相手方を賞賛する噂高きことを告ぐべし、言語は勉めて自然的になすべし、虚榮心の雜れる自慢嘖を避くべし、談話中自己に關するとは成るべく避くべし、自己の長所若くは短所を語るを成るべく避くべし、強き斷言の言葉を避くべし、勉めて謙抑の人となるべし、萬事に好意を以て慇懃なるべし、己に向て害をなすものと認むるも愛を以てし決して嫌惡の情を起すべからず、相手の家族若くは友人の近況を尋ぬべし、異論者の前にては自

説の主張を慎むべし、生國や年齢等の身元は猥に尋ぬべからず、聽者の不快感を惹起すが如き不潔の談話は堅く避くべし、相手が答ふるを好まざることとは質問すべからず、相手が語らんとすることは質問するをよしとす、人の顔を餘り無遠慮に凝視すべからず、厚顔と無作法とは堅く避くべし、高聲に議論めきたることは避くべし、不快を聯相する如き談話は一切避くべし、他人を喜ばしむる爲めには自我心を捨つべし、相手方に嘖あらんとせば宜敷黙聽すべし、用語は常に簡短明瞭なるべし、確信なきことは嘖すべからず、何事にも忍耐し實意を以てすべし、之れ正に交際の秘訣なり。

色魔術と稱して魔術を應用して、男魔女魔互に魔術の競技をなす等云ふ説を大に印度にては主張するものある由なるも、多くは無稽の流説にして信を措くに足らず、然れども彼の藝娼妓が客を誑感して最愛の妻子を棄てしめ、先祖代々の家財を傾けしむる如きは、余の考へにては眞に之れこそ現世に行はれつゝある魔術と云ふも、穿ち誣言にあらざると信ずるも否か。

第二十四章 地獄極樂漫遊術

一五二

人の嘶や繪畫や或は香具師の人形にて、世人の熟知する地獄は此世に於て五官に映する所の苦境を集めて構成したる處にして、其の有様見るに忍びざる慘酷を呈す、即ち針の山に登らしむるあり、舌を釘抜にて抜かるゝあり、其恐ろしきこと言語に絶す。又極樂は尤も快樂を集めたる處にして、木々に黄金の花が咲き、五色の雲は世界に滿ち、金銀財寶に苦しむものなく、綺羅銀繡を得られざる者なく、何事も望む通りとなる、實に理想的の處なり、斯る處果して存するや否や、佛教にては地獄を分けて八とす、曰く等活地獄、曰く黑絶地獄、曰く集合地獄、曰く叫喚地獄、曰く大叫喚地獄、曰く集熱地獄、曰く八焦熱地獄、曰く無間地獄に分て細く説明せり、地獄極樂は例令ひことにして有形的に斯くの如き不可思議の處あるべき筈なきは無論なり。之れは惡因惡果、善因善果の理を愚婦愚夫の胸に落入るやふ例へて示したるものに外ならざるべし、昔時智識の發達不充分なりし際は、地獄極樂の實在を信じ、惡をなせば地獄へやられる、善を成せば極樂へ行けると信じたるも、今日は諸學術大に

發達したるを以て、斯くの如き小兒欺ましのことを云ふも、笑ふて耳に入るものなし、よりにて今日は今日の學を修めたる者にも、御最と思ふやふに説明することゝなれり、此説によれば極樂も地獄も皆我心にあり、催眠状態と同一の精神状態を目して極樂と云ひ、天國と云ふ、心に惡を抱き苦悶に堪へざる處の精神を目して地獄と云ふものゝ如し、井上博士は極樂を解して佛教に所謂眞如の世界の義とし、平等無雜湛然寂靜の精神とせり、彼の老子の云ふ無名、孔子の云ふ天、易に云ふ大極、釋迦の云ふ眞如、法性、佛、耶蘇の云ふ天帝、我國に云ふ神も皆其軀の一面に與ふる假名にして余は催眠術に羅れる者の精神状態と同一ならんかと思ふ。催眠状態にある處の無念無想の精神を或學者は宇宙の精神と云ひ、至大至剛の力と云ふ、桑原俊郎氏は「宗教論」中に次の如く論ぜり。

「心といふのは一の動力で、物を動かす力である、宇宙はこの力で滿ち充ちしてをるのである、この力の凝集は物質となる、物質散ずれば復元の力に歸す、萬有は此の力の活動から起り、此の力の活動から散ずるものである、て宇宙は心ばかりと謂ふことになる。」

一五三

その心の極大なるものは宇宙一杯の心となる、その同一の心を目して人格的に寫象して神と云ひ、佛と云ふ。

さて此の宇宙全一をば人間の如くに意志あるものとして、人間以上の靈物として取り扱ふときは、茲に神といひ如來といふ名目が出来るのであるけれども、もしや此れを世界的にいふ時はこれを極樂世界といふのである。

全宇宙が一である以上は、それ以外に別に極樂世界とてある筈がない、宇宙より外には何もない、森羅萬象悉く宇宙で、宇宙以外には何物もないだから極樂世界とて別の處にある道理がない、この宇宙間これを極樂世界といふのである。(中略)

各その境遇相應の勤めをして樂みを失はないのは眞に極樂では無いか、これより外には極樂や天國も王國もある譯がない、宇宙以外にどこに極樂や天國や王國があらうかこれを別世界にあるやうに説いてをるものがあるなら、それは大なる誤りである、自らを欺き兼ねて人を欺くものである。

だから天上天下左右前後六合八紘總てこの空間は極樂であり、天國であり、王國である、キリスト教の天國と眞宗の極樂とは異名同物で、キリスト教のゴットと、眞宗

の阿彌陀如來とも亦異名同物である、皆この空間のことを意味したもので、この空間全一より外には天國も極樂も決してない………

極樂も地獄も己が身にありて

鬼も佛も心なりけり

パイブルに曰く、神國を建つるは國家を建つる如くなるべからず、神の國は見よ此處にあり見よ彼處にありと云ふべきものにあらずして、爾等の中にありと以上の所説により地獄極樂の所在も略ぼ明となりたるならん、所在明かとならば、其處に漫遊すること又容易ならん、否吾人は常に地獄極樂を漫遊しつゝあるものなるを、次に幻覺的極樂を催眠術によりて見せしめたる實驗を参考に供せん。

大日本催眠術協會卒業生なる福井縣丹生郡天津村眞栗區西宮弁覺氏が、同縣同郡同村御油區竹村嘉右衛門(三十四歳)をして催眠術を以て極樂界に遊ばしめたる實驗談を寄せたり、曰く、去る明治四十年七月三日午後四時三十分右の者西方極樂界を奇妙なる催眠術によれば居ながら拜觀出來るとの事故、是非共拜觀致し度との願により、希望に應じ、豫め極樂界の莊嚴珍事なることを咄し置き、以て本人の意を

驚神的大魔術

集中させ、而して双眼を閉させ頭上より額へ掛けて撫下し、此の間凡四十分にして催眠せり、よりにて暗示して曰ふに、今君が望む處の極樂界へ行くには、此の所へ多くの紫雲棚引渡りて、汝が身軀は浮き揚ると彼の紫雲飛て西方へ趣く、即ち今此の所へ紫雲來れり、此紫雲へ戴りなさい、然れば西方へ飛ぶが如く行くと云ひ、夫れより三分間捨置きて、汝此所即ち西方極樂界中七寶の池とは此の處なりと云へば、被術者歡喜の涙を流す、そこで此の池の周圍は金銀瑠璃碧瓔抄磔赤珠瑪瑙を以て合成し玉ふ、池の底には金砂を以て嚴飾せり、又八切德水其中に充滿せり、眼を驚かしむるあり、實に言語に絶すと云へば、被術者感泣せり、又此池の中に蓮花あり、大きき車輪の如し、青色青光黄色黄光赤光白光にして微妙光潔なりと暗示し、亦此方を望めば寶林寶樹の御林なりと教へて説明し、汝二度び拜すること難し、能々拜觀し玉へと云ひ、凡そ四十分の後ち遂に彼の紫雲に乗せて歸らせ覺醒せしめ、後ち妙相界の模様を聞けば、被術者涙乍らに池中蓮花の有様等、實に言語に盡し難しと云ふ、又寶林寶樹の有難き有様を拜し、恐縮したりと謝せり。

如斯催眠術に依れば幻覺的の地獄極樂自在に現はすとを得、地獄極樂は精神的に

地獄極樂漫遊術

需むれば直らに何人も感得することを得、否之を避けんとするも能はざるなり吾人の精神は常に其境を漫遊しつゝある者なればなり。

爰に本書の終を告げんとするに當り一言せん、第一章以下爰迄讀み來りし者は如何の感をかかず、既に催眠術の一般に通せる者は、一々首肯せらるゝならん、未だ催眠術の一般を知らざる者は奇なる現象を呈するに驚かるゝならん、余が上來述べたる所は決して誇大の言にあらす、一々學理に照し實驗に鑑み、最も至當と信する所を通俗に簡短に記述したるなり、斯の如く催眠術の現象は奇なり、怪なり、然れども催眠術は奇妙の事をなすが本旨にあらす、奇妙の現象は單に身心相關の證明に外ならず、催眠術本來の効力は治病矯癖にあり、醫藥の及ばざる難病を救ふにあり、愚者を賢者とするにあり、自己の精神を修養し、品性を陶冶するにあり、之れ決して無責任なる妄言にあらず、余が此點に就て實驗し研究したる所は、如上に述べたる不思議の現象の比にあらず、余は積年間に此事に全力を注げり、他日其次第を記して世の學者に質すことゝせん、實に此世に於ける森羅萬象、一として精神作用によらざるものなし、精神作用の根本は眞催眠術なり、換言すれば催眠術は此世に於

びる高象の根本なり。

驚神的大魔術終

古屋催眠術實驗批評集

第一章 反抗者催眠不思議な現象

(一) 不可思議幻妙の現象

(明治四十五年五月發行臨時增刊雜誌科學世界より抄録)

象現な議思不眠催者抗反

去月九日夜東京芝區精神研究會に於て催眠術の實驗があつた記者は其席に臨んで實驗の様様を見て催眠術の不可思議幻妙なるに驚嘆した。

會長古屋鐵石氏が實驗を行つた、被術者を室の中央に立たせ古屋氏が其の面前に立ちて一度睨みつけて兩手にて被術者の面前を撫ぜ下せば被術者は笑ひつゝ、しきりに拒む、古屋氏が手を一つ打てば直ちに突立つて動かぬ全く深き催眠に陥つたのである。夫れより古屋氏が一と言ふと被術者の眼が白くなり二で舌が出て三にて手が上り四にて足が上つた爲め、被術者は椅子より滑り落ちたが依然とし

て同じ状態であつた、古屋氏は観客に向つて、最早催眠状態に陥つて居るから如何なる事をしても決して感じなく、手を切り落すとも感じないから傷をつけない限りは宜敷故覺まさして見られたい」と云ふたら、一人の者が被術者の所へ行き面部へ劇しく息を吹きかけたが被術者には何等の變化も與へなかつた、観客の某が古屋氏に其催眠状態で、千里眼の如きことが出来ますかと尋ねたら、古屋氏は、千里眼位は何でもなく、萬里眼でも億里眼でも出来ると答へられ言葉をつきて、今千里眼よりも不思議な實驗を御目に掛けます」と云はれて實驗をされた。

(二) 術者の考へが被術者に通ぜり

其實驗は古屋氏の考へて居ることが被術者に傳はり夫れが行爲となつて現はれるのである、之が出来れば甚だ不思議と云はねばならぬ、所が出来たのである、古屋氏は皆様の中の誰か考へて居る事を私が聞いてやつてもよいが時間がない故簡單なる事を私がやつて見ます」と云ひ古屋氏が被術者に向ひ今私の考へることを行へと暗示して、二間程離れて氏は被術者を警めながら満身に力を入れて何事

か考へを傳へた、すると被術者は始め眼を白くし次に舌を出し次に手を上げ次に足を上げた、これ氏の考へが傳はつたのである、古屋氏の語るには、之れは如何なる遠方にてするも差支ない百里遠くに居るものにて考へを傳へることが出来る、本日二階に被術者を置き下に實驗せしところ同じ現象を呈した、此理で宇宙間如何に遠くにあるとも同じである、そこで人を祈り殺すことも又遠方の者の病氣を癒すことも或る程度までは此現象で説明される」と云はれた。

次に古屋氏の發明されたと云ふ實驗を行つた五十二枚のトランプ中より數枚を抜き取り、其トランプ中の一枚を観客に取りしめ、夫れを氏が見て心に考へ、絲によつて被術者に考へを傳へしめる事である、氏は二間位の細き麻絲を採つて被術者の左手に暗示を與へて其絲を持たしめ、更に一重手に廻し置きて其一端を古屋氏が持つた、此絲は五間あるも六間あるも亦百間あつても同様である」と云はれた、氏は観客に一枚抜かしめ其のトランプを見て絲の端を持ち、被術者にもう解りました、云ふて御覽と云へば、被術者はスベートの六と云ふて明かに適中した、次にはダイヤの八と云ふてまた適中した、氏は短い言葉にても長い言葉にても繩を傳へ

て通ずることが出来る」と断言された。

(三) 催眠者観客の所持品を當てた

次に古屋氏は被術者に暗示を與へてハーモニカ、手風琴、ヴァイオリンも美事に奏せしめた、今度は被術者の面部を白布にて幾重にも蔽ひ観客の所持せる品物を當てることを行つた、古屋氏は被術者の椅子の側に立ち観客の示せる品物を見て考へを傳へしむれば暫くにして「鐵瓶」と答へ適中した観客が直に「其口は何れの方を向ひて居る」と問へば暫くにして「前を向いて居る」と答へ適中した、今度は時計の鎖を示せし處これも適中した、古屋氏は「前には懐中物を當てた」と云はれた、次に暗示を與へ樂隊と三味線の音を出さしむれば一分毎に片手宛、活動寫眞の樂隊と三味線とを鳴す手付きをしながら口にて其真似をするのである、次に新聞賣と納豆賣の聲色も同様になした、次に古屋氏は「諸君が隨意に數字を書て夫を私が考へると被術者が當てる、餘り多くの番號の數字では複雑するから千位以下が宜しい」と言はれた、すると余の隣の者が紙へ八百五十と書た、すると氏が之を見て被術者の椅子

の側に行き考へると暫くして「八百五十」と適中した、次に被術者をして大聲に歌ひながら劍舞を一つ演ぜしめて後醒ました。

第二章 新發明の口笛催眠法

(明治四十四年九月十一日發行「萬朝報」より抄録)

(一) 口笛とハーモニカとの吹き方によりて人を意の儘に催眠せしむ

昨夜芝琴平町精神研究會で新發明の催眠術實驗を行つた、術者は同會の古屋鐵石氏で先づ學生を椅子に凭せ、鐵石氏三間許り距つて、二回口笛を吹くと手もなく催眠状態と爲つた、餘りに飽氣ないので五十餘名の來會者は眠つた振ではないかと疑ひ出した、鐵石氏其れと見て取り、此者を醒す事ができれば失禮ながら百圓差上げますといふ、立會人が大なる鈴を鳴らしたけれども覺めない、鐵石氏更に口笛を吹くと、催眠者は義太夫を語り出す、又手を動かし足を踏張る、芝居の真似をする、次に氏がハーモニカを吹くと大聲で笑ひ出す、今度こそ眠りから覺めたのかと思つ

て耳の傍で大聲で呼び、體を揺すつたが依然として催眠して居た。

(二) 催眠者詩歌を詠ず

更に君は大詩人であるといふ暗示を與へると立會人から題を出した五言の詩は四分間、都々逸は二分間、川柳一分間、新體詩三分間で手早くすらくと書く洋杯へ水を盛つて、是れは麥酒だ、君は好きだから飲めといふ、甘さうに飲んで手風琴を奏し、グワイオリンを弾く眞の刀を渡すと劍舞をやる、此間約二時間に亙つた、九時三十分になつて、やはり暗示のピアノの音樂で覺醒し、暗示通り帝國萬歲來會者諸君萬歲を叫んだ、口笛二回で施すとは催眠術も進歩して來た。

第三章 催眠者月琴を弾き唱歌を唄ふ

(大正元年十一月十一日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 一聲の氣合で深く催眠せしむ

十日午後六時芝區琴平町精神研究會主古屋鐵石氏の催眠術實驗を見に行つた、青

年を席上中央に設けられたる椅子に腰を掛けさし、古屋氏一聲高くエイツと氣合を掛けると件の青年は催眠状態に陥り氏の言ふが儘に或は笑ひ或は怒り、或は月琴を弾き或は唱歌を唄ふなど斯術の効果は中々面白い、夫れから何人の提出せる問題に對しても直に筆を以て應じ得ると云ふ。

(二) 催眠者記者の出題に應じて俳句を作る

記者は大演習と川越町と云ふ題で俳句を注文したら、武藏野の川邊に小銃響きけり」と答へた、併し覺醒後は一向書く事もできなかつた

第四章 催眠者左手で字を書き犬猫に變換す

(大正二年一月十四日發行「やまと新聞」より抄録)

(一) 藝妓と義太夫とに人格を變へたり

芝琴平町三精神研究會では去る十二日午後六時から催眠術實驗會を開催した、集會者數十名定刻となれば二階の大廣間に綺麗な椅子を置いて、それに會員北榮壽

と云ふが腰をかける、これも會員の永富金城と云ふが施術者となつた、充分に催眠させて置いて左手で字を書かせた、被術者の北榮壽は腕を揮つて「龍虎催眠」といふ字を書いた、頗る立派な者であつた、次で棒寄や自己催眠等があつた、最後に會長古屋鐵石氏は一青年を催眠させて藝妓、義太夫、琵琶師、狂言師、大臣、犬、猫、鶏にまでも人格を變換して見せた、散會したのは十時であつた。

第五章 催眠者役者となりて狂言をなし

藝者となりて歌を唄ふ

(大正二年一月十九、二十、二十一、二十二、四日發行「新潟新聞」より抄録)

(一) 實驗會場の光景

芝區琴平町の精神研究會にて催さるゝ、古屋鐵石氏の催眠術實驗會に招待されて在京の宿所を出た。暫く行くと西洋造りの家が在つた、入口の太い門柱には「精神研究會」と楷書に書いた札が掲げられて居た、門を入つて、花崗石を敷き詰めた道を玄關へ急いだ。

案内されて、二階へ登つた、二階には精神研究會の會員で、今夜の催眠術實驗會の幹事の一人なる北榮壽君が居て『さあ此方へ』と座布団を持つて火鉢の側へ座らせた。先着の會衆は『靜肅』と書いた承塵のビラを見詰めて廣い日本間の座敷に呼吸を吞んで座り込んで居た。茶は御隨意におあがり下さいと書いたビラも下つて居たけれども、神の默示を受けるクリスチャンの様に呼吸さへ吞んで神妙に納まつて居る、一閑張りの大きな机の上に茶器が雜左無ささうに明るい電燈の光に反映して居た。森として何の音も聞えない。

實驗室正面の中央が一間の床に成つて、其處には紺地の極彩色の文珠菩薩が白毛の獅子に乗つて居る大軸が掛けられて、五彩絢爛目覺める様な花籠が其の前に飾られてある、つゞぢの床柱を境に右手の遠棚には、幾つかの實驗の道具や月琴やハルモニカ等様々な樂器が飾られて、床の左手には大銀行家の書齋にある様な大きな事務用机が拭き込んだ板面に電燈の光を滑らして銀の金具がガラガラと光つて居る横手組子の書院障子を後に緋天鵝絨の椅子がズラリと並べられて『新聞記者席』と之もビラが下つて居る、實驗室中央には乳白色の曇り硝子に梅花の模

様を抜いた井型の笠が釣るされて、電燈が隈もなく室の四隅に麗やかな光を浴せ、電燈の下には鞆した牛皮の大きな安樂椅子が置かれてある、之れが施術椅子だと北君が説明した。施術椅子の横手に深緑色のテエブル、クロオスを掛けた大きな丸テエブルがある。丸テエブルの後の方に、寫真屋の撮影室に在る様な蛇腹の房を重い程下げた椅子が配置されてある。丸テエブルの上には新派劇の舞臺面に飾られる様な玻璃製の水入れとコップとタガヤサンの硯箱とが、モツタイらしく飾られて在る、之も皆實驗に必要な品だと北君は説明した。座敷の欄間には展覧會場の様にぐるりと金縁銀縁の洋畫の額が掛け並べられてやはらかな電燈の光線に打通しの座敷は夢の様に眠つて居る。静寂を破つて實驗室に掛けられて居る時計が七時を打つと間もなく二人の青年が實驗椅子の前に現はれて軽く會衆に叩頭して。

『これから實驗を始めます』と云つた。髪を長く、左右に分けた男は、實驗椅子の上へ倒れる様に腰を掛けた、五分刈の愛嬌者と云つた顔の造作の男は其右に立つた。分け髪は被術者で五分刈は施術者である。施術者は被術者を最も樂々

する様に取り扱つて、頭から頤へ掛けて白い手拭をフワリと冠せて『君は非常によく眠る』と被術者に囁いて軽く白布の上から頭を四五回撫で下して、それから眼の邊を撫ぜ手を撫ぜた。また『君は非常によく眠る』とくり返して、今度は胸から下腹部の邊を軽く撫ぜ廻した。恙うして三分ばかりすると施術者は被術者の身體から手を放して『君は既に眠つた、非常によく眠つた、君はもつと深く眠る、もつと深く眠る』と幾度も小さい聲で、くり返しくり返し被術者に暗示して、顔に掛けた白布を取り除いて『君は非常によく僕の暗示に感應する、精神は爽快である、君の頭腦は非常に軽い、君の血液は非常によく巡つて居る、君の氣分は非常に愉快である、君は非常によく僕の暗示に感應する』とくり返した。被術者は霞に酔つた天使の様に軽く眼を閉ぢて頽然として、實驗椅子の上に眠つて居る、此の間略十分時。

(二) 催眠者手に針を刺し貫かれ

たることを知らず

『御覽の通り誠によく眠りました、之れから極く簡単な實驗を御覽に入れます』と云つて、そして『君の手は如何に下げやうとしても段々上へ上る』と暗示を與へて、被術者の手を上に五六寸ばかり離れて、施術者が絲を繰る様に手を動かすと、催眠者の手は感電した蛙の足の様にブルブルと震動しながら段々上へ上つた。其の手が頭より高く上つた時、施術者は更に『君の手は既う動かぬ木の様に堅く成つた』と暗示を與へた。手は其の通り堅く宙にふり上げられた儘動かぬ、施術者はその堅くなつた手を、力まかせに曲げ様としたけれども、實際木の様に動かうとも折れやうともしなかつた。『君の手は既うやはらかに成つた、平常の通り自由になつた、君の手は段々下へ下る』と暗示した、手はその通りになつた。施術者は更に催眠者の手を肩と平行する高さを持ち上げて『君の手は非常に廻る、車の如くよく廻る』と暗示を與へた、催眠者の手はその暗示の通り、大きな圓を描いて車の如く廻つた。次に施術者は手の運動を中止させて、今度は、裁縫用の針を圓テエブルの上から取り上げて『此の手は今君のものでない、君の手でないから針を刺されても痛みを感じない、血も決して出ぬ』と暗示して、三寸ばかりの針を電燈の

光にキラリとかざして、催眠者の腕へズブリと突き刺しズブリと肉深く押し入れた。氣の弱い婦人連は『アラッ』と思はず顔を背けたが、催眠者は少しも感ぜずに、矢張り天使の様に眠つて居た。突き抜けた針の先がポツチリと見える位まで突き刺されても血は少しも出なかつた。施術者は徐にその針を抜き取つて、局部を強く五六回ばかり摩擦した。

(三) 重き者軽くなり、軽き者重くなる

次に施術者は催眠者の手を肩の高さに留まらせて、其の掌に一枚の半紙を載せ、之は非常に重い持ち耐へることが出来ず、手は自然に下へ下る』と暗示した、催眠者の手は其の通り下つた。施術者は掌から其の半紙を除いて、タガヤサンの硯箱を乗せた、そして『之は非常に軽いものである、君の手は自然に上へ上る』と暗示した、催眠者の掌は其の通り段々上へ上つた。『之れは錯覺の實驗です、既う時間も参りましたから覺醒させます』と施術者は會衆に説明して、更に催眠者に向つて『君は非常によく眠つて居る、今僕が一二三と云ふと覺醒する、君は覺醒の後に於いて

も非常に精神が爽快である、非常に頭が軽く氣分が愉快である」と幾度も暗示して三十秒置位に一二三と云つた。催眠者は三と云ふ聲を聞くと非常によく熟睡した人が自然に眼を醒ました様に、愉快げにパツチリと眼を開いた。すると術者と被術者とは實驗室を退けり。

(四) 棒寄の術

次には敏捷さうな十二三の少年と色白い青年が現はれて、覺醒時の精神感應術をやつた。何等の催眠法をも施さず普通の精神状態にある者に信念を以て自己の精神を感應させる一種の幻術の様なものである。

先づ少年を直立させて、左右の手に六尺ばかりの球竿を二本持たせ、手を己れの兩側へ垂れて球竿と球竿の間を一尺ばかり離して持たせ直立させた。色の白い青年は其の少年の正面四五尺ばかりの所に立つて「君はしかと其の棒を持つて、私に其の棒の尖を寄せられない様にする。君が如何に其の棒を寄せまいとしても私が信念で寄せる、私の此處を見詰めて居なさい」と自分の眼と眼との間を指し

て要意をさせてから青年は渾身の力を罩めて兩手を胸の上に合掌する様にして「そうら寄つて來た、そうら寄つて來た」と云つた、少年は何も棒にさわるものがないのに、力を罩めて其棒を寄せまいとしても遂に青年の云ふ通り、ピタリと棒の尖端を寄せられて仕舞つた。同じ事を幾度もして見せた。

(五) 即時即感の妙法

今度は少年の手を丸テエブルの上に突かせ「其の手は如何に机から離さうとしても決して離れない」と青年は云つた。少年は悶躁いて其手を離さうとしたけれども、とても離すことが出来ない。青年は更に會衆に向つて「誰か此手をテエブルから離して御覽なさい」と云ふと會衆の中から二三人の人が出て少年の手を引張つたけれども、到底離すことが出来なかつた色の白い青年が「既う離れる」と云ふと、少年の手は何事もなく自由になつた。此實驗中色の白い青年は渾身に力を罩めて念力を凝して居たので、電燈に映ずる彼の顔は始めよりは赤く充血して居る様に見えた。

(六) 催眠者左手で字を上手に書く

次には再び五分刈頭が施術者となつて北君が被術者として實驗場に現はれた。そして一分時間ばかりの間に催眠させられて、左手を以て『龍虎』『催眠』と云ふ字を二枚書いた。北君は左手にて字を習ふたことがないに此『龍虎』『催眠』と云ふ字は、中々よく出来た。施術者の五分刈頭は北君に『君は僕が一二三と云ひ終ると君は覺醒するが、覺醒するや否や僕の肩に手を掛けて、僕を實驗椅子へ倒して直ぐに催眠させる。然し可成早く覺醒させる』と殘續暗示を與へて覺醒させた。

(七) 催眠者化物の状態を呈せり

覺醒した北君は矢庭に五分刈頭の肩を押付けて之を實驗椅子へ押し倒し、人指と母指を伸ばし五分刈頭の仰向けにした眼の上へふりかむるや、否や物をも云はずジリ／＼と眼に近附けて『エイッ』と大きな聲で叫ぶと五分刈頭はガクリと頭

を垂れて深い催眠状態に陥つた。北君はガクリと垂れた五分刈頭を真直ぐに直して、一寸實驗椅子を離れて『一』と云ふと五分刈頭は鼻の様に眼を大きく開き『二』と聲を掛けるとニヨキニヨキと赤い舌が抜け出て『三』と浴せると裂けるかと危まれる程大きく口を開いた。會衆は一時にドツと吹き出した。婦人連の如きは聲を立て腹を抱へて笑つた。だつて其の筈だ大きく開いた眼はニヨロリと白眼をひき出し、腹の中まで開き通して御座ると云はぬばかりに口を大きく開いて、化物の様に赤い舌をいやと云ふ程出して悶躁いて居るぢやないか。満座を笑倒させた北君は、殘續暗示の通り三分間ばかりで此の滑稽な催眠者を覺醒させ實驗場を退く。

(八) 催眠者看客の骨相を觀て身上を當てる

次に一壯年現はれ自己催眠に依つて骨相學者に人格を變換し、會衆の求めに應じ二人ばかり過去現在未來の運命を占つたがよく適中して黒人も驚嘆するばかりなりし。

之が終ると愈々精神研究會の會長にして、心理學の蘊奥を極め、科學界の未だ足跡を印する能はざる、幽幻不可思議の秘密界に入る秘鑰を握れりと稱讃さるゝ古屋鐵石氏が、黒羽二重五つ紋の羽織にセルの袴をうがつて、艶々しく前額から顛頂まで禿げた頭と肥え太つた體軀を實驗場に現はした。

(九) 笑ふて催眠に反抗する者を咳嗽で深

く催眠せしめ口笛で覺醒せしめたり

鐵石氏は先づ一寸講演をなし後で直ちに實驗臺の傍に立つた。實驗臺には一書生が腰をおろせり。鐵石氏が實驗臺に近寄つて「サア此から催眠させる」と手を其の頭上へ翳すと、書生は今迄喘み堪えた笑がとうとう耐えられずブツと吹き出して獨り「アツハツハツハー」と聲を上げて笑つた。鐵石氏は眞面目になつて幾度も其の頭上へ手を翳したが、彼は益々こみ上げてくる可笑しさを抑へる事が出来ずに聲高く笑つた。

「これぢやどうもならんぢや、咳嗽催眠法に依つて催眠させるより外仕方がない」

と云つて、三間ばかり後へ退いて笑ひ顔れて居る被術者を睨みながら。「ゴホン、ゴホン」と二度咳嗽すると、今迄聲を立て、笑つて居た被術者が、鐵石氏の未だ咳嗽を終らざる中にビタリと笑が止んだ。又眞似た様に「ゴホンゴホン」と咳嗽したかと思ふと、死人の如く顔然とした。「既う非常に深い催眠状態に陥つた」と鐵石氏は言ひつゝ、催眠者の傍へ寄つて更に「深く催眠すれば催眠する程催眠者は正規の人の如き外見を現します」と云つた。

(十) 催眠者大臣に變換して演説をする

鐵石氏は此催眠者に長時間の暗示を與へて、様々な實驗をし會衆に非常な興味を感ぜしめた、表情變化の暗示を與へては、分時の間に西歐の名優に見るが如き極端なる喜怒哀樂の情を表はし、人格變換の暗示を與へて、或は一口狂言師として新舊兩派の種々なる狂言を演ぜしめ、藝者として端唄を唄ひ、月琴を弾き、音樂につれて躍り、然かも其の態度音聲に至るまで如何にも女らしく、藝者らしく、或は高峰筑風として琵琶歌を唄ひ、呂昇としては義太夫を語り、其の節廻し音聲まで高峰筑風

及び呂昇のそれに似て聴衆を感動せしめた、會衆の注文により時の遞信大臣の後藤男に人格を變換して、鐵道問題に關する演説をさせたり、唯に人間界の人格に變換した許りでなく、或は鷄に成り或は犬になる妙術に、滿座悶として唯驚嘆感激の深きうごめきを聞くのみであつた。

僕も思はず知らず興に入つて飽く事を知らなかつたが、略一時間三十分にして鐵石氏は、元の如く被術者を實驗臺に上らせ、三間ばかり離れて『ヒヒ』と二口ばかり口笛を吹き鳴らすと、被術者はパツチリ覺醒して更に催眠中に與へられた、殘續暗示により、三步前進して立つた儘再び催眠状態に入つて聲高く『君が代』の唱歌を歌つて、全く覺醒して實驗場を退いた。

第六章

催眠者が阿呆陀羅經、劍舞術士、鳶、狐、獨逸人、支那人に變換し奇妙奇天烈の事をする

(大正二年二月十八、二十二、二十四、二十八日發行「中央新聞」より抄録)

(一) 人格變換で書生が學者にも犬にも成る

記者は過般芝區琴平町三、精神研究會長古屋鐵石君の實驗を見た事が有つた、場所は淺草區清島町統一閣で數百の群衆の面前であつたので思切つた飛び放れた實驗が出来ぬ、と前提され古屋氏の面前に引き出された一人の書生は、直ぐに催眠状態に陥り古屋氏の暗示通り種々なる人格に變換した、第一には阿呆陀羅經になつて左手の拳固を右手の指で叩きながら非常に節廻し面白くやつてゐるが、古屋氏が今度は幼稚園の生徒になると暗示すると、確と止めて暫くして幼稚園の生徒になつて唱歌を而も小兒の如く優しい聲で唱ひながら、手を振り足を上げ幼稚園の兒童のする遊戯を寸分誤たずにやる、次は藝者になつて『私みたいな者をそんな可愛がつて下すつてホ、ホ、彌つちや嫌ですよ』と袖を口に當て、笑つたり艶な姿を作つたりする、繼て三味線を弾きつゝ、端唄や都々逸を唄ふ、『ハ浮いた浮いた』と大陽氣になる、果ては犬になつて四匄いで吠え立てる劍舞術士になつて幻覺の日本刀を振つて吟じ且つ舞ふた。

(二) 催眠者の知らぬ者に人格が變換せり

三三

此の不思議な實驗と研究とは如何なる程度まで進められて居るのであらうか、第一に起る疑問は如何にして人格を變換し得るやと云ふのだが、同じ人格變換でも催眠者が嘗て見聞したる事有る者に變換する場合は、藝者とは如何なる者、犬は斯く有る可き者と云ふ事を知悉して居るので、術者の暗示に依つて自己がそれに成り濟まし、所謂潜在精神が活躍するのである、けれども催眠者が正規の状態に有る時、未だ嘗つて見た事も聞いた事も無い、所謂些の潜在精神をも有せざる者に變換し得るやと云ふに、精神研究會の實驗に依れば、術者も催眠者も知らぬ處の立會人たる第三者の指定せる人に變換させた事があつた、立會人は己の知人なる『望月梅太郎』にして、呉れと注文したので、術者は直に『君は望月梅太郎である』と暗示したるに、催眠者は右手と左手と兩方共不隨になつて、兩手をダラリと下げて不具な人となり、『兩手が不隨で困る』と云つた、立會人は之を見て非常に感心し、私の知つて居る望月梅太郎は兩手が利きませんと言つたさうである、又或時スプリ

ングの何なるかを覺醒時に於いては知らぬ催眠者に對して『君はスプリングである』と暗示した所、螺旋のバネの如き形となつた由である、其他幾多の相似たる實驗に依つて此の不思議なる變換は催眠者に千里眼的現象加はりて、暗示せられし物を知る故であらうと推斷されて居る。

(三) 催眠者を東京市に變換せる現象

然らば催眠者は身體にて形容する能はざる者に變換し得るであらうか、例へば術者が催眠者に向つて『君は東京市である』と暗示した場合はどうであらう。現在の實驗狀況に依れば東京市であると暗示された催眠者は多くの場合唯モジモジして居るのみで、何等の形容をもしなかつた由であるが、唯一回或夜の實驗に催眠者は立派に東京市に成り濟し頻りに腰の邊を撫で廻し『熱い〜』と連呼したので『どうしてそんなに熱いか』と尋ねたら『今牛込が火事で盛んに燃えて居る』と答へたので立合つて居た牛込の人は驚いて、取るものも取敢ず歸宅する、と果して牛込に火事があつて而も其の實驗中の時間と符節を合せた如く時間

が一致して居たので驚いた由である。

(四) 催眠者を鳶に變換せる現象

又或時『君は鳶である、今空中を舞つて居る所だ』と暗示した時、催眠者は兩手を擴げて立ち空中を舞ひつゝ下界を眺むる姿勢をしたので、『君は鳶で空中を舞つて居ながら足が地に着いて居る道理が無い、早く足を地上より離して充分に飛び廻る』と暗示したけれども彼の足は疊を離れなかつた、之等は尙ほ研究の餘地が充分有るであらうと思ふ、さらば一旦變換した人格をもとの人格に戻さずして其の儘更に他の人格に變換なし得るか、之れも幾多の實驗に依つて『君は犬である』と暗示し催眠者が犬になつて吠えたり狂つたりして居るのを、其の儘元の本人に戻らせずに『君は今度は狐になつた』と言へば直に狐になる由である、記者も又之を實際に目撃したのであつた。

(五) 催眠者を家康と新聞賣に變換せし現象

又或時の實驗に一人の書生を徳川家康に變換せしめ置き、實驗を見物に來りし傍の人が『公にはお茶を召上り候へ』と恭しく湯を捧げると催眠者は其の湯を飲み且つ關ヶ原合戦の模様など様々に其の見物人と物語つた、而し不思議な事には立會人が家康に關係無き事や家康以外の人に對して囁す事は家康の耳には一切入らざるのみならず、『君は家康にあらずして催眠者也』と見物人が言つても少しも知らぬ風をなせり、又或時新聞賣に變換された催眠者が『新聞は一錢々々』と客を呼ぶので、立會人が『新聞屋さん新聞を一枚賣つて呉れ』と言ふと『何新聞を』と尋ね、望まれた通りの新聞のつもりで幻覺の新聞紙を渡し、『そら十錢でお釣り』と言はれて幻覺の十錢銀貨を受け取り懐から財布を出し之を投げ入れ更に幻覺の釣錢を『これが五錢でこちらが四錢』と言つて其の立會人に渡した、所が此の場合見物人の一人が『君は新聞賣では無い書生ではないか』と暗示を與へたが知らぬ風をして居た、此の實驗に依れば催眠者は術者以外の第三者と催眠中に於ても談話すれども、變換したる其の人格に關係せる範圍内のみに於て對話するを得、而して又第三者がする其他の暗示は催眠者に何等の影響をも與へぬ